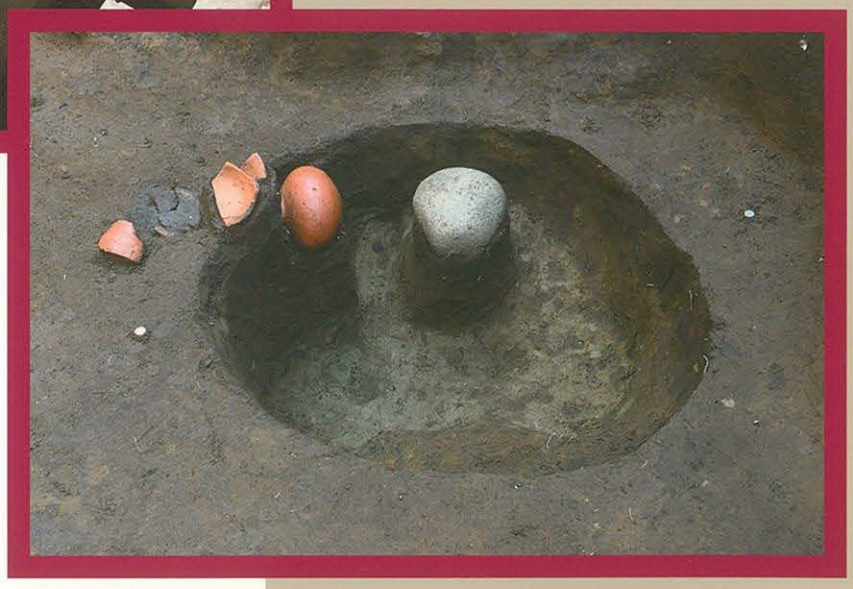
THE ANNUAL REPORT ON ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES
KUMAMOTO UNIVERSITY/2019

26

熊本大学埋蔵文化財調査センター年報　2019年度



2021　熊本大学埋蔵文化財調査センター

THE ANNUAL REPORT ON ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES

KUMAMOTO UNIVERSITY/2019

26

熊本大学埋蔵文化財調査センター年報　2019年度

2021　熊本大学埋蔵文化財調査センター

序　文

本年報は，2019年度に実施した調査に関するものである．

2019年度は，黒髪地区，京町地区，本荘地区，渡鹿地区，新南部地区，新屋敷地区，大江地区，益城地区，松島地区にわたる計23件（発掘調査３件，工事立会19件，自主的立会１件）の調査を実施した．その結果，弥生時代から古代・近世・近代にわたる遺構・遺物を確認しており，それらには熊本地域の歴史復元の貴重な資料となるものが含まれている．

特筆すべきは，黒髪南地区における工学部研究資料館災害復旧工事に伴う発掘調査である．工学部研究資料館は国の重要文化財に指定されている建物であり，その内部壁基礎の周囲を掘削したところ，近代の遺構群が検出された．これは，建物の建築段階から改修段階の様相を復元し得る非常に貴重な資料である．近代建築技術史の分野で大きく貢献することが予想される．なお，この調査成果については，安全確保のために歴史学・建築学関係者に限定して現地説明会を実施した．

2019年度は，熊本地震で大きな被害があった建物の復旧に係る調査をほぼ終えることができたが，本荘中地区・北地区におけるライフライン再生工事に伴う発掘調査も本格的に始まり，数年間にわたる予定である．2019年度の発掘調査業務で大きな役割を果たしたのは，2019年４月に着任した新里亮人助教である．本センターの業務増大等の事情を理解して御尽力くださった原田信志学長をはじめとする関係各位に，この場を借りて厚く御礼申し上げる．今後とも本センターへの御理解と御協力を広くお願いする次第である．

2021年２月

国立大学法人熊本大学埋蔵文化財調査センター

センター長　伊 藤 正 彦

例　言

1．本書は熊本大学構内において，2019年４月１日から2020年３月末日までにおこなわれた熊本大学埋蔵文化財調査センターによる埋蔵文化財の調査および活動内容に関する年次報告書である．熊本大学構内遺跡の名称は，周知の埋蔵文化財包蔵地としての遺跡名ではなく，熊本大学の敷地に埋蔵する遺跡の総称である．

2．構内遺跡の調査は，昨年度に引き続き，年次と調査順を示す調査番号で表すこととし，出土遺物や記録類もこの番号で整理・管理している．

3．遺跡略号は，地区ごとにローマ字３文字で，以下のように表記した．黒髪町遺跡群黒髪南地区（KKS），同北地区（KKN），本庄遺跡医学部構内（HJM），同病院構内（HJH），医学部保健学科構内（KHJ），京町台遺跡教育学部附属小中学校構内（KMS），大江遺跡群薬学部構内（HJP），大江遺跡群渡鹿宿舎敷地内（OER）．

4．遺物への注記は，遺跡略号＋調査番号＋出土遺構（位置）の順でおこなった．

5．本書に掲載した遺物やその他の出土遺物および調査にかかわる記録類はすべて熊本大学埋蔵文化財調査センターにて保管している．

6．本書中の土層の色調表記は、調査担当者の現場での認識によるもので、土色帳等によって比定されたものではない。黒髪地区の基本土層は『熊本大学構内遺跡発掘調査報告14』を、本荘地区の基本土層は『熊本大学構内遺跡発掘調査報告15』を参照されたい。なお，本書で用いる「地山」の用語は，人類の痕跡が登場する以前の堆積層や基盤層を指す．

7．本書の執筆は，序文を伊藤、Ⅰ章を山野，Ⅱ章を大坪・新里・山野・土野，Ⅲ・Ⅳ章、付篇および表を山野，英文サマリー・ハングルサマリーを山野・大坪、抄録を山野がおこなった．

8．本書の編集は山野がおこなった．

目　次

＜本文目次＞

第Ⅰ章　本年度の調査概要――1

第Ⅱ章　調査の記録――5

Ⅱ－１　黒髪北地区――5

1．（黒髪他）敷地境界周辺等樹木剪定業務に伴う工事立会（1909）――5

2．（黒髪北）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事（屋外プール廻り）に伴う工事立会（1912）――9

3．（黒髪北）環境安全センター西側等屋外ガス管盛替工事に伴う工事立会（1917）――11

Ⅱ－２　黒髪南地区――13

1．（黒髪南）黒髪南Ｃ２樹木復旧に伴う工事立会（1902）――13

2．（黒髪南）工学部研究資料館災害復旧工事に伴う発掘調査（1903）――13

3．（黒髪北他）五高記念館他災害復旧工事に伴う工事立会（1823）――16

4．（黒髪南）理学部圃場フェンス取設工事に伴う工事立会（1921）――16

Ⅱ－３　本荘北地区――18

1．（医病）基幹・環境整備（屋外環境整備等）工事（排水溝等）に伴う工事立会（1904）――18

2．（本荘北）基幹・環境整備（旧臨床研究棟取り壊し）工事（建物基礎撤去）に伴う発掘調査（1907）――20

3．（医病）設備管理棟東側等屋外雨水管取替工事に伴う工事立会（1910）――21

4．（本荘北）基幹・環境整備（旧臨床研究棟取り壊し）工事（機械設備撤去）に伴う工事立会（1914）――21

Ⅱ－４　本荘中地区――22

1．（本荘中）ライフライン再生（給排水設備等）工事（排水設備等）に伴う発掘調査（1911）――22

2．（本荘中）ライフライン再生（受配電設備）工事（コンクリート柱）に伴う工事立会（1913）――24

Ⅱ－５　渡鹿地区――25

1．（渡鹿）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事（敷地境界東側）に伴う工事立会（1915）――25

2．（渡鹿２）屋外ガス管更新工事に伴う工事立会（1817）――27

Ⅱ－６　京町地区――29

1．（京町）教育学部附属中学校屋外トイレ新営機械設備工事に伴う工事立会（1901）――29

2．（京町）教育学部附属中学校西校舎西側暗渠調査に伴う工事立会（1905）――30

3．（京町）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事（北東側）に伴う工事立会（1916）――31

4．（京町）屋外排水設備（暗渠等）改修工事に伴う工事立会（1919）――33

Ⅱ－７　新屋敷地区――34

1．（新屋敷１）駐車場整備工事に伴う工事立会（1906）――34

Ⅱ－８　新南部地区――36

1．（新南部）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事に伴う工事立会（1918）――36

Ⅱ－９　益城地区――38

1．（益城）パスルパワー試験場実験研究棟接地工事に伴う工事立会（1908）――38

Ⅱ－10　松島地区――39

1．（松島町）屋外給水管漏水修繕工事に伴う工事立会（1920）――39

第Ⅲ章　黒髪地区における近代遺跡の調査事例――43

1．はじめに－近代遺跡の調査について－

2．黒髪北地区における近代遺跡の調査事例

3．黒髪南地区における近代遺跡の調査事例

4．おわりに

第Ⅳ章　文化財活用活動の記録――55

1．特別展示『黒髪のむかし展』

2．熊本市歴史ウォークへの協力

3．日韓新石器時代研究会での資料見学会

4．熊本大学オープンキャンパス2019

5．ホームカミングデー2019

6．授業協力

Summary――57

付篇１――58

付篇２――61

報告書抄録――63

＜図版目次＞

図１　熊本大学構内遺跡と市街地周辺遺跡の分布図（1/25000）――2
図２　黒髪北地区西半における調査地点配置図(1/2000)――6
図３　黒髪北地区東半における調査地点配置図(1/2000)――7
図４　黒髪南地区における調査地点配置図（1/2000）――14
図５　本荘北地区における調査地点配置図（1/2000）――19
図６　本荘中･南地区における調査地点配置図（1/2000）――23
図７　渡鹿地区１における調査地点配置図（1/2000）――25
図８　渡鹿地区２における調査地点配置図（1/1000）――27
図９　京町地区における調査地点配置図（1/2000）―29
図10　新屋敷地区における調査地点配置図（1/400）――35
図11　新南部地区における調査地点配置図（1/1000）――37
図12　益城地区における調査地点配置図（1/2000）――38
図13　松島地区における調査地点配置図（1/1000）――39
図14　黒髪地区における煉瓦建築と近代遺跡の調査地点（1/4000）――44

＜写真目次＞

写真１　①調査区西壁土層断面（東より）――5
写真２　①掘削状況（東より）――5
写真３　②調査区南壁土層断面（北より）――8
写真４　②掘削状況（北より）――8
写真５　③掘削状況（北より）――8
写真６　④掘削作業風景（北より）――8
写真７　⑤掘削状況（西より）――8
写真８　⑥重機掘削作業風景（北より）――8
写真９　⑥掘削状況（北より）――8
写真10　⑥南壁土層断面（北より）――8
写真11　⑦重機掘削作業風景（北より）――9
写真12　⑦掘削状況（西より）――9
写真13　②掘削状況（北より）――10
写真14　④煉瓦基礎検出状況（東より）――10
写真15　⑤掘削作業風景（東より）――10
写真16　⑥掘削状況（東より）――10
写真17　⑦重機掘削作業風景（西より）――10
写真18　⑦掘削状況（東より）――10
写真19　⑧重機掘削作業風景（北東より）――10
写真20　⑧掘削状況（東より）――10
写真21　⑨～⑪遠景（北東より）――11
写真22　⑨掘削状況（南より）――11
写真23　⑪掘削状況（北より）――11
写真24　①－２掘削完了状況（北より）――12
写真25　③調査区近景（北より）――12
写真26　③掘削完了状況（南より）――12
写真27　④調査区近景（南より）――12
写真28　④地山検出状況（南より）――12
写真29　⑥包含層検出状況（北より）――13
写真30　⑦包含層検出状況（北より）――13
写真31　旧ボイラー煙道および北階段基礎検出状況（南より）――15
写真32　北入口床下基礎検出状況（南より）――15
写真33　束石基礎検出状況（南西より）――15
写真34　竪穴建物検出状況（北東より）――15
写真35　溝検出状況（北東より）――15
写真36　現場公開風景――15
写真37　小資料室内旧ボイラー基礎検出状況（南より）――16
写真38　小資料室内旧ボイラー煙道検出状況（東より）――16
写真39　人力掘削作業風景（南より）――17
写真40　①掘削状況（東より）――17
写真41　②掘削状況（東より）――17
写真42　③掘削状況（東より）――17
写真43　④掘削状況（東より）――17
写真44　①－５調査区完掘状況（南東より）――18
写真45　②－３調査区完掘状況（南より）――18
写真46　③－２調査区完掘状況（南より）――18
写真47　③－３調査区完掘状況（南東より）――18
写真48　③－４調査区完掘状況（北より）――20
写真49　④－１調査区検出土坑内遺物出土状況（北より）――20
写真50　フーチング基礎検出状況（南より）――21
写真51　遺構残存状況（北より）――21
写真52　掘削状況（南より）――21
写真53　機械検出状況１（北より）――21
写真54　機械検出状況２（北より）――21
写真55　①調査区近景（西より）――24
写真56　①－２古代道路検出状況（南より）――24

写真57　①－4c 古墳時代～古代竪穴建物検出状況（南より）――24
写真58　①－4e 近代建物検出状況（南より）――24
写真59　掘削完了状況（北より）――24
写真60　①地点試掘作業風景（南より）――25
写真61　①地点試掘掘削状況（南より）――26
写真62　①地点試掘既存基礎の状況（西より）――26
写真63　③地点試掘大学側掘削状況（西より）――26
写真64　③地点試掘大学側掘削状況（南より）――26
写真65　テニスコート東側新基礎掘削作業風景（北より）――26
写真66　④地点試掘包含層検出状況（南より）――26
写真67　作業風景（北より）――28
写真68　掘削状況（南より）――28
写真69　東壁土層断面（西より）――28
写真70　明黄褐色層検出状況（西より）――28
写真71　①・②調査区近景（南より）――30
写真72　②ａ遺構検出状況（南より）――30
写真73　②ａ遺構土層断面（東より）――30
写真74　調査区近景（北東より）――31
写真75　コンクリート製暗渠蓋検出状況（東より）――31
写真76　竪坑脇掘削状況（東より）――31
写真77　Ｂ・Ｃ工区（東より）――32
写真78　①区重機掘削作業風景（南東より）――32
写真79　①区掘削状況（西より）――32
写真80　②区重機掘削風景（東より）――32
写真81　②区掘削後状況（南より）――32
写真82　③区掘削後状況（南より）――32
写真83　④掘削状況（南西より）――32
写真84　⑤掘削状況（西より）――32
写真85　掘削作業風景（南東より）――33
写真86　掘削状況（北東より）――33
写真87　①地点作業風景（南より）――34
写真88　①地点掘削状況（南より）――34
写真89　①地点掘削状況（南より）――34
写真90　②地点作業風景（東より）――34
写真91　②地点掘削状況（南より）――34
写真92　①掘削後状況（北より）――36
写真93　②掘削状況（南より）――36
写真94　③掘削状況（南より）――36
写真95　③掘削状況（東より）――36
写真96　④重機掘削作業風景（南より）――37
写真97　⑤掘削状況（南より）――37
写真98　⑥・⑦掘削作業風景（北東より）――37
写真99　作業風景（北東より）――38
写真100　北壁土層断面（南東より）――38
写真101　調査地遠景（北より）――40
写真102　調査地受水槽付近遠景（北より）――40
写真103　重機掘削作業風景（北より）――40
写真104　水管引き入れ口掘削状況（南より）――40
写真105　トレンチＡ～Ｃ掘削状況（南より）――40
写真106　トレンチＡ西壁土層断面（東より）――41
写真107　トレンチＢ西壁土層断面（東より）――41
写真108　トレンチＣ西壁土層断面（東より）――41
写真109　トレンチＤ掘削状況（西より）――41
写真110　トレンチＤ北壁土層断面（南より）――41
写真111　トレンチＤ掘削状況（東より）――41
写真112　正門（南より）――45
写真113　旧第五高等学校本館（南より）――45
写真114　化学実験場（北西より）――46
写真115　旧瓦斯製造機械室（西より）――46
写真116　物理実験場跡地煉瓦構造物（南東より）――46
写真117　正門煉瓦基礎検出状況（北より：1360調査地点）――46
写真118　旧本館煉瓦基礎検出状況（北東より：1360調査地点）――46
写真119　化学実験場煉瓦基礎検出状況（東より：1360調査地点）――46
写真120　習学寮厨房煉瓦基礎検出状況（北東より：1528調査地点）――47
写真121　石垣撤去状況（南より：1717調査地点）――47
写真122　薬莢検出状況（北より：9406調査地点）――48
写真123　旧熊本高等工業学校機械実験場（北東より）――49
写真124　旧熊本高等工業学校本館（北より）――49
写真125　旧熊本高等工業学校書庫（南西より）――49
写真126　旧熊本高等工業学校標本館（北より）――49
写真127　工友寮炊事場栗石基礎検出状況（北より：1310調査地点）――49
写真128　工友寮関連遺物出土状況（東より：1310調査地点）――49
写真129　栗石基礎検出状況（南より：1310調査地点）――49
写真130　Ｉ区煉瓦基礎検出状況（北西より：1429他調査地点）――50
写真131　Ｉ区コンクリート基礎掘方内瓦礫検出状況（南より：1429他調査地点）――50

写真132　Ⅱ区熊本高等工業学校初代本館基礎検出状況（北より：1429他調査地点）――――50
写真133　Ⅳ２区建物内独立柱基礎検出状況（南より：1429他調査地点）――――50
写真134　土坑墓群検出状況（南より：1309調査地点）――――51
写真135　Ⅲ区西側煉瓦基礎検出状況（南より：1724調査地点）――――51
写真136　Ⅲ区東側煉瓦検出状況（北より：1724調査地点）――――51
写真137　遺構完掘状況（南より：0102調査地点）――51
写真138　特別展示の解説の様子 ――――55
写真139　熊本市歴史ウォークの展示説明の様子――――55
写真140　熊本市歴史ウォークの縄文遺跡説明の様子――――55
写真141　日韓新石器時代研究会資料見学の様子――――56
写真142　オープンキャンパスの様子 ――――56
写真143　ホームカミングデーの様子 ――――56

＜表目次＞

表１　熊本大学敷地における周知の埋蔵文化財包蔵地一覧表――――1
表２　2019年度調査一覧表――――3
表３　熊本大学構内遺跡の近代遺跡調査地点一覧表――――43

第Ⅰ章　本年度の調査概要

熊本大学埋蔵文化財調査センター（以下，本センター）では，2019年度，表２のとおり，発掘調査３件，工事立合19件，自主的立会１件を実施した．このうち1817調査地点と1823調査地点の２件は前年度からの継続である．また，1823調査地点，1904調査地点，1910調査地点，1911調査地点の４件は次年度まで継続している．

本年度実施した主要な調査は，黒髪南地区における工学部研究資料館災害復旧工事に伴う発掘調査（1903調査地点），本荘北地区における基幹・環境整備（屋外環境整備等）工事（排水溝等）に伴う工事立会（1904調査地点），基幹・環境整備（旧臨床研究棟取り壊し）工事（建物基礎撤去）に伴う発掘調査（1907調査地点），本荘中地区におけるライフライン再生（給排設備等）工事（排水設備等）に伴う発掘調査（1911調査地点）である．

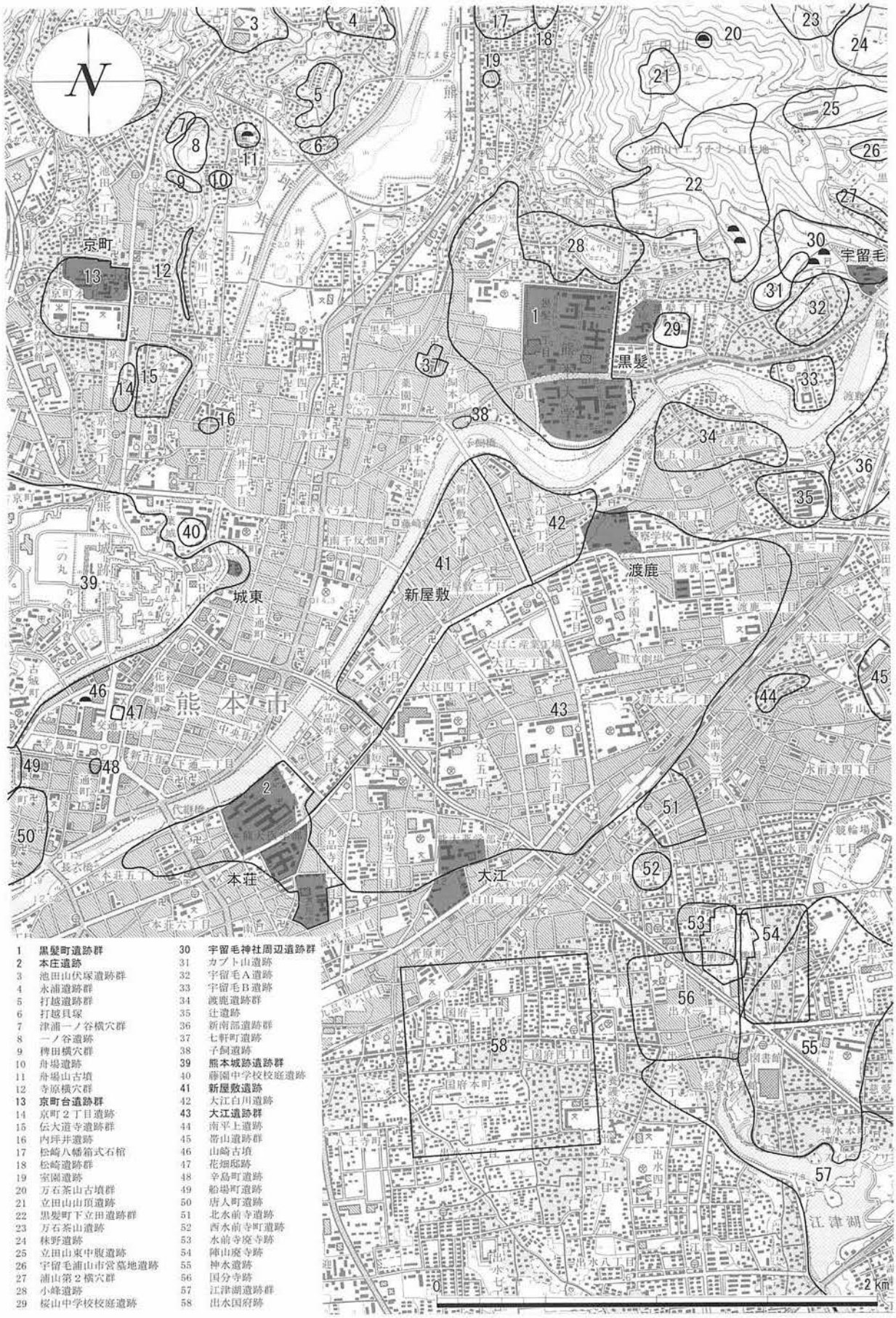
2017年度からは，2016年４月に発生した熊本地震により大きな破壊を受けた文化財や建物の復旧事業が開始された．1823調査地点や1903調査地点ではこれら工事に伴う工事立会・発掘調査を実施している．また本年度から本荘北地区では，旧管理棟取り壊し後の環境整備に係る工事が始まった．これに伴って本センターでは8,000㎡を超える大規模な調査に長期間にわたって従事することとなった．加えて本荘中地区では給排設備などライフラインの更新に伴う発掘調査も並行して実施する運びとなった．このほか地震対策に係るブロック塀の整備事業など，本学施設整備事業に伴う小・中規模の工事立会が通年実施されている．以下に各地区における主要な調査成果について概要をまとめたい．

黒髪南地区の工学部研究資料館災害復旧工事（1903調査地点）および五高記念館他災害復旧工事（1823調査地点）では，工学部研究資料館の基礎構造の補強に係る工事に伴う工事立会・発掘調査が実施された．工学部研究資料館は，熊本大学工学部の前身である熊本高等工業学校の機械実験工場であり，建物は1994年に国の重要文化財に指定されている．1903調査地点では，現在の建物内部壁基礎の周囲を掘削したところ，近代の遺構群が検出された．すなわち柱掘方・旧ボイラー煙道，束石基礎，床下基礎，階段基礎，機械基礎などである．これら遺構の検出状況からは，建物の建築段階から機械搬入時，床面張替えに伴う改修段階の様子を復元することが可能である．1823調査地点では建物西側の小資料室およびミー

表１　熊本大学敷地における周知の埋蔵文化財包蔵地一覧表（アミ部分は本年度調査した地区を示す）

No.	地区名（学部・施設名）	所　在　地	遺跡名称	遺跡の種類	遺跡の時代	備　　考
1	黒髪北地区（法・文・教等）	熊本市中央区黒髪2丁目40-1	黒髪町遺跡群	集落址・墓地	縄文・弥生 奈良・平安 近世・近代	
2	黒髪東地区（教育学部附属特別支援学校）	熊本市中央区黒髪5丁目17-1				
3	黒髪南地区（工・理）	熊本市中央区黒髪2丁目39-1				
4	宇留毛地区（学生寄宿舎・職員宿舎等）	熊本市中央区黒髪7丁目	宇留毛神社周辺遺跡群	散布地	弥生・奈良 平安	
5	本荘北地区（医学部附属病院・医学部等）	熊本市中央区本荘1丁目1-1	本庄遺跡 （熊大病院敷地遺跡）	散布地・集落址・墓地	縄文・弥生 古墳・奈良 平安・中世 近世・近代	
6	本荘中地区（発生医学研究所，エイズ学研究センター等）	熊本市中央区本荘2丁目2-1				
7	本荘南地区（保健学科等）	熊本市中央区九品寺4丁目24-1				周辺遺跡
8	大江地区（薬学部等）	熊本市中央区大江本町5-1	大江遺跡群	官衙址	奈良・平安	周辺遺跡
9	渡鹿地区1（職員宿舎）	熊本市中央区渡鹿1丁目16		集落址		
10	渡鹿地区2（課外活動施設・屋内運動場）	熊本市中央区渡鹿4丁目1-1				
11	京町地区（教育学部附属小・中学校）	熊本市中央区京町本丁5-12	京町台遺跡	集落址	弥生・近世	
12	城東地区（教育学部附属幼稚園）	熊本市中央区城東町5-9	熊本城址	城館址・熊本城関連遺構	近世	
13	新屋敷地区1（職員宿舎）	熊本市中央区新屋敷1丁目9-11	新屋敷遺跡	集落址	奈良・平安	
14	新屋敷地区2（職員宿舎）	熊本市中央区新屋敷2丁目15-3				
15	新南部地区（薬学部管理棟）	熊本市東区新南部6丁目5-8	新南部遺跡	散布地	縄文・弥生	
16	益城地区（地域共同ラボラトリー）	上益城郡益城町田原2081-7	上面ノ平遺跡	散布地	縄文～中世	
17	松島地区（沿岸域環境科学教育研究センター）	上天草市松島町合津6061	前島貝塚	集落址	縄文・弥生	1995年度の調査で貝塚でないことが判明

※遺跡の種類、時代は近年の調査成果を反映させた。



1	**黒髪町遺跡群**	30	**宇留毛神社周辺遺跡群**
2	**本庄遺跡**	31	カブト山遺跡
3	池田山伏塚遺跡群	32	宇留毛A遺跡
4	永浦遺跡群	33	宇留毛B遺跡
5	打越遺跡群	34	渡鹿遺跡群
6	打越貝塚	35	辻遺跡
7	津浦一ノ谷横穴群	36	新南部遺跡群
8	一ノ谷遺跡	37	七軒町遺跡
9	稗田横穴群	38	子飼遺跡
10	舟場遺跡	39	**熊本城跡遺跡群**
11	舟場山古墳	40	藤園中学校校庭遺跡
12	寺原横穴群	41	**新屋敷遺跡**
13	**京町台遺跡群**	42	大江白川遺跡
14	京町２丁目遺跡	43	**大江遺跡群**
15	伝大道寺遺跡群	44	南平上遺跡
16	内坪井遺跡	45	帯山遺跡群
17	松崎八幡箱式石棺	46	山崎古墳
18	松崎遺跡群	47	花畑邸跡
19	室園遺跡	48	辛島町遺跡
20	万石茶山古墳群	49	船場町遺跡
21	立田山山頂遺跡	50	唐人町遺跡
22	黒髪町下立田遺跡群	51	北水前寺遺跡
23	万石茶山遺跡	52	西水前寺町遺跡
24	秣野遺跡	53	水前寺廃寺跡
25	立田山東中腹遺跡	54	陣山廃寺跡
26	宇留毛浦山市営墓地遺跡	55	神水遺跡
27	浦山第２横穴群	56	国分寺跡
28	小峰遺跡	57	江津湖遺跡群
29	桜山中学校校庭遺跡	58	出水国府跡

図１　熊本大学構内遺跡と市街地周辺遺跡の分布図（1/25000）

表２　2019年度調査一覧表

調査期日	調査番号	地点名	調査の種類	調査面積	時代	遺構・遺物
19.5.10・13・14・17・21	１８１７	（渡鹿2）外ガス管更新工事	工事立会	91.73㎡	近代	陶器
19.4.15～17	１９０１	（京町）教育学部附属中学校屋外トイレ新営機械設備工事	工事立会	44.5㎡	弥生・古代 近世・近代	弥生土器・須恵器・陶磁器・ガラス
19.4.25・26	１９０２	（黒髪南）黒髪南 C2樹木復旧	工事立会	98.00㎡	古代	土師器
19.5.27～7.31	１９０３	（黒髪南）工学部研究資料館災害復旧工事	発掘調査	147.61㎡	古代・近世 近代	竪穴建物・溝・道路・耕作痕・束石基礎・機械基礎・階段基礎・煉瓦廃棄土坑・足場痕・旧ボイラー煙道，土師器・須恵器・陶磁器・煉瓦・瓦・ガラス製品
19.5.30・31，6.6・10～12・17・18・20・7.28～継続中	１８２３	（黒髪北他）五高記念館他災害復旧工事	工事立会	53.32㎡	近代	旧ボイラー基礎・耐火煉瓦
19.7.8～継続中	１９０４	（医病）基幹・環境整備（屋外環境整備等）工事（排水溝等）	工事立会	6231.10㎡	古代・近世 近代	溝・竪穴建物・道路，土師器・須恵器・陶磁器
19.8.29，9.4	１９０５	（京町）教育学部附属中学校西校舎西側暗渠調査	工事立会	20.50㎡		
19.9.19	１９０６	（新屋敷1）駐車場整備工事	工事立会	543.40㎡		
19.10.8～12.6	１９０７	（本荘北）基幹・環境整備（旧臨床研究棟取り壊し）工事（建物基礎撤去）	発掘調査	2954.20㎡		
19.11.1	１９０８	（益城）パスルパワー試験場実験研究棟接地工事	自主立会	150㎡		
19.12.3・5・6	１９０９	（黒髪他）敷地境界周辺等樹木剪定業務	工事立会	85.75㎡	近代	縁石
19.12.4～継続中	１９１０	（医病）設備管理棟東側等屋外雨水管取替工事	工事立会	17.15㎡		
19.12.9～継続中	１９１１	（本荘中）ライフライン再生（給排設備等）工事（排水設備等）	発掘調査	1254.90㎡	古墳・古代 近世・近代	竪穴建物・溝・道路・近代建物基礎，土師器・須恵器・陶磁器・瓦・ガラス製品
19.12.16・22	１９１２	（黒髪北）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事（屋外プール廻り）	工事立会	274.80㎡	近代	煉瓦基礎
19.12.20	１９１３	（本荘中）ライフライン再生（受配電設備）工事（コンクリート柱）	工事立会	0.20㎡		
20.1.15	１９１４	（本荘北）基幹・環境整備（旧臨床研究棟取り壊し）工事（機械設備撤去）	工事立会	229.30㎡		
20.1.20，2.13	１９１５	（渡鹿）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事（敷地境界東側）	工事立会	106.10㎡		
20.1.20	１９１６	（京町）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事（北東側）	工事立会	61.30㎡		
20.2.4・10・13・14・18～21	１９１７	（黒髪北）環境安全センター西側等屋外ガス管盛替工事	工事立会	275.70㎡	古代・近世 近代	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・硬貨
20.2.10	１９１８	（新南部）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事	工事立会	27.90㎡		
19.2.19	１９１９	（京町）屋外排水設備（暗渠等）改修工事	工事立会	18.10㎡		
20.3.9	１９２０	（松島町）屋外給水管漏水修繕工事	工事立会	21.40㎡		
20.3.16	１９２１	（黒髪南）理学部圃場フェンス取設工事	工事立会	1.90㎡	近代	工友寮関連栗石基礎

※本荘北地区1904調査地点は，93条第１項届け出に対し，熊本市より工事立会での指導が下りたが，調査地点の広い範囲で遺構が検出された。
※益城地区1908調査地点は，周知の埋蔵文化財包蔵地外だが，遺跡の隣接地であるため確認のためにセンターが自主的に立会を実施した。

ティングルームの各内壁に沿った掘削を実施したところ，前者より，旧ボイラー基礎および煙道を検出している．煙突はすでに撤去されて存在しないが，これに係る地下施設は地下で保存された状態にあったのである．煙道には耐火煉瓦が使用されており，既往の大学構内調査はもちろん熊本県下でも出土例の少ない資料として貴重である．本調査地点の調査成果について，6月29日に関係者に限定して現地説明会を実施している．

このほか，今年度には黒髪北地区1912調査地点では，プール南東角の工事立会において，第五高等学校の「第一教師館」の煉瓦基礎が検出されている．このように近年，熊本大学構内遺跡では近代の調査事例が増加しており，小規模な立会も含め簡易的な記録保存をおこなってきた．本書第Ⅲ章では本センターで実施してきた近代の調査について黒髪地区の概要をまとめている．

本荘北地区における基幹・環境整備（屋外環境整備等）工事（排水溝等）（1904調査地点）は，旧管理棟の跡地周囲および敷地南端に相当する．浸透桝の設置など工事内容から，施工深度が深く，狭隘な範囲における遺構掘削を余儀なくされた．旧管理棟の取り壊しに係る1708調査地点の発掘調査では，平安時代の竪穴建物や溝などの遺構が検出されたほか，近世・近代の道路遺構が発見されている（吉留・山野編2018）．そのため，本調査でも当該時期の遺構が広い範囲に現存していることが予想された．本年度の調査では，1708調査地点で確認された近世・近代の道路遺構や溝の続きあるいは一部が検出されるなど，既往の調査内容を補完する成果が上がっている．本調査は次年度まで継続して実施されており，今後も本荘地区の各時期の土地利用に関する新たなデータを提供してくれるだろう．

また，本荘中地区におけるライフライン再生（給排設備等）工事（排水設備等）に伴う発掘調査（1911調査地点）では，主として本地区の南側道路部分の調査を実施した．1904調査地点と同様，工事内容上，幅が狭く，深い調査区が多い．本調査では，古墳時代～古代のピット，竪穴建物，溝，道路などの遺構や，近代の建物基礎が発見されている．近年，黒髪南1310調査地点など，こうしたライフライン再生に係る発掘調査が継続して実施されている．こうした発掘調査では，遺跡を部分的に開放するため，その全容を把握しづらいという難点がある一方で，広範囲における土層の堆積状況を知ることができ，今後，周辺地域の調査を進める上で三次元的に有用なデータを得ることができる．

今年度で，熊本地震で大きな被害のあった建物の復旧に係る調査がほぼ完了した．2017年から始まったこれらの復旧事業に係る調査では，今年度の黒髪南地区1903調査地点を始め，多くの重要な知見が得られている．

この復旧事業によって遅れ気味であった各地区の整備事業が継続的に実施されていく予定である．今後も関係各所の理解・協力のもと，本学の再開発事業の円滑な推進と埋蔵文化財の保存活動に努めていく所存である．

第Ⅱ章　調査の記録

Ⅱ－1　黒髪北地区　（図2・3参照）

1．（黒髪他）敷地境界周辺等樹木剪定業務に伴う工事立会（1909）

＜調査期間＞

2019年12月3日～12月6日

＜調査面積＞

85.75㎡

＜調査員＞

山野ケン陽次郎・士野雄貴.

＜調査概要・結果＞

五高記念館南側，サインカーブ周辺の樹木抜根に係る工事立会を実施した．抜根予定の樹木はマキやマツ，ヒマなど計7本で，西から順に①～⑦の通し番号を付した．いずれの樹木も根本近くで幹が裁断されており，切株の状態である．重機で一次掘削し，根の周囲などは人力で掘り下げた．なお，①・②について申請図面との位置のずれが認められたため，熊本市文化振興課に事前に連絡し，後日訂正した図面を提出している．

調査地点北西に位置する①では，直径70㎝程の根の周囲1.7×2.4mの範囲を掘削した．地表下0.65mで根の大部分を伐採し，切株を取り上げた．調査区南西角には，地表下0.25mにおいて直径20㎝ほどの円礫が4個並んだ状態で検出された．出土位置は近代の整地土より上位で，現在の五高記念館前の車寄せサークルと並列することから，第五高等学校時代の車寄せサークルを形成する縁石であった可能性が高い．円礫は除去の必要がなかったため，現地に保存した．遺物は出土しなかった．

①から南東9mに位置する②では，直径約50㎝の根の周囲2.6×2.2mを掘削した．地表下0.7mで古代の包含層らしき黒褐色土を検出したため，本レベルで根を伐採，除去した．遺構・遺物の検出はなかった．

③は五高記念館の南に並列するフェンスの北側に位置する．直径70㎝程の根の抜根で，その周囲2.3×2.8mを地表下0.8mまで掘削した．調査区南側では地表下0.3mで直方体に加工された割石が検出された．部分的に撹乱を受けており，①で検出された円礫と同様，その位置や向きから第五高等学校に関連する可能性があるが詳細は不明である．掘削は全て現代の撹乱埋土内におさまった．ビール瓶などが出土したが取り上げていない．

④・⑤は，赤門から五高記念館へ至る途中の緑地に位置する．切株の周囲を，④は2.1×1.9m，2.2mほど東にある⑤は2.5×2.8mをそれぞれ掘削した．いずれも地表下0.1mで近代とみられる玉砂利層を検出し，④では地表下0.36mで，⑤では0.35mで，暗褐色粘質土をそれぞれ検出した．遺構・遺物の検出はなかったため，工事業者に抜根に際しての作業を慎重に実施するよう指示して引き渡した．

⑤から南東へ15m程に位置する⑥の抜根を実施した．直径60㎝の切株で，その周囲2.1×1.9mを地表下0.6mまで掘削した．地表下0.6mで黄粒混暗褐色土層を検出したが，遺物は出土せず，その性格は不明である．本土層の掘削は実施せず，その上面において根を伐採，除去した．遺構・遺物の検出はなかった．

調査地点で最も東に位置する⑦の根の抜根では，直径65㎝程の切り株の周囲，3×2.6mの範囲を最深で1.15mまで掘削した．地表下0.8mで古代の土師器，須恵器片の混じる暗褐色土層を検出したが，本土層の掘削は実施せず，その上面において根切りし，切り株を取り除いた．遺構はなく，遺物は小片のため取り上げていない．

写真1　①調査区西壁土層断面（東より）

写真2　①掘削状況（東より）

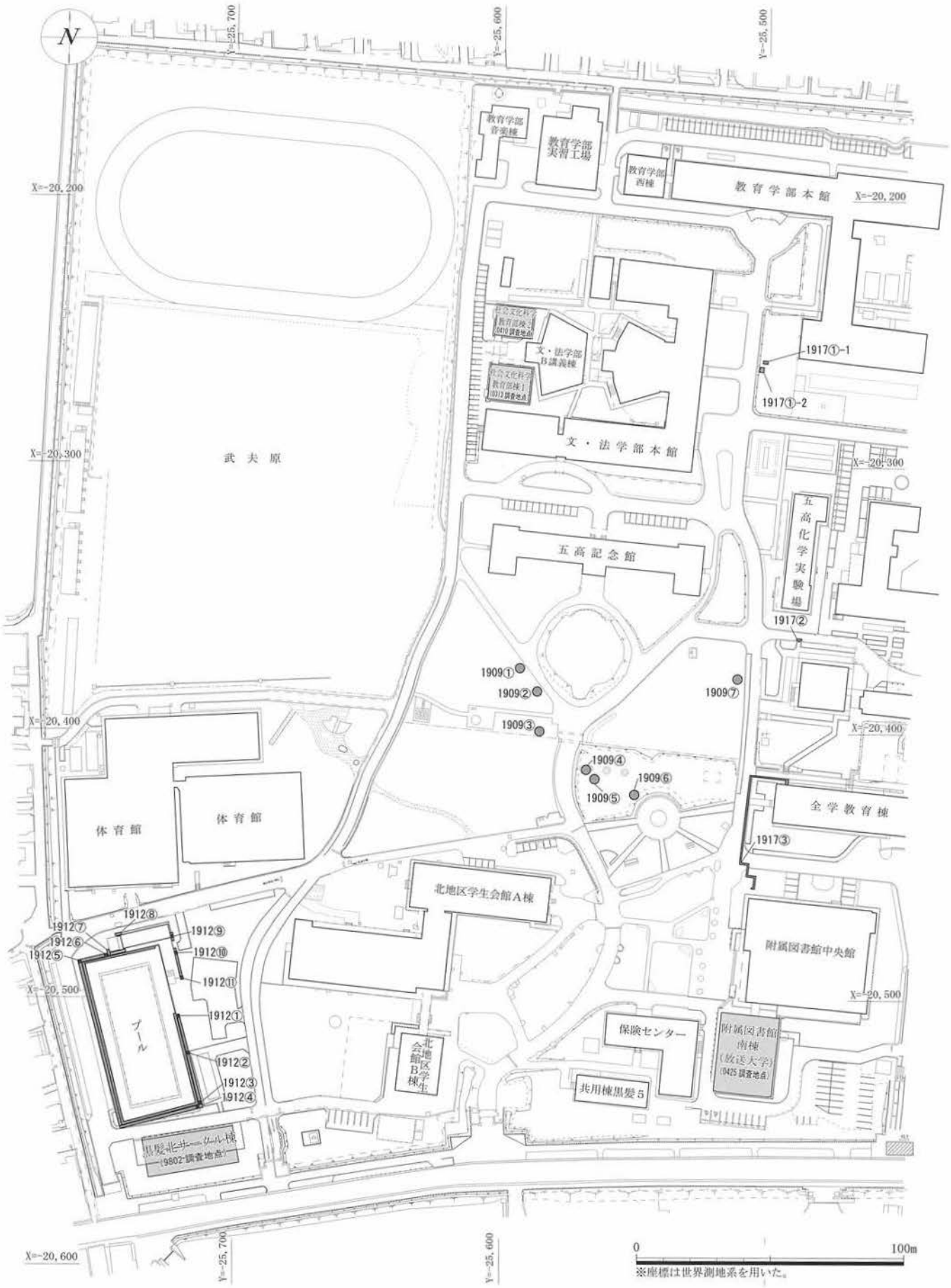


図２　黒髪北地区西半における調査地点配置図（1/2000）

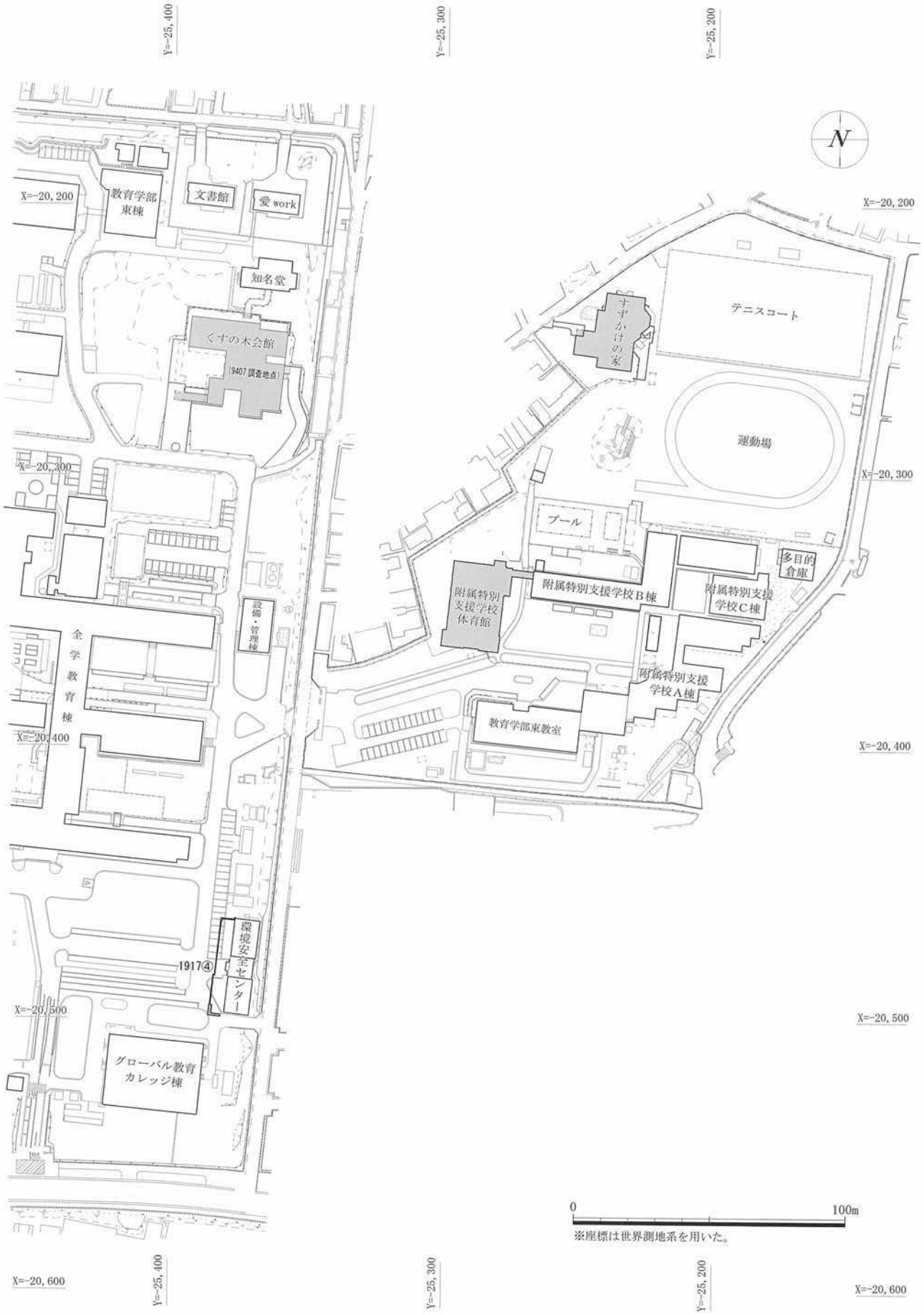


図３　黒髪北地区東半における調査地点配置図（1/2000）

写真３　②調査区南壁土層断面（北より）

写真４　②掘削状況（北より）

写真５　③掘削状況（北より）

写真６　④掘削作業風景（北より）

写真７　⑤掘削状況（西より）

写真８　⑥重機掘削作業風景（北より）

写真９　⑥掘削状況（北より）

写真10　⑥南壁土層断面（北より）

写真11　⑦重機掘削作業風景（北より）

写真12　⑦掘削状況（西より）

2．（黒髪北）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事（屋外プール廻り）に伴う工事立会（1912）

＜調査期間＞

2019年12月16日，2020年１月22日

＜調査面積＞

274.8㎡

＜調査員＞

山野ケン陽次郎．

＜調査概要・結果＞

黒髪北地区西側，屋外プール周囲のブロック塀の補強に係る工事立合を実施した．工区は施工内容ごとにＡ～Ｊの10工区に分かれている．このうちプール西辺に相当するＣ工区は施工深度が25㎝と浅く，文化層への影響はなかった．またＪ工区はプールの土台部分に相当するため立会の必要性はなく，工事業者に掘削方法を指示して作業を進めさせた．Ａ，Ｂ，Ｄ，Ｅ，Ｆ，Ｇ，Ｈ，Ｉの８つの工区について計11か所で試掘を実施した．

Ａ工区はプール東側にあたる．南北35ｍのうち，北端と南端，その中央部分の３か所で試掘を実施した（①～③）．掘削範囲はいずれも0.7×1.2～３ｍで地表下0.65ｍまで掘削した．プール周囲の南半は南側道路よりも1.2ｍ程盛土されており，掘削したすべての調査区で撹乱埋土内におさまった．遺構・遺物の検出はなかった．

プール南辺に相当するＢ工区は，西側の造成箇所を10～60㎝掘削するのみであり，現地で確認したところ立会の必要性がなかった．ただし，Ａ工区と接し，比較的残存状況がよいと思われるＢ工区東端の一箇所のみを立会した（④）．この部分では煉瓦破片が少量検出されたが，まとまりがなく撹乱埋土中に混在する状況であった．１×0.7ｍの範囲を地表下0.6ｍまで掘削したが全て撹乱埋土内におさまった．しかし，Ｂ工区全体の掘削終了後，④の掘削位置で赤レンガの広がりを視認できたため精査したところ，地表下0.6ｍのレベルで煉瓦基礎を検出することができた．基礎は約１×１ｍの範囲に広がっており，南北方向に主軸を持つことが分かった．北の延長部はプールの土台によって，南側は道路によりそれぞれ破壊を受けたとみられる．基礎の表面は風化していたが，「熊本監獄製造」印のおされた煉瓦が使用されていることが判明した．大学史等で由来を確認したところ，その位置から，明治23年の第五高等中学校発足時に構内南西に設置された「第一教師館」の基礎であると推測できる．本遺構は撤去の必要がなかったので現地にて保存した．①～④からは近代の磁器破片や煉瓦破片が出土したが取り上げは実施しなかった．

Ｄ工区はプールの北西辺に相当する．工区の西端と東端付近にそれぞれ0.7×1.3ｍの掘削を実施したところ，プール土台壁から0.3ｍの位置までは基礎掘方によって破壊を受けていることが判明した（⑤・⑥）．文化層の残存部分では地表下0.35ｍで暗褐色土層を検出したが，地表下0.5ｍまで掘削しても古代の包含層を検出することはできなかった．

プール北東部入口付近に相当するＨ・Ｉ工区の立会を実施した．⑦はプールの北側，水泳部部室の南西角付近にあたる．Ｄ工区⑥と東側で一部重複しているが，地表下80㎝まで掘削が必要なため，再度調査を実施した．南北2.5ｍ，東西1.2ｍの範囲を掘削したところ，地表下60㎝で暗褐色土，70㎝で黄褐色粘質土層を検出した．

⑧は部室の北東角，南北0.9ｍ，東西2.6ｍの範囲を掘削した．多くは部室とシャワー室の基礎掘方埋土中におさまったが，壁際付近において地表下50㎝で暗褐色土を，地表下60～65㎝で黄褐色粘質土を検出した．

このほか，プール北東側でフェンスのコンクリート基礎埋設のために独立した50×50cm の孔を計８カ所掘削した．そのうち南北端と中央部の計３カ所について立会を実施した（⑨～⑪）．いずれも地表下70㎝まで掘削したが，全て既存フェンスの掘方埋土中におさまった．⑤～⑪のいずれも遺構・遺物の検出はなかった．

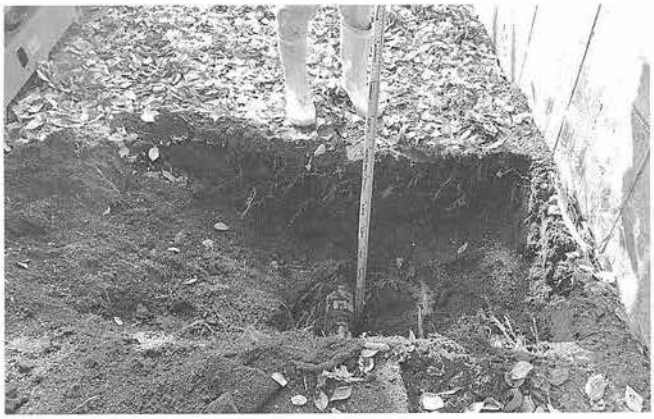


写真13　②掘削状況（北より）

写真14　④煉瓦基礎検出状況（東より）

写真15　⑤掘削作業風景（東より）

写真16　⑥掘削状況（東より）

写真17　⑦重機掘削作業風景（西より）

写真18　⑦掘削状況（東より）

写真19　⑧重機掘削作業風景（北東より）

写真20　⑧掘削状況（東より）

写真21　⑨～⑪遠景（北東より）

写真22　⑨掘削状況（南より）

写真23　⑪掘削状況（北より）

3．（黒髪北）環境安全センター西側等屋外ガス管盛替工事に伴う工事立会（1917）

＜調査期間＞

2020年２月４日，10・13・14・18～21日

＜調査面積＞

275.70（49.31）㎡

＜調査員＞

土野雄貴.

＜調査概要・結果＞

黒髪北地区におけるガス管の盛替えに伴う工事立会である．工事の着手順に，教育学部本館南側を①，化学実験場南側を②，全学教育棟Ａ棟と附属図書館中央館とをつなぐ区間を③，環境安全センター西側を④とした．①・②は既設管の撤去に伴う工事であり，③・④は新営に伴う工事である．

①－1は，地表に設置されているガス栓の東側を1.8×1.1m掘削した．地表下0.75mで既設ガス管を検出したが，ガス栓の西側では管が下に潜っていたため，ガス管の掘方内0.4×0.4mをさらに掘削した．地表下1.1mでガス管と，南へ向かう分岐を検出した．全体の掘削は近代埋土内におさまる．調査区中央付近のガス管掘方埋土を地表下1.4mまで掘削し，既設管切断の空間を確保した．

①－2は，南へ分岐する既設ガス管を切断するため，分岐点の南1.2mを1.9×1.6m掘削した．地表下1.1mで近世埋土と，既設ガス管および掘方を検出した．その後，配管切断の作業空間を確保するため，既設ガス管掘方の左右を0.1mずつ，底を0.1m，それぞれ掘削した．掘削は地表下1.5mまで及んだが，近世埋土内におさまった．

②は，アスファルトを切った2.0×1.6mのうち，南側の0.6m幅を掘削した．地表下0.3mで近代埋土と，ガス管掘方を検出した．ガス管掘方内を掘削したところ，地表下1.0mで下に潜る分岐を確認した．調査区南側のバルブにつながる箇所は0.6×0.4mを掘削し，地表下0.55mで既設ガス管を検出したが，北端が下へ潜っていた．そこで，ガス管掘方内をさらに掘り進めたところ，地表下1.05mでバルブへの分岐，地表下1.1mで本管を確認した．その後，切断作業空間確保のため，ガス管本管の掘方内を地表下1.4mまで掘削したが全て現代埋土内におさまった．調査区南壁の観察で，地表下0.63mまで近代埋土，下は近世埋土であることを確認した．

③は，全学教育棟Ａ棟から北に，0.3×2.0mを地表下0.8m掘削した区間は，すべて現代埋土におさまり，遺構・遺物の検出はなかった．

この北端から，建物と平行に西へ，0.4×13.55mを地表下0.8m掘削した区間では，地表下0.6mで近代埋土を確認した．地表下0.6～0.65mにかけてコンクリート製の構造物を確認した．

この西端から，附属図書館中央館へ向けて南に，0.3×36.6mを地表下0.8m掘削した区間では，全学教育棟Ａ棟と附属図書館中央館の中間付近から，地表下0.53mで近代埋土，地表下0.78mで近世埋土を確認した．

この南端から東へ，3.0×0.6mを地表下0.85m掘削した区間では，地表下0.53mで近世埋土を確認した．

この東端から南へ，0.6×4.4mを地表下0.8m掘削した区間では，南へ3.0m付近まで地表下0.53mで近世埋土を

確認した.

この南端から東へ0.6×3.1m・東端から南へ0.6×4.4m・南端から西へ0.6×0.6mを，それぞれ地表下0.8m掘削した区間では，いずれも現代埋土におさまり遺構・遺物の検出はなかった.

④は，2017年度に実施した1734調査地点に接する付近では，1.1×4.0mを地表下0.8m掘削した．地表下0.4mで地山とみられる黒色粘質土を確認した．遺構・遺物の検出はなかった.

この北端から北へ，0.3×11.0mを地表下0.8m掘削した区間では，構内道路下では地表下0.4mで，環境安全センター入口南側の緑地部分では地表下0.3mで，それぞれ地山とみられる褐色粘質土を確認した．遺構・遺物の検出はなかった.

この北端で一度クランク状に折れ曲がり，再び北へ0.3×20.0mを地表下0.8m掘削した区間では，地表下0.4～0.58mにかけて地山とみられる褐色粘質土を確認したが，遺構・遺物の検出はなかった.

この北端から北へ，0.9×1.4mを地表下0.8m掘削した区間では，地表下0.5mで地山とみられる褐色粘質土を確認したが，遺構・遺物の検出はなかった.

この北端から東へ，環境安全センター北西隅へ取りつくまでの0.3×5.3m区間は，地表下0.45m掘削した．東折してすぐに，地表下0.15mで0.15m幅の地山とみられる褐色粘質土を確認したが，それ以外の箇所についてはすべて現代埋土におさまった．遺構・遺物の検出はなかったため，残りの作業については慎重な作業を行うよう指示して立会を終了した.

遺物は，土師器・須恵器・陶磁器・瓦を少量出土したほか，③の全学教養棟A棟に近いところからアルミニウム製の硬貨を1枚出土している.

写真24　①-2掘削完了状況（北より）

写真25　③調査区近景（北より）

写真26　③掘削完了状況（南より）

写真27　④調査区近景（南より）

写真28　④地山検出状況（南より）

Ⅱ－２　黒髪南地区　（図４参照）

１．（黒髪南）黒髪南Ｃ２樹木復旧に伴う工事立会（1902）

＜調査期間＞

2019年４月25・26日

＜調査面積＞

98.00（30）㎡

＜調査員＞

新里亮人・山野ケン陽次郎・士野雄貴.

＜調査概要・結果＞

黒髪南Ｃ２改築に係る樹木復旧に伴う工事立会を実施した．2018年８月，樹木の抜根作業に伴う立会をおこなったが，工事の都合上，その後伐根箇所は一旦埋め戻されたため，再植樹時の掘削工事に立ち会うこととなった．

作業前に現地を確認したところ，伐根箇所は打杭によって現状復旧できるよう手配されており，再植樹される樹種と対応させるため杭には番号（①～⑮）が与えられていた．計画図に記された樹種，掘削範囲，掘削深度を参照し，遺構，遺物の包蔵状態を確認するため対象箇所のバックホーによる慎重な掘り下げをおこなった．調査の結果，調査対象地点の中央部南半側にあたる⑥・⑦の再植樹箇所において，表土直下（地表下0.8～0.9m）より黒褐色土層が確認され，上面の清掃時に土師器片数点が出土した．当該層は植樹による掘削深度より下位に堆積しており，緊急調査の対象には該当しないため検出状況の写真撮影後，樹木の再植樹と掘削箇所の埋戻しをおこなった．他の調査区域については，掘削深度内で遺構，遺物は確認できなかったが，表土下位には遺構面および包含層が堆積している可能性が高いと判断され，今後の開発では注意を要する．

写真29　⑥包含層検出状況（北より）

写真30　⑦包含層検出状況（北より）

２．（黒髪南）工学部研究資料館災害復旧工事に伴う発掘調査（1903）

＜調査期間＞

2019年５月27日～７月31日

＜調査面積＞

147.61㎡

＜調査員＞

士野雄貴・新里亮人.

＜調査概要・結果＞

平成28年４月に発生した熊本地震により被害を受けた，国指定重要文化財である工学部研究資料館の復旧工事に伴う発掘調査である．この建物は，指定名称こそ「工学部研究資料館」であるが，本来は熊本大学工学部の前身に位置づけられる，熊本高等工業学校の機械実験場として明治41年に建設された二階建てのいわゆるイギリス積み煉瓦建築物である．

資料館の上屋部分の調査は，公益財団法人文化財建造物保存技術協会（以下「文建協」）が担当しており，発掘調査においては，文建協と協議しながら進めていくという体制をとった．

調査の進展とともに，資料館建設当初の床下遺構が予想以上に良好な状態で検出された．６月18日に，資料館上屋部分の復旧工事に対して文化庁調査官から視察を受けることになったが，この視察に合わせて，検出された床下遺構についても併せて指導を受けたい，と文建協から要請があった．その際文建協から，床下遺構保護を図るため工事箇所の一部を資料館外回りへ変更する可能性についての示唆があった．以上を踏まえた協議の結果，文化庁調査官による指導を待って調査方針を再度検討することとし，それまでの間は調査を止めて遺構の保全を図った．

予定通り，６月18日に実施された文化庁調査官による現地視察および指導の内容に基づいて，検出された地下

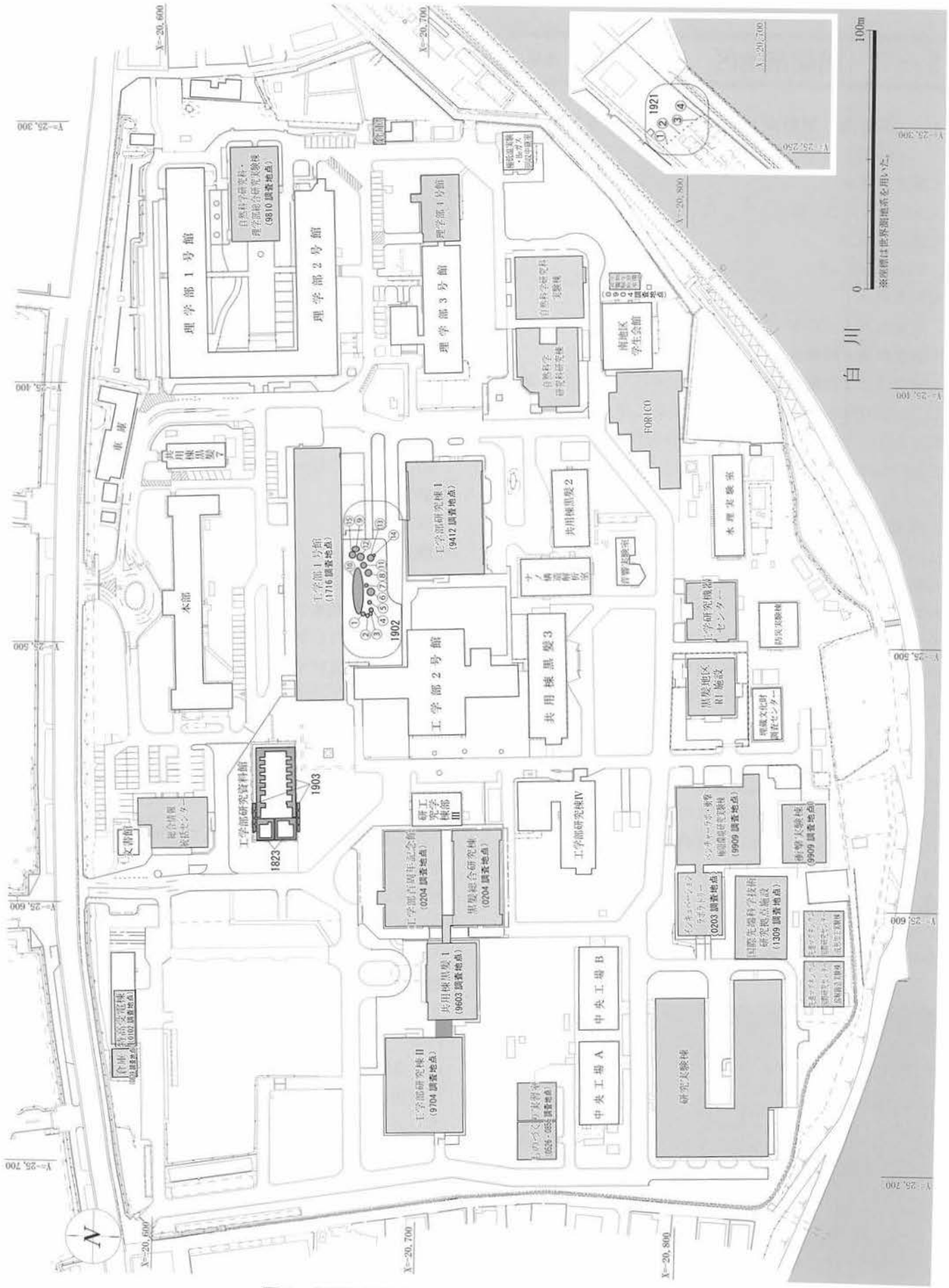


図4　黒髪南地区における調査地点配置図（1/2000）

遺構については可能な限り現地にて保存し，工事による破壊を免れない遺構については復元配置することとなった．加えて，調査区の現状を公開することが望ましいという指摘を受け，６月29日，関係者に限定して現場を公開した．

当調査において検出された遺構は，資料館に係る上位の遺構群と，資料館以前に遡る下位の遺構群とに大別される．

前者には，壁および柱掘方・旧ボイラー煙道・束石および束石基礎・入口部分の床下基礎・階段基礎・機械基礎および旧休憩室がある．旧休憩室内には洗面所の痕跡もみられた．付帯遺構としては，資料館建設工事に伴うとみられる足場痕跡・煉瓦の加工残滓を埋却した廃棄土坑を検出した．

後者には，古代とみられる溝・ピット・土坑・竪穴建物，近世とみられる耕作痕跡・道路・ピットなどがある．

追加した外回りの調査では，南側から壁掘方の外側に近世とみられる耕作痕跡の広がりを確認し，北側から旧ボイラー煙道の続きを検出した．

遺物は，数点の縄文土器のほか，土師器・須恵器・陶磁器・瓦・煉瓦・ガラス製品などが出土している．

写真31　旧ボイラー煙道および北階段基礎検出状況（南より）

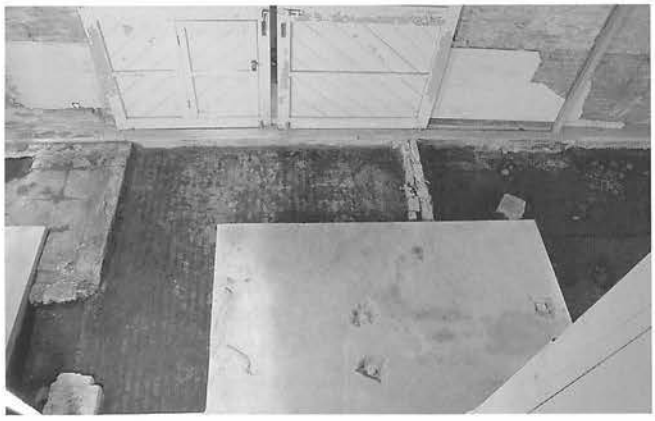


写真32　北入口床下基礎検出状況（南より）

写真33　束石基礎検出状況（南西より）

写真34　竪穴建物検出状況（北東より）

写真35　溝検出状況（北東より）

写真36　現場公開風景

3．（黒髪北他）五高記念館他災害復旧工事に伴う工事立会（1823）

＜調査期間＞

2019年５月30・31日，６月６・10～12・17・18・20日，７月28日～継続中

＜調査面積＞

53.32㎡

＜調査員＞

士野雄貴．

＜調査概要・結果＞

熊本地震により被害を受けた，大学所有の国指定重要文化財に対する災害復旧工事のうち，黒髪南地区にある工学部研究資料館についての工事立会で，前年度からの継続案件である．

資料館西側にある２つの小区画，北側の小資料室および南側のミーティングルームの各内壁に沿って，昭和53年（1978）に敷設された補強鉄骨を施工しなおすことになった．この鉄骨の基礎コンクリートを露出させるため，当時の掘方内を設計基礎下0.55ｍまで掘削した．設計基礎は，1903調査地点である隣の大資料室床面である．掘削は近代埋土におさまった．小資料室床下より旧ボイラー基礎および煙道を検出するなど，1903調査地点と同じく，資料館建設当初の施設が良好に遺存していることを確認した．旧ボイラー基礎の一部は外壁と接続しており，煙道は，２層に積まれた赤煉瓦を本体とし，その内側に耐火煉瓦が積まれていた．煙道の内部空間からは，現代埋土に混じって大量の赤煉瓦や耐火煉瓦が出土した．掘削が下位に及ばなかったため，煙道の全容は確認できていない．

前年度の工事立会の際，補強の基礎コンクリートの型枠に転用された煉瓦を確認したが，今回も多数の型枠転用煉瓦を確認した．耐火煉瓦がかなりの割合を占め，耐火煉瓦を出土しなかった1903調査地点と対照的である．

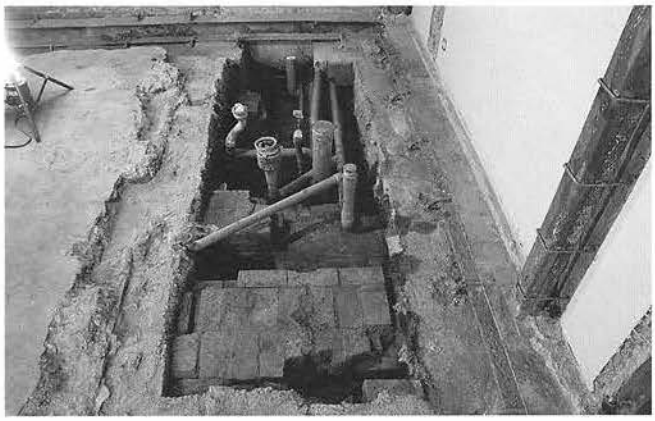


写真37　小資料室内旧ボイラー基礎検出状況（南より）

写真38　小資料室内旧ボイラー煙道検出状況（東より）

4．（黒髪南）理学部圃場フェンス取設工事に伴う工事立会（1921）

＜調査期間＞

2020年３月16日

＜調査面積＞

1.9（0.36）㎡

＜調査員＞

山野ケン陽次郎．

＜調査概要・結果＞

黒髪南地区理学部圃場フェンス取設工事にかかわる工事立会を実施した．調査地点は黒髪南地区東端，白川右岸に沿って設けられた理学部圃場の北東側に相当する．周辺では0938調査地点など過去の調査で古代および縄文時代の遺物が検出されている．

本工事ではフェンスの独立基礎の設置にかかわる掘削の必要があり，工事施工深度は地表下40㎝，掘削範囲は30×30㎝である．施工は南北約20ｍの区間において，調査地東に隣接するＵ字側溝に並列して12カ所の掘削を実施する．確認のため，このうち４カ所について試掘調査をおこなった（①～④）．

圃場北東端から南東に２ｍの掘削箇所（①）では地表下20㎝で褐色砂層を検出した．東側はＵ字側溝の掘方によって破壊を受けている．本褐色砂層は黒髪南地区東側理学部等周辺に堆積する古代遺構検出面を形成する土層である．過去の黒髪南1310調査地点では本土層中から縄文時代後期の遺物が大量に得られている．本掘削箇所では本土層中を20㎝程掘削したが遺物は出土しなかった．掘削面積が狭く判然としないが褐色砂層と比較してややしまりが弱く，周囲の土層との関係性を考えると後世になって下位から持ち上げられた廃土が堆積した可能性が考えられる．

圃場北東端から南東に８ｍに位置する掘削箇所（②）では地表下40㎝まで全て現代の撹乱埋土内におさまった．

圃場北東端から南東13mに位置する掘削箇所（③）では，地表下25cmから10～15cm程の扁平な川原石が意図的に敷かれたような状態で検出された．川原石周囲には川砂とガラス片が混在しており，これらが近代の建物基礎の栗石である可能性が高かった．本調査地点周辺は明治44年に竣工した熊本高等工業学校の学生寮である「工友寮」の敷地に相当する．工友寮の建物基礎と思われる遺構は，これまでに黒髪南地区1310調査地点のⅢ５区などでも検出されており，川原石の法量や，川原石の周囲に散布された川砂など，同様の検出状況を示す．これら栗石を一段分はずしたところで施工深度に達したため掘削を終えている．

圃場北東端から南東に17mに位置する掘削箇所（④）では地表下30cm程で黒褐色土層が検出された．古代あるいは近世・近代の遺物包含層と想定されたため，10cm程注意して掘削したが遺物は出土しなかった．調査地点周辺には畑が設けられており，地表下30cm程までは撹乱を受けている．また，施工深度40cmでは古代の遺構面には到達せず，遺物包含層をやや削るのみであったため，他の掘削の注意点について工事業者に指示し，工事立会を終了した．遺構・遺物は検出されなかった．

写真39　人力掘削作業風景（南より）

写真40　①掘削状況（東より）

写真41　②掘削状況（東より）

写真42　③掘削状況（東より）

写真43　④掘削状況（東より）

Ⅱ－３　本荘北地区　（図５参照）

１．（医病）基幹・環境整備（屋外環境整備等）工事（排水溝等）に伴う工事立会（1904）

＜調査期間＞

2019年７月８日～継続中

＜調査面積＞

6231.1㎡

＜調査員＞

新里亮人・山野ケン陽次郎・土野雄貴.

＜調査概要・結果＞

熊本大学病院の屋外環境整備に係る排水溝等の設置箇所における埋蔵文化財の記録調査を実施するもので，工事立会によって包含層および遺構面の残存が確認され，工事の掘削深度がそれ以下に及ぶ工区については，緊急発掘調査をおこなった．工事の対象箇所は，本荘北地区1708調査地点とその周辺区域に該当する．対象工区は広範囲に及び，なおかつ飛び地的に設定されているため便宜的に工区分けをおこない（①～⑤工区），各工区における発掘調査の着手順に調査区番号（１～）を付し，各調査区内で検出された遺構は検出順に枝番（Ｍ１～）で整理している．

工区分けは旧管理棟の東側を①工区，旧管理棟範囲内を②工区，旧管理棟の南西側を③工区，旧管理棟外南側を④工区とした（図５）．以下，2019年度における各工区の発掘調査成果を要約する．

【①工区】

①工区は第一立体駐車場に隣接する屋外駐車場内に側溝，雨水枡，浸透井戸（マンホール），浸透井戸間を繋ぐ排水管，電線管，ソーラー照明灯を設置し，アスファルトの再舗装に伴う樹木の伐根工事がおこなわれる区域である．

第一立体駐車場南側の浸透井戸設置箇所は後代の撹乱により遺構面が失われていたが，排水管設置箇所（①－１，２調査区），桝設置箇所（立会区），屋外灯設置箇所（①－３調査区），排水管設置箇所（①－４，６調査区），第４号浸透井戸設置箇所（①－５調査区），シェルター基礎設置箇所（①－７）のそれぞれにおいて包含層（近世，古代）および遺構（古代）の残存が確認された．

【②工区】

②工区内は，浸透井戸，排水管，雨水枡，側溝，屋外シェルター基礎，用水道，電気配線の設置がなされる区域となる．工区の大半は本荘北地区1708調査地点の範囲内に当たるが，立会の結果，旧管理棟の外縁および中庭

写真44　①－５調査区完掘状況（南東より）

写真45　②－３調査区完掘状況（南より）

写真46　③－２調査区完掘状況（南より）

写真47　③－３調査区完掘状況（南東より）

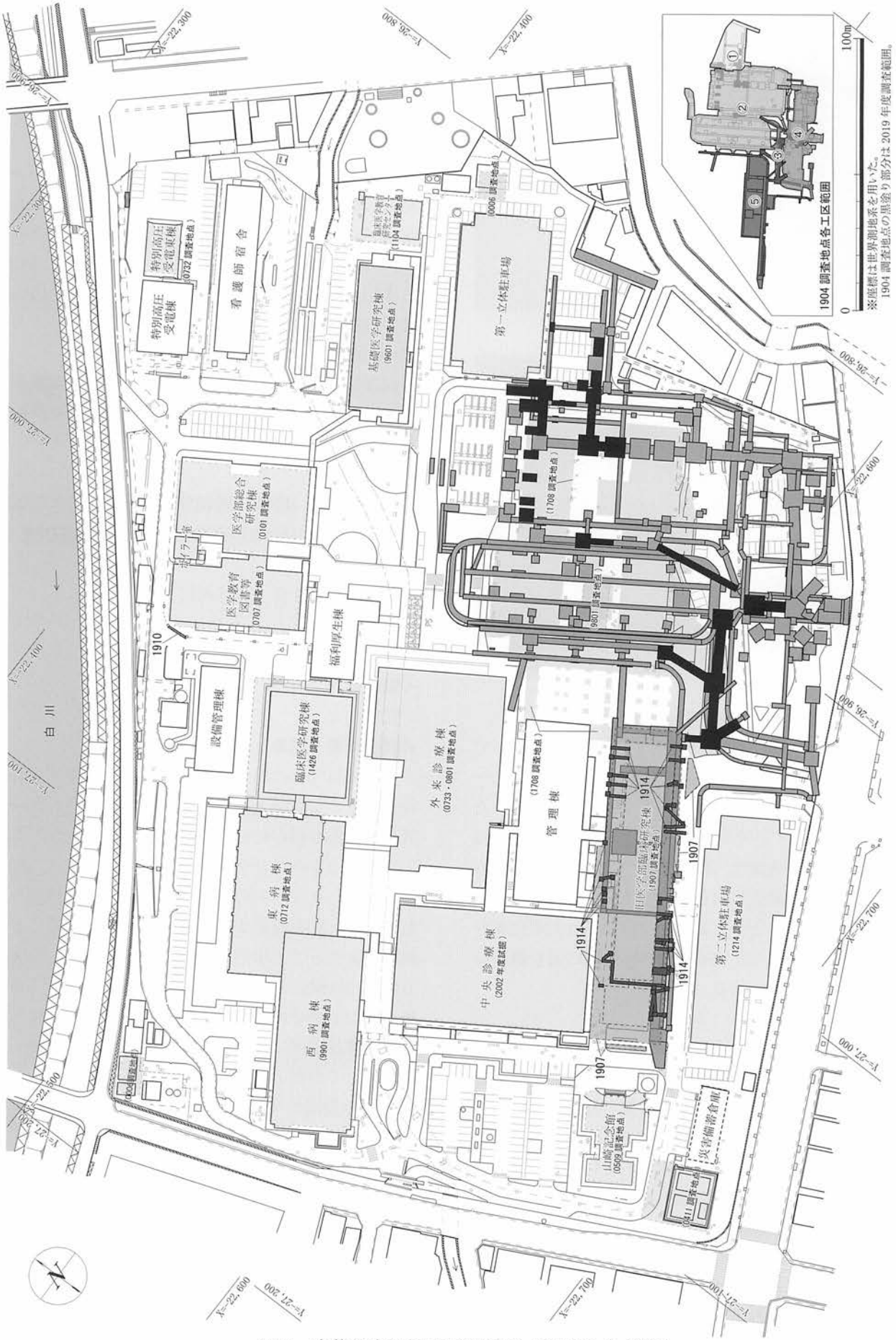


図５　本荘北地区における調査地点配置図（1/2000）

写真48　③－４調査区完掘状況（北より）

写真49　④－１調査区検出土坑内遺物出土状況（北より）

部分において遺構面の残存が確認された．

屋外シェルター設置箇所（②－１，４～８調査区）では，旧管理棟の掘方と機械設備（近代陶管や現代ヒューム管）埋設箇所の間に僅かながら遺構面が残存していた．②－２，３調査区（旧管理棟中庭）で検出された複数の硬化面が墨重する大溝は，位置関係や土層・出土遺物の特徴から1708調査地点の64号道路の未発掘部分に，その東縁に位置する②－10・11調査区で確認された硬化面をもつ道路跡（Ｍ１）は，1708調査における102号道路の一部に該当するとみられる．

【③工区】

③工区は浸透井戸，排水管，雨水枡が設置される区域で，その大半は旧管理棟の敷地外に当たることから遺構面の良好な残存を予想して調査を実施した．

③－１調査区は旧管理棟の西南縁に位置し，工事箇所の大半は1708調査地点範囲内に収まっていたが，調査区南側において僅かながら遺構面の残存が確認された．

③－２調査区は全面に遺構面を残しており，近世の溝，古代の竪穴建物跡，道路跡，ピット等が検出された．道路跡は1708調査地点における276号道路と対応する．

③－３・４・５調査区の調査では北東方向に主軸を持つ大溝が検出され，1708調査における315号溝が病院敷地内の南西側に良好に残存している状況が確認された．

③－５調査区の東側（浸透井戸設置箇所）では溝（近世），竪穴建物跡，ピット（古代）等が検出されている．

【④工区】

④工区は本調査における最南の区域に当たる．令和２年度工事予定区域のうち，交通への影響が少ない樹木植え込みロータリー内の立会いを実施した結果，遺構面の残存が確認された．④－１調査区北側（浸透井戸設置箇所）の大半は攪乱を受けていたが，古代と近世の溝が検出され，南側（管路箇所）においては古代の溝および土壙等が確認された．

【今後の調査計画】

本事業は令和３年度まで継続するが，事業期間中は令和２年度以降の調査においても本工区分けを踏襲し，調査を進めていく予定としている．

２．（本荘北）基幹・環境整備（旧臨床研究棟取り壊し）工事（建物基礎撤去）に伴う発掘調査（1907）

＜調査期間＞

2019年10月８日～12月６日

＜調査面積＞

2954.2㎡

＜調査員＞

新里亮人．

＜調査概要・結果＞

旧臨床研究棟の取り壊しに係る建物基礎撤去に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施した．建物基礎のフーチング間に遺構面が残存している可能性が考慮されたため，撤去に先立つフーチング四方の掘削に立ち会い，底面となる無筋コンクリートの検出後，対象区域を精査し，遺構面の残存状況を確認する手順で調査を進めることとした．調査に先立って工事計画を照会したところ，工区を東西方向に13区域に分け，フーチング周縁の掘削・基礎の粉砕と撤去・埋め戻しを一工区ごとに実施し，取り壊し完了後，隣接工区に移行する手順が示されたため，工事工程に順じて西側工区より遺構面の精査を開始した．

掘削対象域のすべてにおいて遺構面の確認作業を行なったが，無筋コンクリートの検出面は，地表下約2.5～3.0mにて堆積が確認される褐色砂層に当たることから，遺構および包含層は確認されず，また遺物も出土しなかったため，各工区の工事をその都度許可し，調査を終了した．今回の工事では掘削対象域が限られていたため，工区内全域におよぶ遺構面の確認はできていないが，砂層面におよぶ溝等の遺構が残存している可能性も残されているため，今後の開発では注意が必要である．

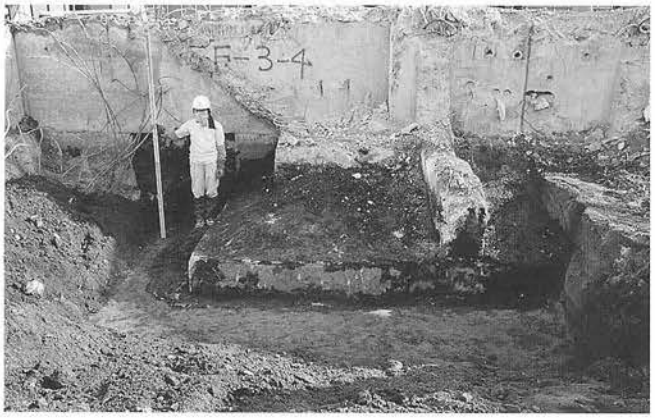


写真50　フーチング基礎検出状況（南より）

写真51　遺構残存状況（北より）

3．（医病）設備管理棟東側等屋外雨水管取替工事に伴う工事立会（1910）

＜調査期間＞

2019年12月４日～継続中

＜調査面積＞

17.15㎡

＜調査員＞

新里亮人.

＜調査概要・結果＞

設備管理棟の北東および南西部における雨水管の取り換え工事に係る工事立会を実施した.

写真52　掘削状況（南より）

北東側のＡ区では，既設枡間の範囲内幅0.6m，長さ7.5mを1.0m掘り下げたが，遺構，遺物は確認されなかったため，工事を許可した．南西側の工事は次年度に実施される予定となっている.

4．（本荘北）基幹・環境整備（旧臨床研究棟取り壊し）工事（機械設備撤去）に伴う工事立会（1914）

＜調査期間＞

2019年１月15日

＜調査面積＞

229.30㎡

＜調査員＞

新里亮人.

＜調査概要・結果＞

旧臨床研究棟取り壊しと関連する機械設備（配管および枡）の撤去工事に伴う工事立会を実施した．既設機械設備の表面を露出させ，その縁辺の掘り下げによって目的物を除去する工法によるため，掘削範囲内における埋蔵文化財の確認を目的に立会をおこなった.

機械設備類はすべて旧臨床研究棟の掘方内に位置していたため，工事を許可し立会を終了した.

写真53　機械検出状況１（北より）

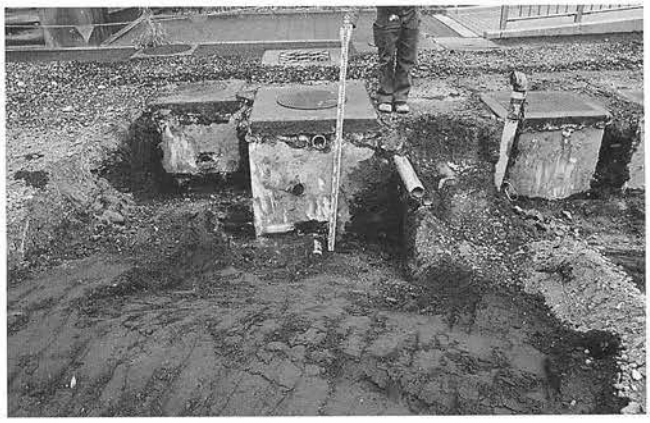


写真54　機械検出状況２（北より）

Ⅱ－4　本荘中地区　（図６参照）

１．（本荘中）ライフライン再生（給排水設備等）工事（排水設備等）に伴う発掘調査（1911）

＜調査期間＞

2019年12月９日～26日，2020年１月６日～２月３・５～７日，３月２・４・16～19・23～26・31日～継続中

＜調査面積＞

1254.9㎡

＜調査員＞

土野雄貴．

＜調査概要・結果＞

（本荘中）ライフライン再生（給排水設備等）工事（排水設備等）に伴う発掘調査である．

工事は，構内道路下を中心として６工区にわけられており，本荘中地区の南西部，2017年度工事箇所と隣接する部分を１工区として順次着手された．調査区名は，前に工区名，後に工事順をつけ設定し，必要に応じて細分した．

①－１は浸透桝設置箇所である．2.5×3.0mを地表下2.2m掘削した．地表下0.65mまで現代埋土，地表下0.9mまで近代埋土，地表下1.35mまで近世遺物包含層，地表下1.8mまで古代遺物包含層，以下は地山とみられる褐色砂層である．古代のピット１基を検出した．

①－２は浸透桝設置箇所である．2.5×2.5mを地表下2.16m掘削した．地表下0.4mまで現代埋土，地表下0.8mまで近代埋土，地表下1.35mまで近世遺物包含層，地表下1.6mまで古代遺物包含層，以下は褐色砂層である．近代建物基礎，古代の道路１基を検出した．

①－３は浸透桝設置箇所である．施工変更により不定形の4.5×3.6mを地表下1.87m掘削した．地表下0.8mまで現代埋土，地表下1.08mまで近代埋土，地表下1.36mまで近世遺物包含層，地表下1.58mまで古代遺物包含層，以下は褐色砂層である．近代栗石，古代とみられる白粘土分布・竪穴建物２・ピット１基を検出した．

①－４は排水管設置箇所である．５小区にわかれる．①－4ａ小区以外については，調査開始後，掘削開口部を広くとるように施工がいったん変更されたが，地表下0.65～0.8mで確認された既設構造物との重複が甚だしかったため，ふたたび施工が変更された．このため，遺構検出面まで掘削が及んだ範囲は幅0.7mほどである．

①－4ａは，後述する浸透側溝と新設雨水管とをつなぐ箇所で，側溝本体に小桝を設け，雨水管を通して余水を排水管へ流すものである．1.0×4.0mを地表下0.9mまでの掘削である．調査の結果，北側から地表下0.74mで近代道路を検出したほか，南側から地表下0.65mで既設配管を検出した．これを受けて，掘削を地表下0.6mまでに留めるよう施工を変更することを確認し，残りの箇所については慎重に作業するよう指示した．

①－4bは，①－１と①－２を繋ぐ排水管設置箇所である．3.0×9.6mを地表下1.8m掘削した．①－２で検出された近代建物基礎の続きと，この建物に付随するとみられる煉瓦製桝，古墳時代～古代の溝３基を検出した．

①－4cは，①－２と①－３を繋ぐ排水管設置箇所である．3.0×57mを，西側は地表下1.56m，東側は地表下1.8m掘削した．①－３から東へ11.5mまでの掘削は古代遺物包含層におさまる．近代の建物基礎７・道路１・土坑１基，近世の溝１基，古墳時代～古代のピット６・竪穴建物２・道路１基を検出した．

①－4dは，1706調査地点の5a区南端と，①－３とをつなぐ配管設置箇所である．3.0×9.0mを，地表下1.4～1.49m掘削した．掘削は古代遺物包含層におさまり，①－３で検出した近代栗石の続きを検出したが，それ以外の遺構は確認されなかった．

①－4eは，①－１から学外の排水管へ接続する部分の，排水桝および排水管設置箇所である．この区間の排水桝は，排水管を垂直方向に沈下させるもので，掘削幅は管路部分と同じである．本荘中地区の南門部分であり，地表面は南に向かって下がっている．1.4×19mを，地表下1.6～1.8m掘削した．南端から近代建物を検出した．北壁と東壁の一部，および床を確認した．地表下0.4mで壁を，地表下1.3mで床を確認した．床下からは，地表下1.64mで近代埋土と，壁の基礎天場を検出した．

建物北側では，地表下0.85mで古代遺物包含層，1.25mで褐色砂層を確認した．①－１に近い方では，地表下1.2mで古代遺物包含層，地表下1.65mで地山を確認した．南端の近代建物と①－１の中間付近から，①－２および①－4bで検出した建物基礎の続きを確認したほか，①－１近くで古代のピット２・溝１基を検出した．

①－５は浸透側溝設置箇所である．1706調査地点の12a区南端に接続する．余水を排水管へ流すための小桝を含む．1.2～1.6×87.5mを地表下0.9m掘削した．近代埋土におさまる．地表下0.8mで近代建物基礎３基を検出したが，撤去はしない旨を確認したので，残りの作業については慎重に行うよう指示した．

南側の浸透側溝設置箇所は，①－３および①－4cの調査結果を受け，掘削を地表下0.8mまでに留めることを確認し，慎重に作業を行うよう指示した．

②－1aは排水管設置箇所である．1.2×９mを，北側

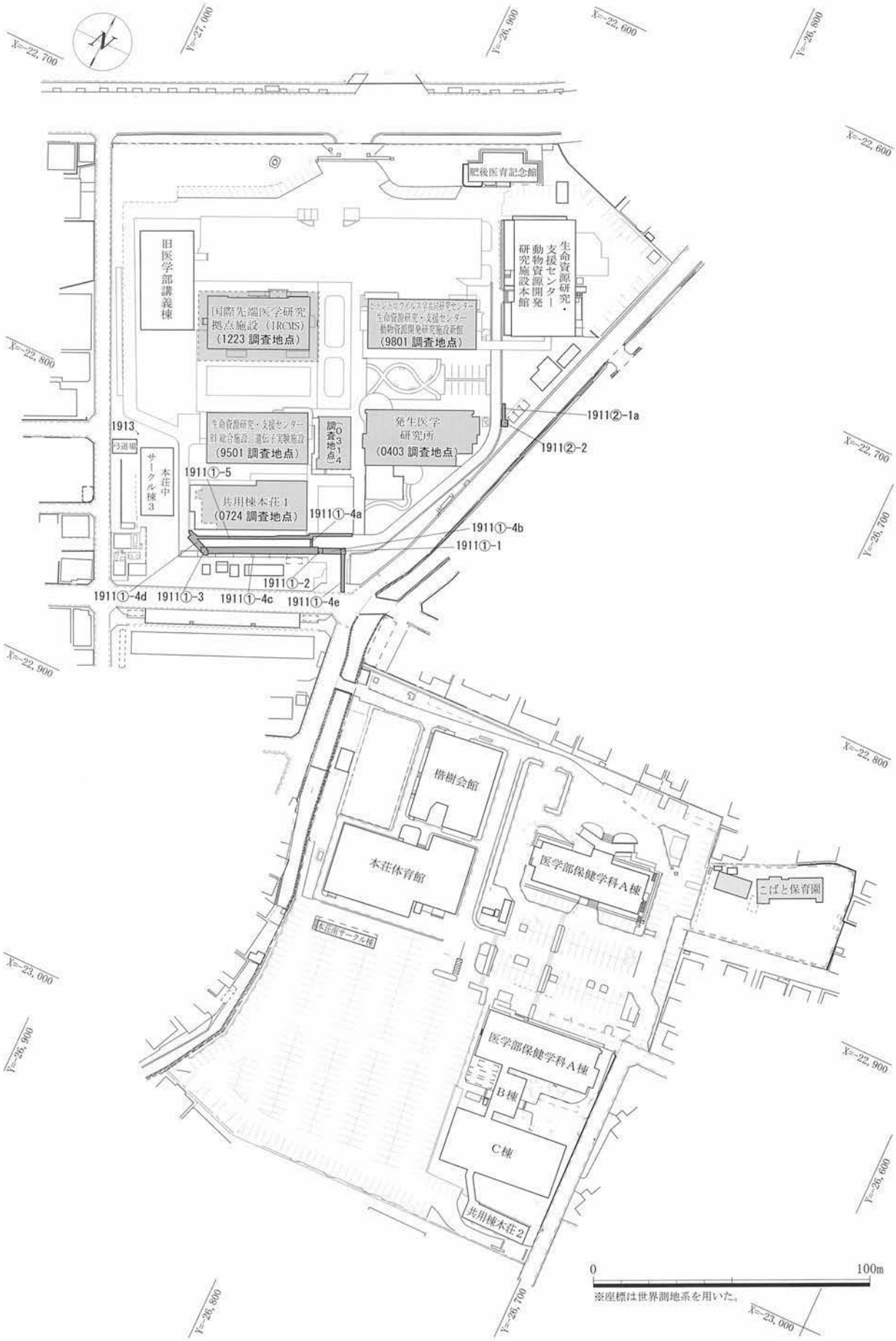


図6　本荘中・南地区における調査地点配置図（1/2000）

で地表下1.1m，南側で地表下1.25m掘削した．後述する②－2にかけて地表下0.95mで近代道路を，道路の北側から地表下1.0mで近代栗石を検出した．近代埋土内におさまる．

②－２は浸透井戸設置箇所である．2.2×2.2mを地表下3.8m掘削した．地表下0.9～0.95mで，②－1aから続く近代道路の続きを検出した．地表下1.2mで近世埋土，地表下1.65mで西側に丁字状分岐のある近世溝と，溝に切られた硬化面を検出した．

遺物は，縄文土器数点のほか，土師器・須恵器・陶磁器・瓦・煉瓦・ガラス製品などが出土している．

写真55　①調査区近景（西より）

写真56　①－２古代道路検出状況（南より）

写真57　①－4c 古墳時代～古代竪穴建物検出状況（南より）

写真58　①－4e 近代建物検出状況（南より）

２．（本荘中）ライフライン再生（受配電設備）工事（コンクリート柱）に伴う工事立会（1913）

＜調査期間＞

2019年12月20日

＜調査面積＞

0.2㎡

＜調査員＞

土野雄貴．

＜調査概要・結果＞

本荘中地区のライフライン再生工事における付帯工事の一つである．本荘中サークル棟３内に設置されている受配電設備の改修に伴い，建物の北側へ受配電設備が仮設されることになった．この仮設設備に必要な電源を確保するための，仮設電柱敷設に伴う工事立会である．

受配電設備の北側，直径0.5mを掘削した．掘削開始後すぐに，掘削箇所はコンクリート製の桝状構造物の内側に位置することが判明した．内部はすべて現代埋土であり，使用停止後残置されたものとみられる．地表下1.2mまで掘削したが遺構・遺物の検出はなかった．

写真59　掘削完了状況（北より）

Ⅱ－5　渡鹿地区　（図７・８参照）

１．（渡鹿）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事（敷地境界東側）に伴う工事立会（1915）

＜調査期間＞

2020年１月20日，２月13日

＜調査面積＞

106.1㎡

＜調査員＞

大坪志子．

原田範昭（熊本市文化振興課）．

＜調査概要・結果＞

渡鹿グラウンドと警察学校との敷地境界にあるブロック塀の改修で，古い塀は基礎からすべて撤去し，ほぼ同じ位置に新たな塀を新設する工事である．

古い塀の地上部分を撤去し，基礎部分撤去の段階で工事立会を実施した．北端（①地点），南端付近（④地点），および中間の２カ所（②③地点）の計４か所で，基礎底部までの深さと，設置時の掘方範囲を確認し，掘方内で撤去作業ができるのか，試掘をおこなった．①地点では，塀の両側0.8～0.9mが掘方で，西側では地表下0.6mで古代の遺物包含層が検出されることを確認した．②地点は，傍の樹根の対策のために，基礎が頑丈に作られていた．このため，この区間のみ基礎新設の掘削時に撤去し，立ち合うこととした．③地点では，地表下0.55m程度で古代の遺物包含層が検出されることを確認した．試掘の結果から，周囲の掘削範囲は試掘坑に準じ，深さは0.55mまで，基礎は適当な大きさに分割して引き上げるよう指示した．

写真60　①地点試掘作業風景（南より）

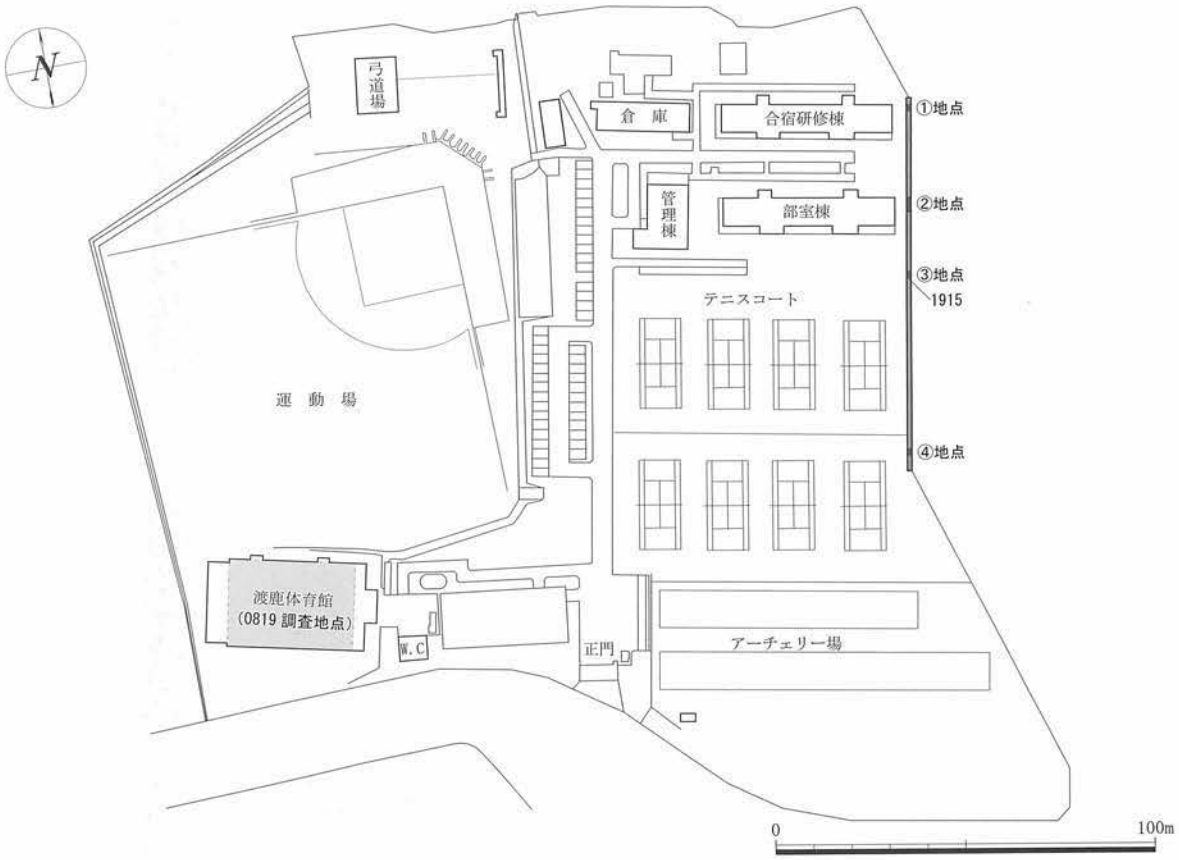


図７　渡鹿地区１における調査地点配置図（1/2000）

写真61　①地点試掘掘削状況（南より）

写真62　①地点試掘既存基礎の状況（西より）

写真63　③地点試掘大学側掘削状況（西より）

写真64　③地点試掘大学側掘削状況（南より）

新設の基礎掘削については，既存の基礎より深くなる部分について，改めて工事立会を実施することとした．深くなるのは，部室棟より南側の区間である．

本地区の地形は，部室棟とテニスコートの間で，一段南側が高くなる．河岸段丘崖とみられる．基礎掘削が深くなる区間を北から掘削していくと，この地形が一段高くなる段丘崖斜面で，古代の遺物包含層を検出した．設計通りの掘削をおこなうとすると，これより南側の区間では掘削が遺物包含層および遺構面に達し，施工前に発掘調査を実施する必要が生じると判断された．このため，本学施設部と工事業者間で協議をおこない，既存の基礎の掘方内で施工できるように設計を変更した．

一段高くなる区間については，既存の基礎の撤去に伴う試掘時に地表下0.55mで遺物包含層が検出され，古い塀は遺物包含層を掘削して設置されていることを把握していたため，周囲への影響がないよう，掘削について立ち会った．幅1.6m，深さ0.7mで掘削をおこない，ほぼ掘方内でおさまった．南側の数か所で島状に遺物包含層が検出されたが，それ以上の掘削はおこなっていない．遺構・遺物の検出はなかった．

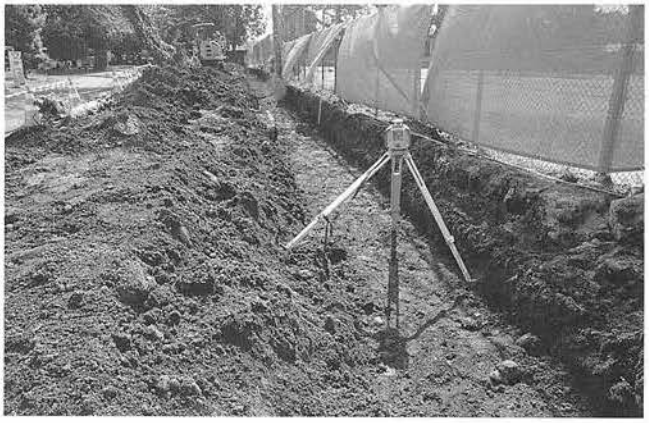


写真65　テニスコート東側新基礎掘削作業風景（北より）

写真66　④地点試掘包含層検出状況（南より）

2．（渡鹿２）屋外ガス管更新工事に伴う工事立会（1817）

＜調査期間＞

2019年５月10・13・14・17・21日

＜調査面積＞

91.73㎡

＜調査員＞

士野雄貴・新里亮人・大坪志子.

＜調査概要・結果＞

平成30年度からの継続事業である.

渡鹿住宅１～３号棟東側の道路を，道をはさんで２号棟に対面する５号棟敷地北西角付近から，南へ幅約0.6m，深さ0.8m，長さ23mを掘削した．北から2.4mは，下に別の本管が埋設されており，山砂が填圧されていた．これより南は，すべて近・現代埋土である．北から９m付近より以南では，掘削範囲の東側で，幅10cm程度が遺構面となる地山であった．調査区東壁を観察すると，地表下0.5～0.6mまで撹乱層で，その直下が地山土層であった．本来は，少なくともこの深さ，あるいはより浅い深さで地山と遺構が確認される．今回の掘削範囲で確認した遺構面では，遺構・遺物は検出されなかった.

続いて，掘削域の北側からの南側方向へ掘削を進めたが，掘削箇所北半では，玉砂利層直下にレンガ片（焼土の可能性あり）を混入する褐色土層が堆積しており，近世・近代陶器片の包含が確認された.

次に，南側から北側方向に向かって掘削を進めたが，ガス管設置面まではすでに既設側溝設置に伴う掘削がおこなわれており，包含層，遺構面は確認されなかった.

さらに本管に交差設置する引き込み管の埋設に伴う工事立会をおこなった．５月17日の掘削区域は５月14日本管設置個所に隣接しているが，掘削深度（120cm）は近代遺物を含む褐色土層の堆積深度内に納まっていたが，遺構は確認されなかった.

最後に掘削区域の北側では表土下70cmより明黄褐色層の堆積が認められたが，対象範囲からは遺物・遺構の確認はされなかった.

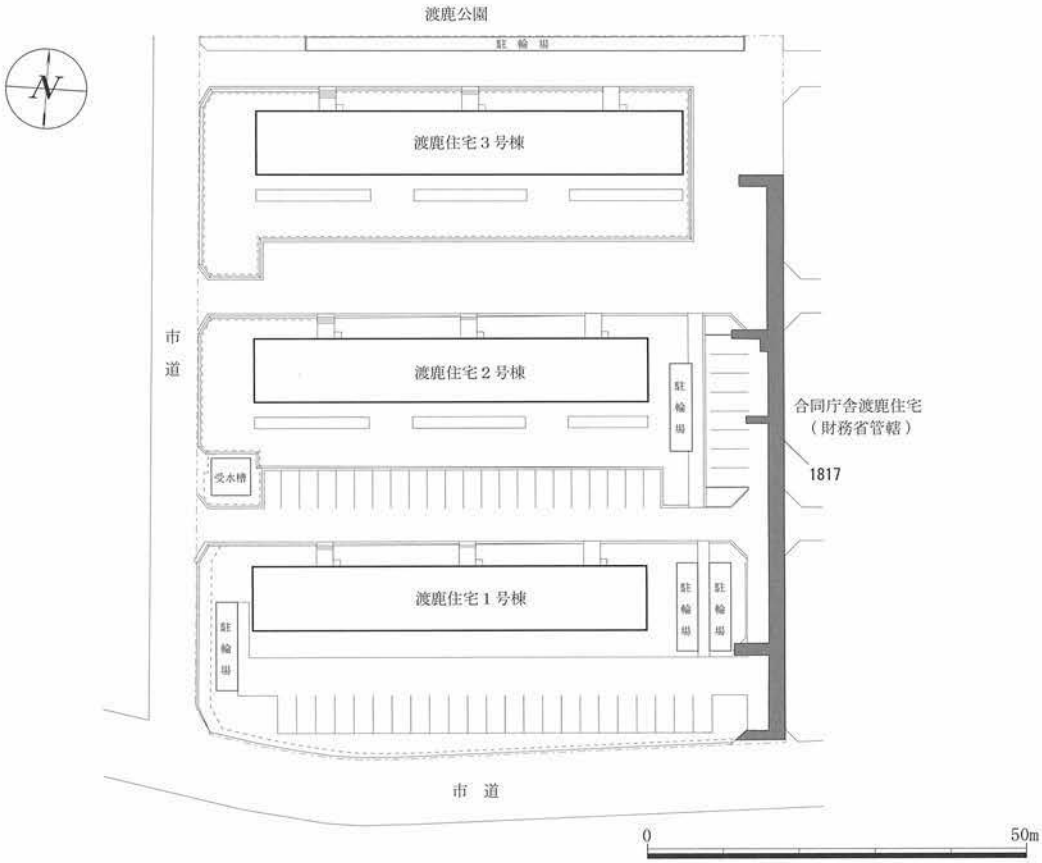


図８　渡鹿地区２における調査地点配置図（1/1000）

写真67　作業風景（北より）

写真69　東壁土層断面（西より）

写真68　掘削状況（南より）

写真70　明黄褐色層検出状況（西より）

Ⅱ－6　京町地区　（図９参照）

1．（京町）教育学部附属中学校屋外トイレ新営機械設備工事に伴う工事立会（1901）

＜調査期間＞

2019年４月15～17日

＜調査面積＞

44.5（20.6）㎡

＜調査員＞

士野雄貴．

＜調査概要・結果＞

教育学部附属中学校グラウンド内に新設された，屋外トイレへの給排水設備新営に伴う工事立会である．工事の着手順に，汚水桝新営箇所を①，中学校体育館北西にある既設共同溝までを②，共同溝から新営建物までを③とした．

①は，既設汚水桝南を1.2×2.0m，地表下0.9m掘削した．地表下0.1mで地山とみられる褐色粘質土を確認した．遺構・遺物の検出はなかった．

②ａは，0.6×13.5mを地表下0.7m掘削した．地表下0.23mで地山とみられる褐色粘質土を確認した．①の北3.1m付近から遺構の一部を検出したが，良好な遺存状況ではなく詳細は不明である．

②ｂは，中学校体育館北西にある止水栓から②ａに合流する区間である．屋外トイレの給水源である．0.5×3.5mを地表下0.5m掘削した．現代埋土におさまり遺構・遺物の検出はなかった．

③ａは，共同溝から北へ0.5×6.3mを地表下0.66～0.68m掘削した．共同溝の北2.0m付近から，地表下0.15mで現代栗石を検出した．その周辺からは地表下0.38mで近世埋土を確認したが，大半は近代埋土であった．

③ｂは，③ａ北端から西へ0.5×12.4mを，配管勾配を確保するため西端で地表下0.46m，東端で地表下0.66m掘削した．地表下0.2mで近代埋土を確認したが，遺構・遺物の検出はなかった．これ以上の掘削がないことを確認して立会を終了した．

遺物は，弥生土器・須恵器・陶磁器・ガラスを少量出土している．

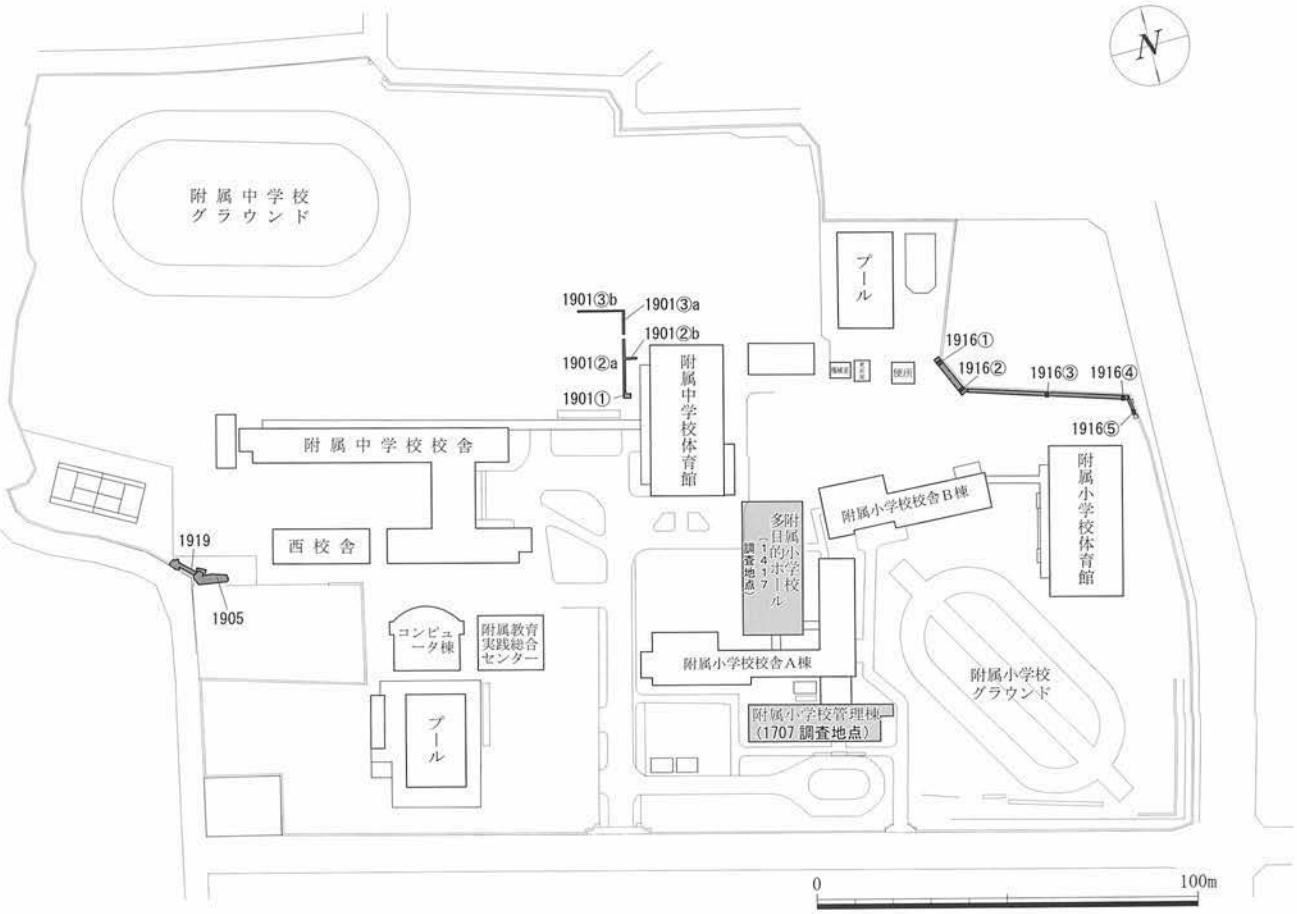


図９　京町地区における調査地点配置図（1/2000）

写真71　①・②調査区近景（南より）

写真72　②ａ遺構検出状況（南より）

写真73　②ａ遺構土層断面（東より）

２．（京町）教育学部附属中学校西校舎西側暗渠調査に伴う工事立会（1905）

＜調査期間＞

2019年８月29日，９月４日

＜調査面積＞

20.5㎡

＜調査員＞

士野雄貴．

＜調査概要・結果＞

令和元年８月27日夜，教育学部附属中学校敷地の外縁擁壁から，降雨時に漏水が発生した．市道を越えて近隣の民家に到達するほどの水量であったという．この案件を受け，熊本市教育委員会文化振興課の許可を得て８月29日より実施された，漏水復旧のための緊急工事に伴う工事立会である．

漏水したとみられる排水路は石積暗渠である．中学校西校舎南を通る管路と，中学校体育館からの管路とが合流した後，中学校敷地外縁に沿って北上し，排水される構造になっていた．漏水地点は，排水路が敷地に沿って北上する変化点付近であり，変化点の上流に破損個所があると想定された．

最初に，漏水地点から8.8mほど東，両管路の合流点付近を掘削したところ，地表下0.4mで蓋コンクリートを確認した．継ぎ目があって開けられるようになっており，蓋を開けて暗渠本体を目視した．この付近では問題なく流れているようであったが，開口部より１mほど西に進んだあたりで急激に下っており，破損個所を確認することができなかった．

そこで，漏水地点から2.2mほど東を掘削したところ，同じく地表下0.4mでコンクリートを確認できたが，現代掘方に切られていた．この掘方内をさらに掘削したところ，地表下0.7mで直径５cmほどの塩ビ被覆鉄管と，もう１枚のコンクリートが確認され，それが暗渠の蓋だと判明した．鉄管掘方に切られた上面のコンクリートは，管路保護のため敷設されたものとみられる．

暗渠蓋は，暗渠本体の幅を超えて裏込めもしくは掘方まで覆っており，付近の裏込めは水流の影響を受けていた．本体の破損により溢れた水が，頑丈な蓋に押し返されて掘方内へ流れ込み，中学校敷地外縁の擁壁から漏水したものとみられた．

この結果を受け，上面の保護コンクリートを撤去し，暗渠蓋の露出を試みた．しかし，最初に確認したような継ぎ目がなかなか見つからず，8.4×1.6m，東側で地表下0.4m，西側で地表下0.7mを掘削して，ようやく暗渠蓋を検出した．すべて現代埋土におさまる．

暗渠蓋の中央付近を斫り，西側を目視したところ，暗渠内に石材の転落を確認した．そこで，石材転落箇所の上部付近をさらに斫ったが，そのとき不意に豪雨に見舞われ，暗渠内の水位の上がり方から，より下流側が詰まっていることが確認できた．しかし作業の継続は困難になったため，後日改めて下流側の詰まり箇所を特定し，掘削の有無を確認することとして，この日の立会を終了した．

９月２日，工事業者から，前回作業を中断した開口部より暗渠本体を探査したところ，前回の掘削部分西端と擁壁の間に竪坑状のコンクリート製構造物があり，その

内部が土砂で埋没している状況を確認した，という連絡を受けた．これが漏水の原因であるとみられ，原因解消のための工事立会を９月４日に実施した．

本体の石垣脱落箇所は，擁壁の東2.2m辺りである．脱落石材は１点だけだったが，反対側の石材にも孕みが生じるなどの現況を呈していた．脱落した石材を元へ戻し，隙間にモルタル充填などをおこなうことで，とりあえず漏水は止められることを確認した．

続いて，竪坑蓋を確認するため，前回掘削箇所の西端と擁壁との間を掘削したところ，地表下0.7mで竪坑の蓋を確認できた．一部に亀裂が生じており，そこから土砂が流入したことが竪坑部埋没の原因とみられる．

続いて，竪坑から下手にある暗渠の位置を確認するため，竪坑蓋の北脇1.3×1.8mを掘削した．地表下0.4mで保護コンクリートを確認したが，地表下0.9mまで下げても暗渠蓋を確認できなかったためそれ以上の掘削を止めた．掘削は現代埋土におさまり，遺構・遺物は検出されなかった．竪坑蓋を露出することで遺跡に影響を与える恐れはないと判断したため，残りの作業については慎重な作業を指示して立会を終了した．

なお，後述する1919調査は本調査の成果を受けて実施されている．併せて参照されたい．

写真74　調査区近景（北東より）

写真75　コンクリート製暗渠蓋検出状況（東より）

写真76　竪坑脇掘削状況（東より）

３．（京町）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事（北東側）に伴う工事立会（1916）

＜調査期間＞

2020年１月20日

＜調査面積＞

61.3（5.4）㎡

＜調査員＞

山野ケン陽次郎．

＜調査概要・結果＞

京町地区北東側，小学校敷地と民家の境界に位置するブロック塀の補強を目的とした工事に係る工事立会を実施した．

施工範囲は東西に50mと長く，施工掘削深度によってＡ～Ｄの４つの工区に分かれる．各工区に西から①～⑤の位置番号を付して試掘を実施した．①は附属小学校プールの南東隅にあたり，1.6×0.9mの範囲を地表下1.2mまで掘削した．本試掘地点は，やや微高地であるプールへの盛土斜面に相当し，掘削はガラス，小石混じりの現代埋土内におさまった．②はＡ工区とＢ工区の接点に位置し，1.1×0.8mの範囲を地表下0.8mまで掘削した．全て現代埋土中におさまっている．③はＢ工区の東側，②から東に20.5mに位置する．1.2×0.8mの範囲を地表下0.3mまで掘削したが，いずれも現代埋土内におさまった．④はＣ工区の東端から西へ3.3mの距離に位置する．1.4×0.9mの範囲を地表下0.7mまで掘削したが，全て現代埋土内におさまった．⑤はＤ工区の南端に位置し，1.0×0.9mの範囲を地表下0.5mまで掘削した．ガラスや煉瓦片が出土するなど全て近代埋土内におさまっている．

以上，試掘調査成果により，掘削予定箇所はすべて現代盛土内におさまると判断した．よって工事業者に掘削に関する注意を指示して工事を進めさせた．遺構，遺物は検出されなかった．

写真77　B・C工区（東より）

写真78　①区重機掘削作業風景（南東より）

写真79　①区掘削状況（西より）

写真80　②区重機掘削風景（東より）

写真81　②区掘削後状況（南より）

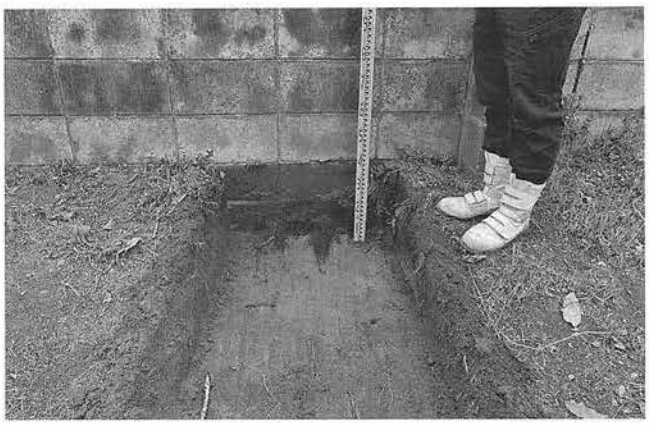


写真82　③区掘削後状況（南より）

写真83　④掘削状況（南西より）

写真84　⑤掘削状況（西より）

4．（京町）屋外排水設備（暗渠等）改修工事に伴う工事立会（1919）

＜調査期間＞

2020年２月19日

＜調査面積＞

18.1㎡

＜調査員＞

大坪志子.

＜調査概要・結果＞

京町地区の西隅に位置する暗渠の改修工事である．本事業は，1905調査地点の項で記載したとおりの破損と漏水があり，正式に補修工事として93条１項を提出し，施工したものである．

敷地の擁壁沿いに設置された暗渠は，終点が擁壁裏に沿った竪坑となっており，下部で外に排水されるようになっていた．しかし，それが不可能になったため，暗渠を少し西側へ延長して枡を設け，枡からさらに既存の排水管に接続する工事である．

最初に，既存の暗渠から新しく配管を延長する部分を掘削した．延長部分は階段状に一段高低差が生じるため，暗渠との接続部がある高い範囲から掘削した．1.8×1.6m弱の範囲は，暗渠の掘方と現代埋土であった．既存の暗渠は竪坑であるため，掘方は広く深かった．また，当該地点は２方向を擁壁に囲まれる形で，擁壁の裏込めの客土の範囲内である可能性も高かった．

このような状況から，延長部においても，遺物包含層や遺構面が検出される可能性は極めて低いことを確認し，残りの範囲については慎重に工事を進めるよう指示して工事立会を終了した．

中学校校舎の南西側では，遺構面が低くなるが，遺構は存在することが確認されている．今後，旧地形において，台地縁辺のどこまで遺構が存在するのか，注意を払う必要がある．

写真85　掘削作業風景（南東より）

写真86　掘削状況（北東より）

Ⅱ－7　新屋敷地区　（図10参照）

1．（新屋敷１）駐車場整備工事に伴う工事立会（1906）

＜調査期間＞

2019年９月19日

＜調査面積＞

0.41㎡

＜調査員＞

大坪志子．

＜調査概要・結果＞

官舎跡地を駐車場として整備する事業である．敷地内を鋤取りして平坦に均し，精算機を設置，周囲にフェンス・ブロック基礎を配置する工事である．この中で，最も深く掘削する工事が，フェンス・ブロック基礎の設置であった．このため，最初に18箇所設置予定のフェンス・ブロック基礎のうち，２カ所について工事立会を実施することとした．

官舎と付帯設備等の撤去の際に，既に掘削している地点もあるため，フェンスを設置する敷地北側の中で，西から３つ目（①地点），東から３つ目（②地点）の地点を選択した．

①地点は，0.5×0.5mの範囲を0.6mの深さまで掘削した．ちょうどこの深さまでは現代埋土で，直下が古代の遺物包含層である．遺物が少し巻き上げられたのか，土師器の細片が数点混入していた．

②地点は，0.4×0.4mの範囲を0.6mの深さまで掘削した．①地点より地表面が高くなっており，本地点での掘削は全て現代埋土内であった．東側の掘削には，深くならないように注意を促した．

このほかの工事は，現代埋土内で施工できると判断し，慎重に施工するよう指示して，工事立会を終了した．

写真87　①地点作業風景（南より）

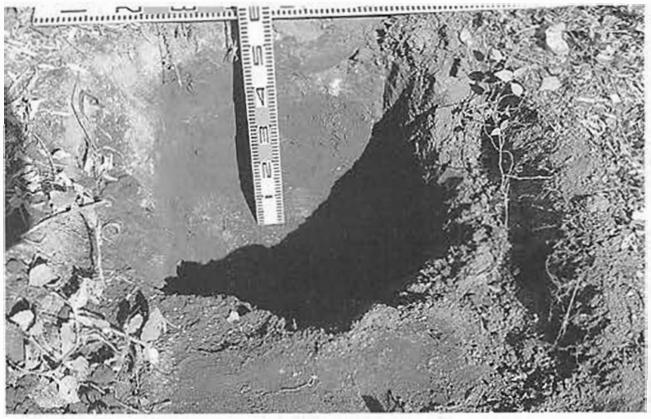


写真88　①地点掘削状況（南より）

写真89　①地点掘削状況（南より）

写真90　②地点作業風景（東より）

写真91　②地点掘削状況（南より）

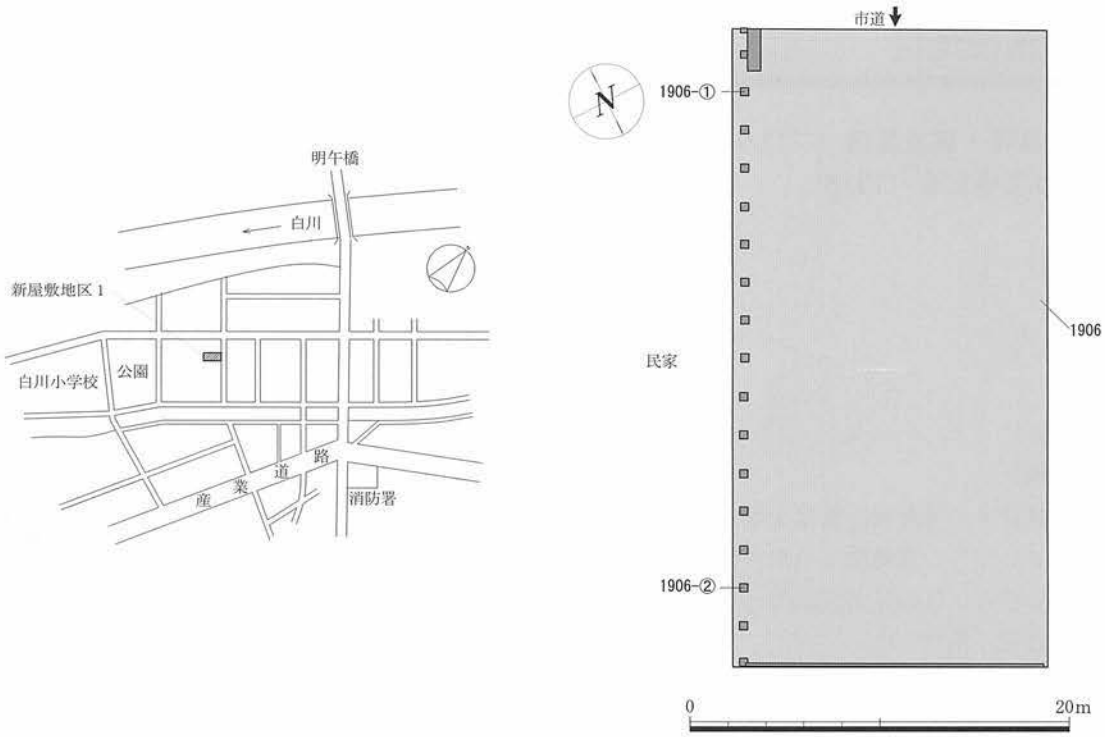


図10　新屋敷地区における調査地点配置図（1/400）

Ⅱ－8　新南部地区　（図11参照）

1．（新南部）基幹・環境整備（ブロック塀対策）工事に伴う工事立会（1918）

＜調査期間＞

2020年２月10日

＜調査面積＞

27.9（3.4）㎡

＜調査員＞

山野ケン陽次郎.

＜調査概要・結果＞

新南部団地のブロック塀対策に係る工事立会を実施した．新設ネットフェンスの基礎施工のための掘削で，既存ブロックに沿ってＡ～Ｃの３工区に①～⑦の７カ所の試掘トレンチを設定，調査した．

Ａ区は団地北側入り口西側のフェンス沿いである．①はＡ区壁西端に90×75㎝の掘削を実施した．掘削は全てブロック塀設置時の基礎掘方埋土内におさまった．また，地表下50㎝でブロック塀のコンクリート基礎を検出した．②はＡ区東端に80×80㎝の掘削を実施し，地表下40cmで壁から60㎝張り出したブロック塀コンクリート基礎を検出した．この２か所のトレンチの試掘により，他の試掘箇所でも同様の状況を想定することができた．

Ｂ区は団地北側入り口東側のコンクリート塀沿いである．ここではコンクリート塀の西端，中央屈曲部，東端に約13m間隔で③～⑤を設定して掘削を実施した．いずれも80㎝×70㎝程の掘削で，地表下35～45㎝でＡ区と同様のコンクリート基礎を検出できた．

Ｃ区は新南部団地西端のコンクリート塀南側に相当する．本区では西端（⑥）および東端（⑦）で45×45㎝の範囲を人力掘削により調査した．いずれも地表下50cmで塀の基礎を確認でき，施工上，これ以上の掘削の必要は生じなかった．

以上，試掘の結果，いずれの区でも現行のコンクリート基礎上に新規フェンス基礎を設置するための掘削に留まるため，工事業者に掘削に関する注意を指示し，工事立会を終了した．遺構，遺構の検出はなかった．

本調査地点北東のブロック塀沿いには，赤煉瓦が数十点積まれた状態で放置されている．本煉瓦には「熊本監獄製造」印が捺されており，これらが第五高等学校（または中学校）の関わる明治20年代前半製造の赤煉瓦であることが分かる．過去の調査では，黒髪北地区でのみ発見されているが，本煉瓦は薬学部の実習地の花壇縁石として利用するために持ち運ばれたと考えられる．

写真92　①掘削後状況（北より）

写真93　②掘削状況（南より）

写真94　③掘削状況（南より）

写真95　③掘削状況（東より）

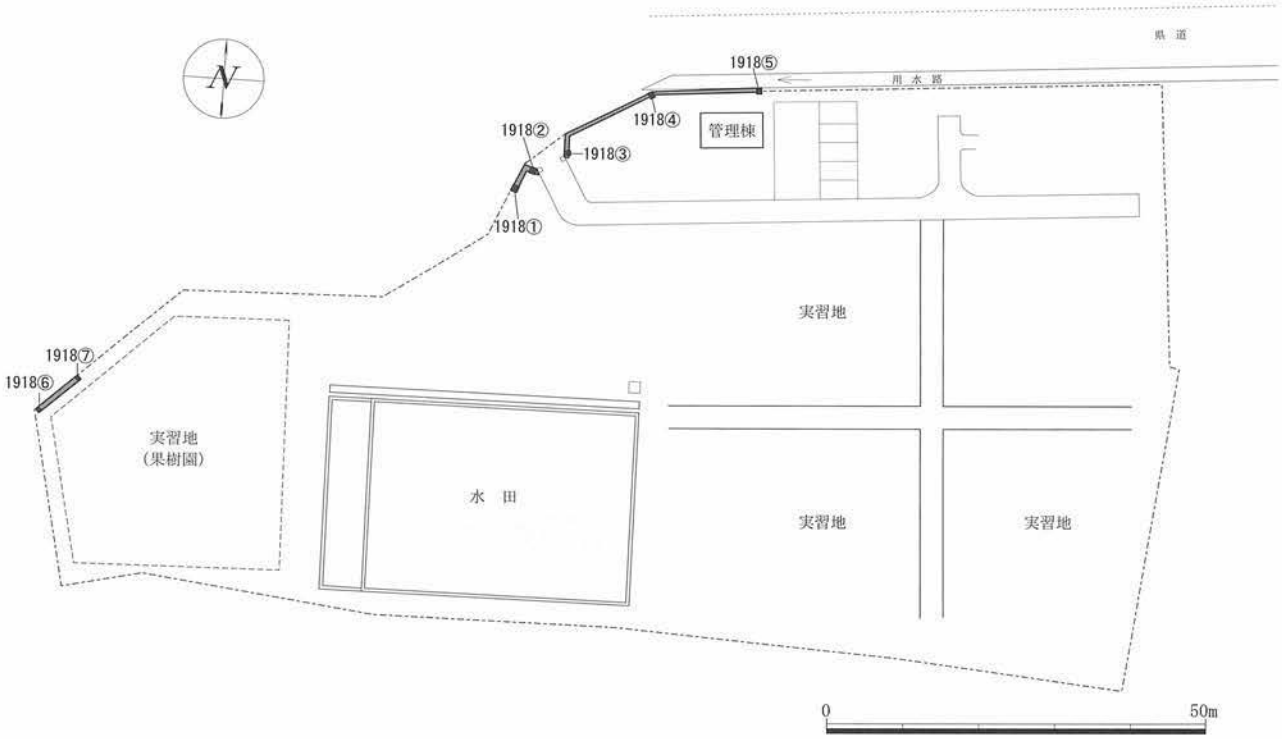


図11　新南部地区における調査地点配置図（1/1000）

写真96　④重機掘削作業風景（南より）

写真98　⑥・⑦掘削作業風景（北東より）

写真97　⑤掘削状況（南より）

Ⅱ－9　益城地区　（図12参照）

1．（益城）パスルパワー試験場実験研究棟接地工事に伴う工事立会（1908）

＜調査期間＞

2019年11月１日

＜調査面積＞

150㎡

＜調査員＞

大坪志子.

＜調査概要・結果＞

益城町に所在するパルスパワー試験場に実験研究棟接地工事を実施することとなった．試験場は，周知の埋蔵文化財包蔵地内ではないが，近接する二つの埋蔵文化財包蔵地にはさまれた地点に位置しており，当該敷地での今後の工事の参考となることも考慮して当センターの判断で立ち会うこととした．

掘削地点は，試験場敷地の西端に近く，15×10mの掘削範囲のうち，北側を地表下約２ｍまで掘削した．すべて客土である．周辺地形の状況と，熊本空港設置に伴う周辺地域の整備当時の話から，当該地点は盛土による造成をおこなっているようである．掘削底である地表下２ｍで，耕作土と考えられる土壌を検出した．造成前の旧地表面であろう．遺構・遺物の検出はなかった．

写真99　作業風景（北東より）

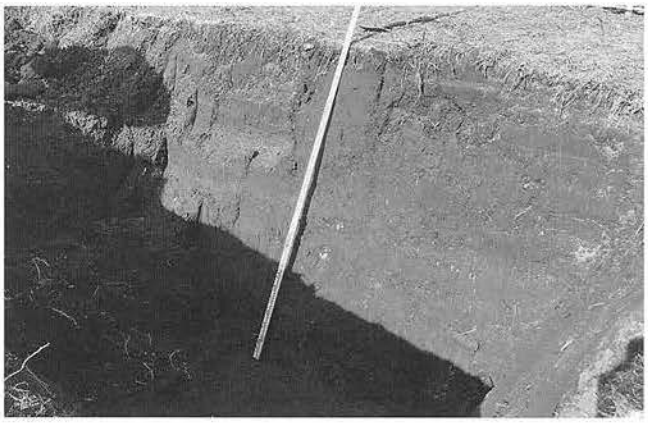


写真100　北壁土層断面（南東より）

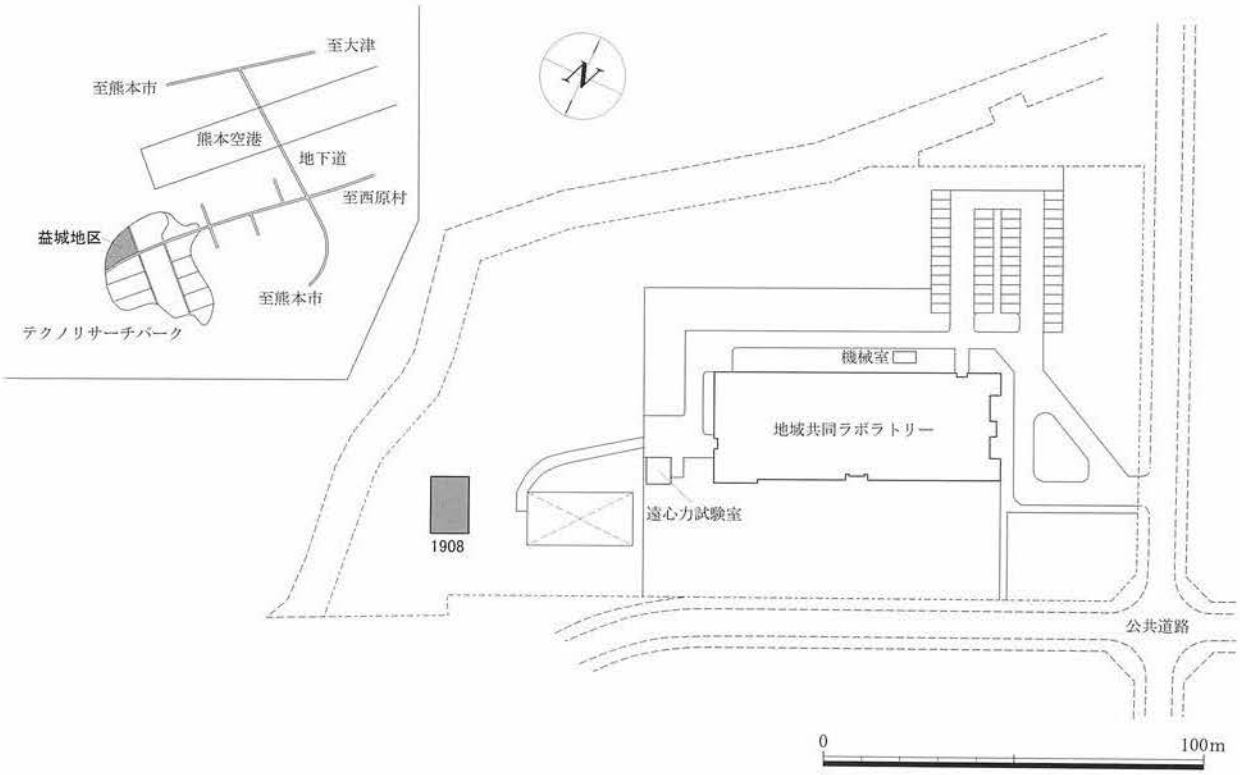


図12　益城地区における調査地点配置図（1/2000）

Ⅱ－10　松島地区　（図13参照）

1．（松島町）屋外給水管漏水修繕工事に伴う工事立会（1920）

＜調査期間＞

2020年３月９日

＜調査面積＞

21.4（1.45）㎡

＜調査員＞

山野ケン陽次郎.

西田京平（上天草市教育委員会）.

＜調査概要・結果＞

上天草市松島町前島に所在する沿岸域環境科学教育研究センターの屋外給水管の漏水修繕工事に係る工事立会を実施した．前島は上天草市最大の島である大矢野島から南へ約２㎞に位置し，島周囲3.8㎞，標高61.5mの小島である．研究センターはこの島の西端部に所在する．調査地は標高20m に満たないやや小高い丘陵から海に向かってなだらかに下る傾斜地途中（標高約10m）に位置している．

1956年の坂本経堯氏による遺物採集によって前島遺跡の存在が明らかとなり，1963年より開始された天草五橋架橋工事によって貝塚と想定される部分が破壊を受けたとされる（熊本県教育委員会1968）．その後，取り付け道路建設に際して1966年の熊本女子大学（現熊本県立大学）の乙益重隆氏教授を団長とする調査団による発掘調査が実施されている．この際には少量の縄文土器や石鏃，自然貝類，動物骨が発見されている．1995年には当センター（当時は調査室）によって調査地周辺で小規模の発掘調査が実施された．この際，基盤層と考えられていた赤褐色土層中から山形押型文土器などの遺物が出土し，縄文時代早期の遺物包含層が存在することが確認された．遺物として縄文時代早期の土器を中心に石鏃や磨石，石斧，砥石等の石器を得ることができたほか，用途不明の集石遺構を検出することができた．調査では，従来貝塚と評価されていた混貝土層が赤褐色土上より検出されたが，本層からは近代以降の遺物が主体的に出土することから，これらが貝塚ではなく，近代の畑の肥料として散布された貝が耕作土と混ざり，貝塚として誤認されたと想定した（小畑編1995）．

本調査では，熊本大学埋蔵文化財調査センターの調査員と上天草市教育委員会社会教育課の担当者と合同で工事立会を実施した．調査では先だって給水バルブ周辺を掘削し，地下給水管の位置を確定した．そこから目的の受水槽に向かって，南北に長さ13.5m，幅25cmの調査区を設定した．この調査区南端から東側へ約４.5mの位置にある受水槽のバルブ根元まで掘削範囲を伸ばし，全体

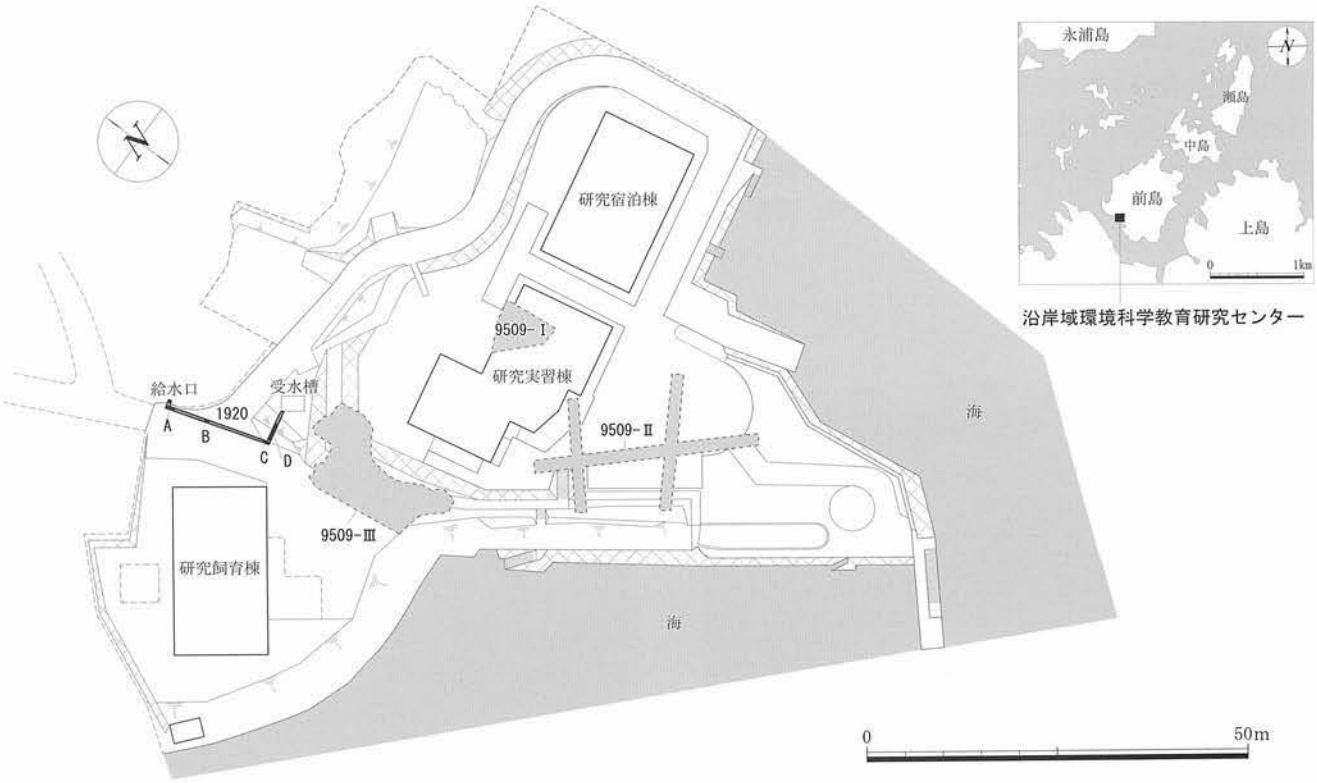


図13　松島地区における調査地点配置図（1/1000）

がL字状の調査区を設定した．調査では，本調査区にA～Dの4カ所の試掘トレンチを南北に設けて文化層の確認をおこなった．

Aトレンチは調査区北端に位置し，幅0.25m，長さ1.1mである．Bトレンチは調査区北端から南に5mに位置し，幅0.25m，長さ0.7mである．Cトレンチは調査区南端に位置し，幅0.25m長さ1mである．現在の地表面はAトレンチからCトレンチに向かって10～20cmほど緩やかに傾斜している．各トレンチで土層を確認したところ，アスファルト下には礫混じりの整地土が30cm程堆積しており，その下位に地表下0.4～0.45mで砂混赤褐色土層を検出した．

また，調査区南端，受水槽への傾斜部に位置するDトレンチでは幅0.3cm，長さ2.5mの範囲を掘削した．他のトレンチ同様に地表下0.4m程で砂混赤褐色土層を検出しており，地表下0.5m以下では，より混じり気の少ない赤褐色土層に漸移的に変化した．また，本土層は漸移層も含めて東に向かって緩やかに傾斜していることが確認できた．

A～Dいずれのトレンチでも赤褐色土層中に縄文時代の土器片や遺構などを検出することはできなかった．本工事の施工深度は地表下45cmであり，ほぼ赤褐色土層の上面の掘削におさまることから，工事業者に掘削深度厳守の指示を出し，本工事立会を終了した．

本調査では過去の発掘調査で報告されている近代の耕作土とされる混貝土層は検出されなかった．また，本調査で検出した赤褐色土層が1995年に検出された縄文時代早期の遺物包含層とされる基盤層に対応するか否かの判断は困難であった．堆積状況からは沿岸域環境科学教育研究センターまで下る道路建設の整地の際に傾斜地の大部分を削平していることが想定された．遺構，遺物の検出はなかった．

写真101　調査地遠景（北より）

写真102　調査地受水槽付近遠景（北より）

写真103　重機掘削作業風景（北より）

写真104　水管引き入れ口掘削状況（南より）

写真105　トレンチA～C掘削状況（南より）

写真106　トレンチＡ西壁土層断面（東より）

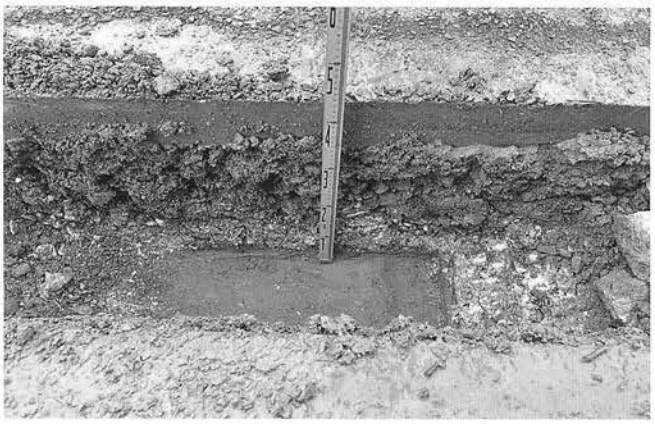


写真107　トレンチＢ西壁土層断面（東より）

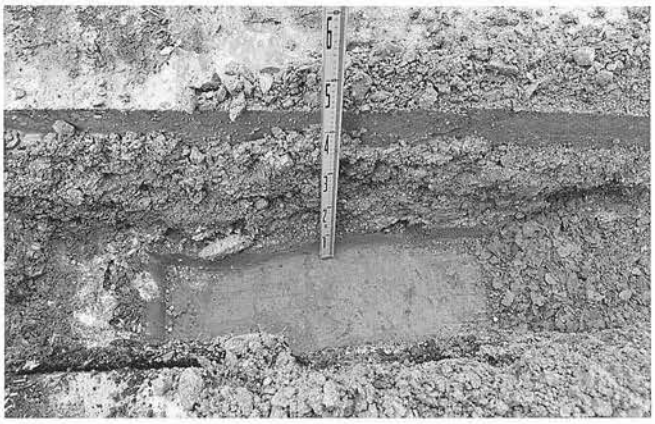


写真108　トレンチＣ西壁土層断面（東より）

写真109　トレンチＤ掘削状況（西より）

写真110　トレンチＤ北壁土層断面（南より）

写真111　トレンチＤ掘削状況（東より）

（引用・参考文献）

小畑弘己編　1995『熊本大学埋蔵文化財調査室年報』２　熊本大学埋蔵文化財調査室

熊本県教育委員会編　1968『熊本県文化財調査報告　前島貝塚発掘調査』

第Ⅲ章　黒髪地区における近代遺跡の調査事例

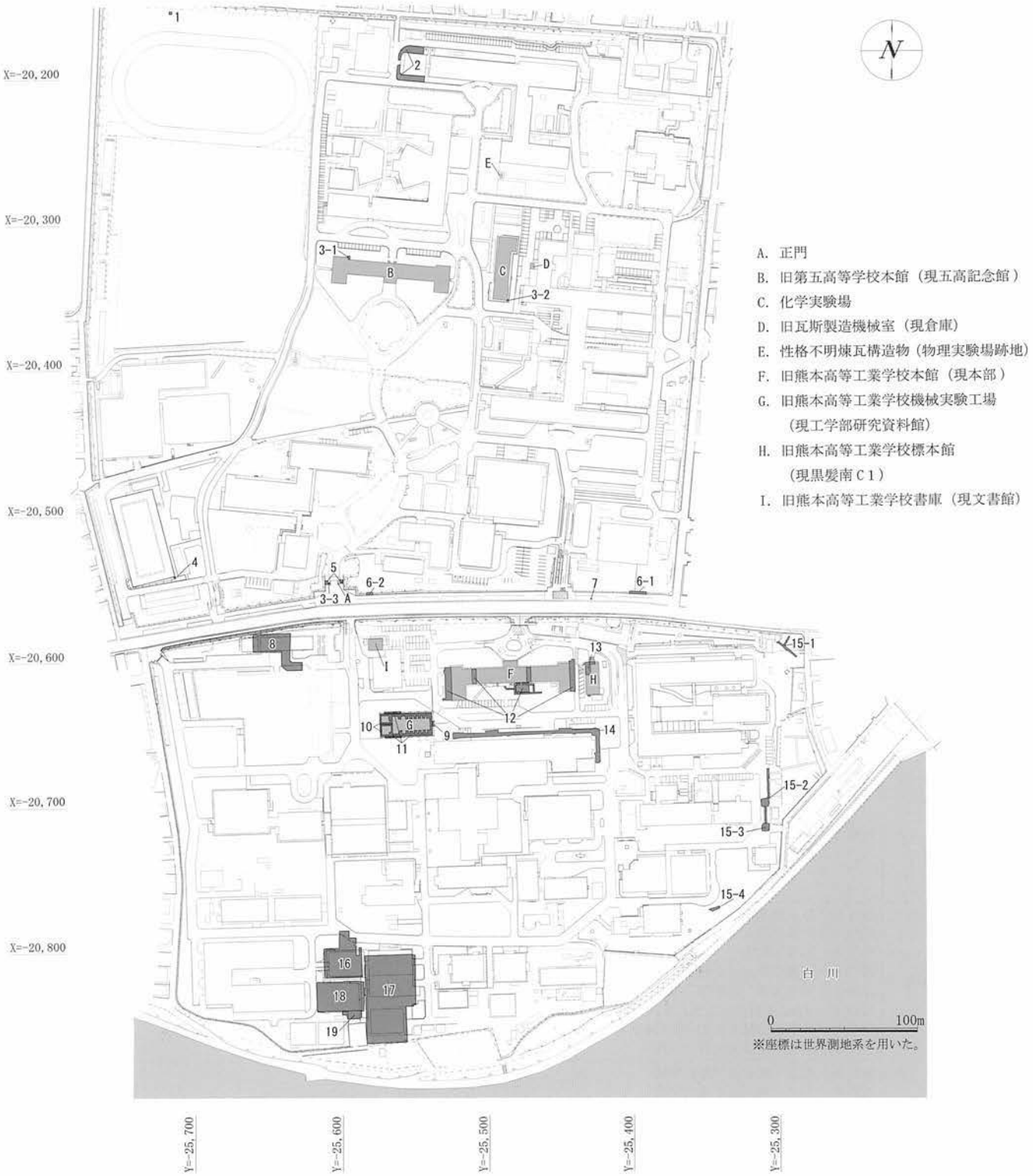
1．はじめに－近代遺跡の調査について－

埋蔵文化財調査センター（以下，センター）では，本学各キャンパスにおける埋蔵文化財の発掘調査を1994年より実施してきた．これまでに縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世，近世，近代の各時期の遺構・遺物の調査事例が累積している．このうちセンターにおいて近代に関する遺跡の調査事例は，近年増加傾向にあり（表１），年報や報告書，学会発表を通して，その成果を公表してきた（山野2018a）．

文化庁は，平成10年６月の埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会における『埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取り扱いについて（報告）』にて，埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲について原則を示している．すなわち「①おおむね中世までに属する遺跡は，原則として対象とすること」，続いて「②近世に属する遺跡については，地域において必要なものを対象とすることができること」，最後に「③近現代の遺跡については，地域において特に重要なものを対象とすることができること」と定めている．また，これに加え「埋蔵文化財とする範囲は～原則及び基準は適宜合理的に見直すことが必要」としている．平成10年時点の全国の統計によると，遺跡の種別を問わず時代の要素だけで埋蔵文化財として取り扱う範囲を決めている地方公共団体は全体の54％である．そのうち近世までの遺跡を対象としているのは74％で，近代までは９％にすぎない（文化庁文化財記念物課・奈良文化財研

表３　熊本大学構内遺跡の近代遺跡調査地点一覧表

地区名	遺跡名	土地利用・施設の変遷	調査地点	近代遺跡の調査事例	文献
黒髪北	黒髪町遺跡群	1887年　官立　第五高等中学校 1894年　官立　第五高等学校 1949年　熊本大学　法文学部、理学部 1960年代より　教育学部移動　現在 1969年　正門・五高記念館（旧第五高等学校本館）・化学実験場が国の重要文化財に指定	9406	薬莢	年報１
			1360	第五高等学校正門・本館・科学実験場煉瓦基礎	年報20
			1528	第五高等学校厨房・浴室	報告書12
			1717	第五高等学校石垣	年報24
			1726・1727	第五高等学校正門煉瓦基礎	年報24
			1735	道路硬化面	年報24
			1912	第五高等学校第一教師館煉瓦基礎	本書
黒髪南		1906年　官立　熊本高等工業学校 1944年　官立　熊本工業専門学校 1949年　熊本大学　工学部 1950年代半ばより　理学部移動　現在 1994年　工学部研究資料館（旧熊本高等工業学校機械実験場）が国の重要文化財に指定 1998年　本部（旧熊本高等工業学校本館）が有形登録文化財に登録	0102	塹壕６基	年報８
			0932	熊本高等工業学校旧本館煉瓦基礎	報告書８
			9909・0203 1309・1418	熊本監獄・刑務所埋葬地	報告書６・13 年報９・21
			1310	煉瓦基礎・工友寮関連栗石基礎・陶磁器、焼夷弾	年報20・21
			1361	熊本高等工業学校機械実験場煉瓦基礎	年報20
			1429・1430 1436・1437	熊本高等工業学校旧本館煉瓦基礎、火災痕跡	年報21
			1724	熊本高等工業学校特別試金室煉瓦基礎	年報24
			1823・1903	熊本高等工業学校機械実験場床下遺構群	本書
本荘北	本庄遺跡	1901年　県立熊本病院 1924年　熊本医科大学付属医院 1929年　熊本医科大学 1945年　空襲で大部分が焼失 1949年　熊本大学　医学部　現在 1949年～1962年校舎を再建、城内二の丸から移転 1998年　医学部山崎記念館（旧熊本医科大学図書館）が有形登録文化財に登録	9601・9707 1104	仙崇寺旧墓地・墓石・各種副葬品	報告書４・９ 年報４
			1425・1426	栗石基礎	報告書12
			1504	県立熊本病院建物基礎・陶磁器	報告書12
			1708	建物基礎・道・陶磁器	年報24
本荘中			1706	廃棄土坑・建物基礎	報告書15
大江北	大江遺跡群	1912年　私立　熊本薬学専門学校 1925年　官立　熊本薬学専門学校 1945年　空襲で大部分が焼失 1949年　熊本大学　薬学部　現在	1728	建物基礎	年報24
			1806・1813	熊本薬学専門学校煉瓦基礎	年報25
渡鹿１		1888年　工兵第六聯隊兵営（敷地一部） 1900年　渡鹿練兵場 1945年　空襲で一部が焼失 1974年　渡鹿グラウンド　現在	0819	焼夷弾	報告書12
			1801	練兵場基礎・煉瓦	年報15
京町	京町台遺跡	藩政期　家老　澤村家屋敷 1893年　熊本尋常師範学校 1898年　熊本県師範学校 1914年　熊本県第一師範学校 1943年　官立　熊本師範学校 1949年　熊本大学　教育学部	9405	陶磁器	報告書１
			0721	近代土坑、陶磁器	報告書５
			1807	煉瓦構造物・煉瓦	年報25



1:9406 調査地点B-10 区　2:1528 調査地点　3:1360 調査地点（1:②区 2:③区 3:①区）　4:1912 調査地点④
5:1726・1727 調査地点　6:1717 調査地点（1:①　2:③）　7:1735 調査地点　8:0102 調査地点　9:1361 調査地点
10:1823 調査地点　11:1903 調査地点　12:1429 他調査地点　13:0932 調査地点　14:1724 調査地点
15:1310 調査地点（1:Ⅱ10-2区・Ⅱ12 区 2:Ⅲ9 区 3:Ⅲ4・5 区　4:Ⅴ5 区）
16:0203 調査地点　17:9909 調査地点　18:1309 調査地点　19:1418 調査地点

図14　黒髪地区における煉瓦建築と近代遺跡の調査地点（1/4000）

究所編2010).

近代の遺跡の調査を実施するか否かの問題は，一つには考古学という学問の範囲に起因している．濱田耕作は考古学の範囲について「後世文書記録等の文献的資料豊富にして，是のみを以ても略ぼ其の時代を研究するに充分なる時代は，主として歴史家の手に研究を委するを常とす.」と説明し，近代の遺跡について考古学の範囲に含みながらも，文献記録が豊富なことから，その中心からははずれるとしている（濱田1922）．また現実的な課題として，近代の遺跡を調査対象とした場合，調査にかかる費用，時間が増加するという問題がある．また，近代遺構が存在する場所は現在も継続的に土地が利用されていることが多く，遺構の検出深度も浅い．整備事業で頻繁に調査が必要となることなどからも，調査の実施については熟慮すべきである．

一方，1970年代以降には近代建築の有形文化財指定が本格化し，1990年度からは国庫補助事業として「日本近代化遺産総合調査」が開始した．これを受けて，近代化遺産として幅広い建造物が有形文化財に指定されるようになった．国の文化財保護施策や制度が近代にまで展開した上，これに先駆けた地方自治体における取り組みも活発であった（清水・村上2007）．2015年には「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産に登録され，明治維新150年にあたる2018年には，全国各地で近代に関わる記念事業などイベントが実施されており，近代遺跡への理解が国民レベルで浸透してきたと思われる．

さて，熊本大学のキャンパスのうち，黒髪北地区は九州で最初のナンバースクールである第五高中等学校（後の第五高等学校）の敷地にほぼ相当する．また，南に隣接する黒髪南地区は，熊本高等工業学校（後の熊本工業専門学校）の敷地を含んでいる．このほか，本荘地区は熊本医科大学付属医院，大江北地区は熊本薬学専門学校，京町地区は師範学校の敷地にほぼ相当している．さらに，体育館やグラウンドのある渡鹿地区は戦前まで渡鹿練兵場として利用されていた（表３）．このように熊本大学の敷地は明治から昭和期にかけて熊本における近代教育，医療，軍事の中枢を担った学校あるいは施設の跡地であり，この地下に眠る遺構や遺物は，少なくとも地域にとって重要な遺跡であるといえるだろう．本章では既往の調査で確認された黒髪地区における近代遺構および遺物について特記すべき調査成果を主とし，その概要をまとめ，今後の参考資料とする（図14）．

２．黒髪北地区における近代遺跡の調査事例

黒髪地区は，熊本市街地の東側，立田山と白川に挟まれた平野部に位置している．このうち北地区は現在，全学共通棟，法学部，文学部，教育学部の施設が建っており，明治20年（1887，以下必要に応じて和暦の後に歴年代を記す）に開校した第五高等中学校（後の第五高等学校）の敷地をほぼ引き継いでいる．構内には明治22，23年に建てられた第五高等学校の正門，旧本館（現五高記念館），化学実験場などの煉瓦建築が現存しており（写真112～114），これらは昭和44年（1969）に国の重要文化財に指定されている．また，このほかにも化学実験場西側に旧瓦斯製造機械室（現書庫），同実験場北側には，物理学実験場跡地に性格不明の煉瓦構造物が現存している（写真115・116）．これら建築に使用された煉瓦は，当時熊本市手取本町に所在した「熊本監獄」の囚人達によって製造された．立田山の南西麓，細川家の菩提寺である泰勝寺の参道下に熊本監獄煉瓦製造所が設けられ，明治21年から明治22年にかけて第五高等中学校の建造物のための煉瓦を生産していたことが大学史や当時の新聞に記録されている（五高創立七十周年記念会編1957，新熊本市史編纂委員会編1997）．平成28年度に実施した熊本地震に係る煉瓦等落下物の調査では，旧本館や化学実験場の煙突の煉瓦の平部分に「熊本監獄製造」印が確認できている（山野2018b）．以下に黒髪北地区における

写真112　正門（南より）

写真113　旧第五高等学校本館（南より）

写真114　化学実験場（北西より）

写真115　旧瓦斯製造機械室（西より）

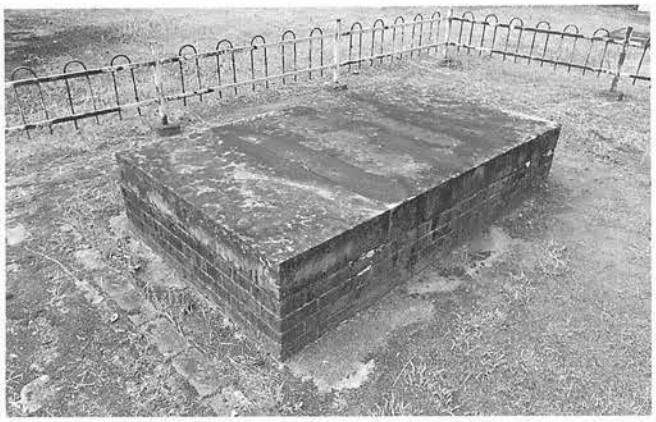


写真116　物理実験場跡地煉瓦構造物（南東より）

写真117　正門煉瓦基礎検出状況（北より：1360調査地点）

写真118　旧本館煉瓦基礎検出状況（北東より：1360調査地点）

写真119　化学実験場煉瓦基礎検出状況（東より：1360調査地点）

近代遺跡の概略を述べたい．

①　黒髪北地区1360調査地点（図14－3）

2013年度，耐震診断と基礎構造の把握のための工事に伴う煉瓦建築の基礎部分の工事立会を3カ所で実施している（大坪編2015）．調査箇所は正門（通称赤門）の西側北壁，旧第五高等学校本館の西側北壁，化学実験場の南東角などである．調査範囲は矮小であったが，本調査によって初めてこれら現存する煉瓦建築の地下構造を把握することができた．いずれの基礎も，煉瓦が階段状に積まれた「根積み」構造を呈している（写真117～119）．この根積みによって建物の自重を分散させると同時に，土との接地面を増やすことで耐震効果を増幅させている．根積みの段数は各構造物で異なるが，そのさらに下位に玉砂利混じりのコンクリート基礎が据えられる点は共通している．五高記念館には，第五高等中学校の開設時期に竣工した建造物の設計図面が保管されており（麻生・伊藤2013），『第五高等中学校側石割左翼図』などの図面と実際の各構造物の根積みの段数が一致した．注目したいのは正門の地上と地下の煉瓦の積み方の違いである．正門地上部分の煉瓦の積み方は，横列に煉瓦の小口と長手を交互に並べるフランス積みである．これに対し地下部分は小口列と長手列を上下に交互に積むイギリス積み

であった．フランス積みは，外観が華やかな印象を与えるという利点がある一方，イギリス積みに比べて耐震構造的に弱いという指摘がある（水野1999：p244）．明治・大正期の鉄道用構造物の積み方の調査を実施した小野田滋らの研究によれば，トンネルのパラペットやアーチ橋の高欄といった目立つ部分にフランス積みを適用する傾向がみられるという（小野田他1996）．正門は，来賓を迎える第五高等中学校の顔であることから，地上部分では景観的理由からフランス積みを採用し，地下部分では構造的理由でイギリス積みを選択したと考えられる．

② 黒髪北地区1528調査地点（図14－２）

2015年度，黒髪北地区の教育学部西棟の改修工事に伴う工事立会を実施した（松田編2017）．本調査区南東部で地表下0.15mより，幅0.7m，長さ4.5mにわたる煉瓦基礎（１号建物基礎）が検出されている（写真120）．また，調査区西部では地表下0.2mより，1.8×5.3mの範囲でＬ字形に並んだ煉瓦基礎（２号建物基礎）が検出された．これら煉瓦には「熊本監獄製造」印がおされており，第五高等学校期のものであることが分かる．『第五高等学校一覧』（明治23年，1890）の第五高等中学校全図と遺構の配置を照合したところ，１号建物基礎が厨房，２号建物基礎が浴室に相当することが判明した．いずれも五高生の寮である「習学寮」に付随する建物で1890年１月に竣工した煉瓦建物であった．煉瓦には「熊本監獄製造」印のほかに，カタカナ印や武田菱印，×印が確認できた．このうちカタカナ印については，平成28年度に実施した熊本地震による煉瓦等落下物の調査成果と照らし合わせた結果，イロハ歌の前半部分（「イ」から「レ」）の文字が使用されていることが明らかとなっている（山野2018b）．こうしたカタカナ印の類例は，東京の小菅集治監に関連する海堡（野口他2015）などの建造物や奈良少年刑務所の煉瓦において確認されている．その意味は不明だが，囚人グループが製造した煉瓦の品質管理や生産量把握のための責任印である可能性が考えられる．

③ 黒髪北地区1717調査地点（図14－６）

黒髪北地区1717調査地点では，熊本地震によってずれの生じた石垣の補修工事に伴う工事立会を実施した（大坪編2019）．黒髪北地区を囲っている現存の石垣の多くは五高時期のものとみられる．ただし，石垣同士の接地面に隙間が多いなど，後世の整備事業や部分的補修によって積みなおされた箇所も少なくない．本調査では，黒髪北地区南側石垣について８カ所の石材積みなおしを実施した．調査では使用された石材の法量や，石垣敷設の際の掘方が確認できた．また，裏込めに使用された拳大の礫に加え，まれに瓦や煉瓦片が混在している様子が

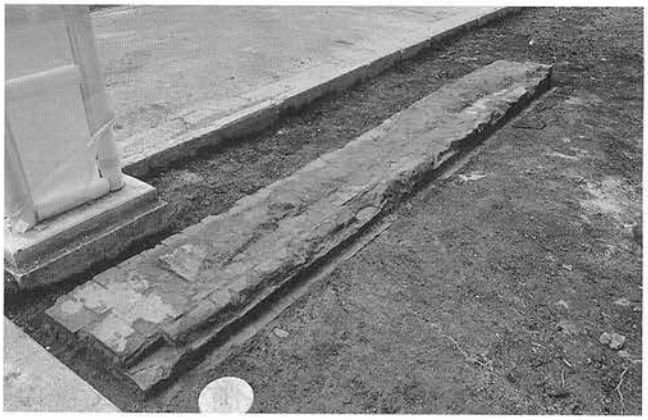


写真120　習学寮厨房煉瓦基礎検出状況（北東より：1528調査地点）

写真121　石垣撤去状況（南より：1717調査地点）

確認された（写真121）．

④ 黒髪北地区1735調査地点（図14－７）

黒髪北地区1735調査地点では，県道337号熊本菊陽線の拡幅に伴い，北側歩道際にある花壇低木の抜根に伴う工事立会を実施した（大坪編2019）．調査では，低木の抜き取り跡，地表下８～31cmより複数枚の硬化面を検出することができた．この硬化面の由来について明治41年（1908）～大正９年（1920）にかけて設立された熊本軽便鉄道の存在が想定できる．現在の県道337号線，当時の県道大分往還上には蒸気機関車が小型客車１両を牽引する形態の鉄道が走っており，南千段畑－上立田間の路線内には「五高前」駅があった．当時の地図を見る限り駅舎建物は見受けられないが，検出した上位硬化面は，軌道敷の路盤面に伴う可能性がある．

⑤ 黒髪北地区1912調査地点（図14－４）

黒髪北地区1912調査地点では，屋外プール廻りのブロック塀改修に係る工事に伴う工事立会を実施した（本書Ⅱ章参照）．プール南東角で地表下0.6mから，１×１mの範囲に南北に軸を持つ煉瓦基礎が検出された．本煉瓦の表面には「熊本監獄製造」印が確認でき，第五高等中学校に関連する建物の基礎であることが分かる．『第五高等中学校一覧』の第五高等中学校全図で確認したと

写真122　薬莢検出状況（北より：9406調査地点）

ころ，位置関係から，本遺構が明治23年（1890）に竣工した木造平屋建ての「第一教師館」の煉瓦基礎であることが判明した．五高時期の校舎で木造建築に煉瓦基礎を使用している例が考古学的に判明したのは初めてである．明治～昭和初期，木造建築の基礎部分に煉瓦を使用することは頻繁にあり，熊本大学構内の調査でも，黒髪北地区1429他調査地点では1908年に竣工した「熊本高等工業学校旧本館」，大江北地区1806調査地点では1925年に竣工した「熊本薬学専門学校薬化学動植物科学実験室」がいずれも上屋は木造であるのに対し基礎に煉瓦を使用していたことが確認されている（大坪編2018）．

⑥黒髪北地区9406調査地点（図14－１）

1994年度には，黒髪北キャンパス北西に広がる武夫原運動場への集水桝埋設工事に伴う工事立会を実施している．計12か所のトレンチのうち最北にあたるＢ－10区では地表下約1.3mより，薬莢が47点折り重なるようにして検出された（写真122）．薬莢は「マルティニ・ヘンリー銃」の薬莢で，いずれも撃針痕があり，ボディには布片が充填されている．また，弾頭は確認できず，銃の装填訓練用の擬製弾と想定される．五高時期に使用されたものと考えられるが，その詳細については別稿にて述べたい．

３．黒髪南地区における近代遺跡の調査事例

黒髪南地区は，黒髪北地区の南に県道337号線を跨いで隣接する．その敷地は明治39年（1906），第五高等学校工学部が独立して設立した熊本高等工業学校の敷地を包括する．太平洋戦争下の昭和24年（1944）には専門学校令が見直されたことに伴って，熊本工業専門学校に改められ，戦後，昭和24年（1949）に熊本大学の設置に伴い，熊本大学工学部に移管された．この間，敷地は徐々に拡充し，現在では大学本部，工学部，理学部の校舎が立ち並んでいる．本区構内の近代建築として，煉瓦造りの旧熊本高等工業学校機械実験場（現工学部研究資料館）や鉄筋コンクリート造りの旧熊本高等工業学校本館（現本部）があり，前者が平成６年（1994）に国の重要文化財に指定され，後者が平成10年（1998）に登録有形文化財に登録されている（写真123・124）．このほか，煉瓦造りの書庫（現文書館）や鉄筋コンクリート造りの旧標本館（現黒髪南Ｃ１）が明治・大正期の建築として現存する（写真125・126）．以下に本地区の近代の調査事例を概説する．

①　黒髪南地区1310調査地点（図14－15）

黒髪南地区の理学部等周辺道路部分ではライフライン再生工事に伴う発掘調査を実施した（大坪編2015）．遺跡の主な時期は縄文時代および奈良・平安時代であったが，狭い範囲で近代に関わる遺構・遺物を発見している．理学部４号館の東側道路部に位置するⅢ４・５区では近代の栗石基礎を検出した（写真127）．主軸は北で53°東に傾いており，栗石には拳大の円礫が使用され，その円礫の間には細かい川砂が散布されていた．『熊本高等工業学校一覧』の熊本高等工業学校平面図と比較したところ，本調査地周辺には熊本高等工業学校の学生寮である「工友寮」が設置されていることが分かった．工友寮の東寮は明治44年に竣工しており，発見された栗石基礎は大正３年に竣工した工友寮西寮に付属する炊事場の基礎に相当することが分かった．2019年度の1921調査地点でも狭隘な調査区から栗石基礎が確認されており，こちらは工友寮東寮の基礎と推定される（本書第Ⅱ章）．

また，Ⅲ５区から北に15mの位置にあるⅢ３・９区では，近代の土坑の中から大量の陶磁器が発見された（写真128）．当初は持ち帰らず現地にて廃棄する予定であったが，この中に「工友寮」と描かれた小碗が確認できたことから，本土坑内の遺物の多くを取り上げ保管することとした．多くは銅板転写技法を用いた磁器で，明治20年代以降のものと思われる．筆による染付磁器はごく少量で，近代における磁器の大量生産化と，消費地における利用状況の実態を知る上で貴重な資料となりえる．このほか，本調査地点の北東端のⅡ10－２区およびⅡ12区では，上部に煉瓦片を伴う栗石基礎を検出しているが，その由来は不明である（写真129）．

さらに，Ⅴ５区では，地表下約２mのヒューム管廃土中より，第二次世界大戦時の焼夷弾が見つかっている．焼夷弾は長さ47cm，断面六角形の筒形で，M69焼夷弾だと推測できる．片側端部に信管が付いており，筒先端は落下時の衝撃で歪んでいた．昭和20年（1945）７月１日に，B29の焼夷弾攻撃により，熊本市街地は大きな被害を受けた．管見の限り，大戦時，熊本高等工業学校が焼

写真123　旧熊本高等工業学校機械実験場（北東より）

写真124　旧熊本高等工業学校本館（北より）

写真125　旧熊本高等工業学校書庫（南西より）

写真126　旧熊本高等工業学校標本館（北より）

写真127　工友寮炊事場栗石基礎検出状況（北より：1310調査地点）

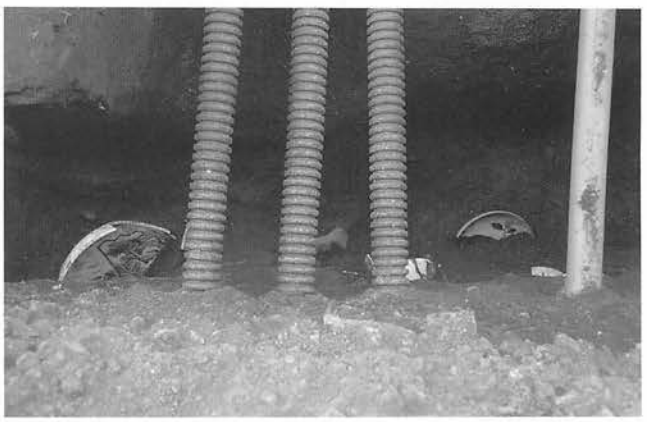


写真128　工友寮関連遺物出土状況（東より：1310調査地点）

写真129　栗石基礎検出状況（南より：1310調査地点）

夷弾攻撃の被害を受けたという記録はない．本資料はどこからか運ばれてきた焼夷弾の筒が，後世になって廃土中に混じったものと考えられる．なお，焼夷弾の中身のナパーム剤は残存しておらず，熊本県北警察署と自衛隊の許可のもと取り上げを実施している．焼夷弾は，白川を間に挟んで対岸に位置する渡鹿地区でも出土例がある．体育館の耐震改修工事などに伴う発掘調査（大江地区0819調査地点）において，焼夷弾３点が発見されている（大坪編2017）．渡鹿地区は明治33年（1900）から渡鹿練兵場として利用されており，敷地の一部は昭和20年７月１日の焼夷弾攻撃を受けたという記録があり，遺物はこ

写真130　Ⅰ区煉瓦基礎検出状況（北西より：1429他調査地点）

写真131　Ⅰ区コンクリート基礎掘方内瓦礫検出状況（南より：1429他調査地点）

写真132　Ⅱ区熊本高等工業学校初代本館基礎検出状況（北より：1429他調査地点）

写真133　Ⅳ２区建物内独立柱基礎検出状況（南より：1429他調査地点）

の際のものだろう．上記資料も含めて今年度刊行予定の発掘調査報告書で詳細を述べることとする．

② 黒髪南地区1429他調査地点（図14－12）

2015年度には黒髪南地区の本部改修に係る工事に伴う発掘調査を実施した．本部周囲からは煉瓦・コンクリート基礎が広い範囲に検出された．大学史を確認したところ，これらは明治41年（1908年）に竣工した熊本高等工業学校の初代本館の基礎であることが判明した．初代本館は木造２階一部３階建てで，事務室や実験室，階段教室等を持つ重要な施設だった．しかし，大正11年（1922）の火災によって建物が全焼し，大正14年（1925）に，現在の鉄筋コンクリート造りの校舎が新設されたという経緯がある．この火災の様子は当時の地方紙や全国紙にも掲載されており，大学や地域にとって重大な事件であったことが分かる（九州日日新聞1922）．

当センターでは検出した基礎と，これに伴う遺物が地域紙や大学史にとって特に重要であると判断し，熊本県や熊本市との協議の結果，近代遺構について発掘調査を実施する運びとなった．本部西側のⅠ区では建物西壁に沿って南北約６ｍに煉瓦基礎が検出された（写真130）．また，建物壁際では現在の建物西壁に沿うようにして，基礎掘方埋土中から大量の煉瓦とコンクリート破片が散在した状態で検出された（写真131）．これは現在の建物を建てる際に初代本館の煉瓦・コンクリート基礎を破砕し，基礎掘方内へ廃棄した状況と推察できる．一方，最も広い調査区である本部南側のⅡ区からは東西方向に17.2ｍの範囲で煉瓦基礎が検出された（写真132）．一部南側へ東西約1.8ｍの張り出し部が確認できたほか，北側には１辺0.7ｍの独立基礎を掘方のみの遺構も含めて６基検出できた．初代本館の復元研究をおこなった磯田桂史の作成した平面図と照合したところ（磯田・伊藤2009），これらの基礎が初代本館の建物中央部南壁，階段，そして室内の柱の基礎であることが確認できた．また，本部の床下にあたるⅣ２区では，４つの独立柱基礎が良好な状態で検出されている（写真133）．Ⅱ・Ⅳ区の煉瓦周囲または煉瓦直上の覆土には灰や炭が混じっており，その中からは熱を受けて変形したガラス片や炭化した木材片，鉄釘など初代本館の部材が見つかったほか，陶磁器，硯，ガラス実験器具片，陶製碁石が出土した．

発掘調査の成果により，校舎の建築，焼失，建替えの３つの時期の様相を追うことができた．大正12年（1923）９月１には関東大震災が発生したことにより煉瓦建築が減少傾向となり，全国的に鉄筋コンクリートの建築が普及する．初代本館の焼失から現本館の竣工の間に大きな

写真134　土坑墓群検出状況（南より：1309調査地点）

写真135　Ⅲ区西側煉瓦基礎検出状況（南より：1724調査地点）

写真136　Ⅲ区東側煉瓦検出状況（北より：1724調査地点）

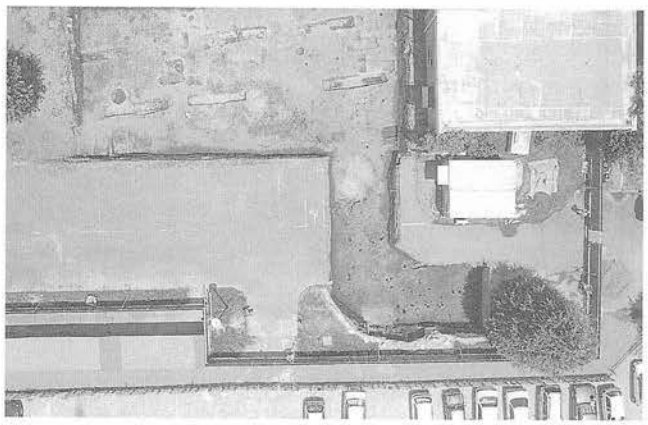


写真137　遺構完掘状況（南より：0102調査地点）

地震をはさんでおり，こうした火災，地震といった災害に強い構造の校舎が建てられた経緯がうかがえる（以上，山野2018a を引用・一部改変）．

③　黒髪南地区1309他調査地点（図14－16～19）

黒髪南地区の南西に位置する国際先端科学技術研究拠点施設周辺では，建物の新設に伴い発掘調査が実施されてきた（9909・0203・1309・1418調査地点）．このうち2013年度に実施された黒髪南地区1309調査地点の調査区東側では地表下約2.5mにおいて，南北に主軸を持つ100基を超える近代土坑墓が検出されている（写真134，山野・柴田編2018）．土坑墓はほぼ全て円形プランで，検出面からの深さが約1.8mであった．人骨はその底部に座葬の姿勢で埋葬されていた．土坑埋土中には木材や植物繊維が残存している例があり，鉄釘も埋土中に検出されたことから，早桶や木棺が埋葬施設に用いられたと考えられる．大学の所管関係資料や地図，文献と出土遺物の内容などから，本土坑墓群が明治39年から昭和20年頃の熊本監獄・刑務所の囚人の墓であることが判明している．現在，本調査地南側には「熊本刑務所之廟」が隣接しており，明治14年（1881）建立の石碑などから，明治13年頃には調査区周辺が熊本監獄の埋葬地として利用されていた可能性が高い．取り上げられた134体の人骨のうち埋葬人骨の約９割が男性であり，当時の囚人の男女割合と整合性が取れている．

熊本県のみならず，全国的に近代の墓の調査例は少なく，監獄・刑務所の調査は稀有である．本調査地点の成果は，囚人墓という特殊な墓の実態を知る上でも，近代の埋葬方法の変遷過程の実情を知る上でも重要である．

④　黒髪南地区1724調査地点（図14－14）

1724調査地点では，熊本地震で被災した工学部１号館の跡地への校舎新設工事に伴う発掘調査を実施した（大坪編2019）．東西約100mの調査地点の東半に相当するⅢ区では，煉瓦基礎が西と東の２か所で検出されている（写真135・136）．西側のＡ地点では南北に主軸を持つ，幅0.9mの煉瓦基礎が南北約2.5mにわたり確認された．また，Ⅲ区東端では地表下0.2mより，南北に主軸を持つ煉瓦基礎が４×４mの広範囲に検出された．『熊本高等工業学校一覧』の熊本高等工業学校平面図と照合したところ，本煉瓦基礎は1908年に竣工した「特別試金室」の基礎であると考えられる．特別試金室は，採鉱冶金学科の実習を実施していた施設で，建物内には熔炉など，金属鉱石に係る様々な装置が敷設されていた．建物は平屋建て煉瓦造りで，建物東側にはボイラー用の煉瓦造り煙突が付随していた．Ⅲ区東端で検出された煉瓦基礎は，

南北軸の煉瓦基礎の東側に連結した煉瓦基礎が張り出していることから，建物東壁とボイラー煙突南側に当たる基礎であると想定できる．

⑤　黒髪南0102調査地点（図14－８）

0102調査地点では，基幹・環境整備工事に伴って発掘調査を実施した．調査区の北半では東西方向に３条，南北に２列，計６基の長方形の坑が検出されている（写真137）．幅１ｍ，長さ5.5～６ｍ，深さ１ｍで，小口側に３段ほどの階段状の掘方を持つことから塹壕と考えられるが，遺物の出土もなく，時期など詳細は不明である．本地点周辺は運動場として昭和３年（1928）に熊本高等工業学校の敷地に取り込まれているが，それ以前は民家の敷地であった．太平洋戦争前後の軍事演習などで使用した塹壕の可能性もある．

⑥　黒髪南1823・1903調査地点（図14－10・11）

1823・1903調査地点では，熊本地震により被災をうけた工学部研究資料館の基礎構造補強に伴う工事の工事立会・発掘調査を実施している（本書Ⅱ章）．工学部研究資料館は，熊本高等工業学校時代の機械実験工場である．1903調査地点では，建物内部壁基礎の周囲を掘削したところ，床下に近代の遺構群を検出した．すなわち柱掘方・旧ボイラー煙道，束石基礎，床下基礎，階段基礎，機械基礎などである．検出状況から，建物の建築時，機械搬入時，床面張替えに伴う改修時の３つの段階の様相を復元することができる．また，1823調査地点では建物西側の小資料室およびミーティングルームの各内壁に沿った掘削を実施し，前者では旧ボイラー基礎および煙道を検出した．煙突はすでに撤去されて存在しないが，これに係る地下施設は地下で保存された状態にあった．煙道には耐火煉瓦が使用されており，既往の大学構内調査はもちろん熊本県下でも出土例の少ない資料として貴重である．

４．おわりに

以上，熊本大学黒髪地区における近代の遺跡の調査成果について概観した．黒髪北地区では第五高等学校に係る石垣や煉瓦建築の調査，黒髪南地区では熊本高等工業学校に係る煉瓦建築，工友寮関連建築・遺物，熊本監獄・刑務所の墓地などが発見されている．

熊本大学の敷地は，明治から現代にわたり教育機関の学び舎として長く活用されてきた．明治維新後，近代化の波の中で諸外国と張り合えるよう，高い教養を持ちつつ，各種実務をこなし指導できる専門性を持った人材の育成に，第五高等学校という教育機関が大きな役割を持った．また，日清・日露戦争を経て，急速に発展する近代産業の従事者を育成するために熊本高等工業学校が大きな一躍を担っていた．これら先人の営みの痕跡である大学構内の遺構や遺物は地域にとってとくに重要な埋蔵文化財である．

文献資料の乏しい時代と比較すると，近代遺跡は，当時の文献や地図と検証することでその歴史について補完できるという優位点がある．遺跡から出土した遺構や遺物という骨格に，文献記録という情報が肉付けされ，より生き生きとした具体的な歴史を復元することが可能となる．また，遺跡の状況と文献の記載との整合性が取れない場合もあり，その意味を考察することも重要である．埋蔵文化財調査センターではこれまでに近代の遺跡の展示を継続して開催してきた．2016年度の速報展では『RENGA－遺跡から見えた近代－』と題し，近代の煉瓦建築に焦点を当てた展示を開催している．観覧者の反応は様々で，縄文時代のような古い時代にロマンを感じ，探求心を持つ方が多い一方で，近代の話に熱心に耳を傾け，質問し，往時の生活を語る方々が多いことに気づかされる．近代という時代は，自身や家族も含めて身近な時間軸にあり，現在の土地利用の延長線上にあるため，来館者の琴線に触れやすいのである．また，近代遺跡のデータは，学問的にも建築学や歴史学などの分野に寄与するところが大きい．現状，全ての近代遺跡の調査を実施することは困難であるが，その遺構や遺物の由来を把握し，調査方法などを吟味した上で，必要な情報を記録保存していく必要があるだろう．

（文責：山野）

謝辞

黒髪北地区9406地区出土の薬莢について，高谷和生氏，高橋信武氏，山本達也氏に薬莢の種類の同定と遺物の性格について貴重な所見を頂いた．末尾ながら記して感謝申し上げる．

（引用・参考文献）

麻生貴裕・伊藤重剛　2013「旧第五高等中学校の建築図面に関する研究」『熊本大学五高記念館館報』２　pp.97－100　熊本大学五高記念館

磯田桂史・伊藤重剛　2009「熊本高等工業学校本館の復元的研究」『日本建築学会計画系論文集』第74巻　第640号　日本建築学会

大坪志子編　2015『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報』20　2013年度　熊本大学埋蔵文化財調査センター

大坪志子編　2017「Ⅶ　渡鹿地区の調査」『熊本大学構内遺跡発掘調査報告』Ⅻ　pp.205－225　熊本大学埋

蔵文化財調査センター
大坪志子編　2018『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報』23　2016年度　熊本大学埋蔵文化財調査センター
大坪志子編　2019『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報』24　2017年度　熊本大学埋蔵文化財調査センター
小野田滋・清水慶一・久保田稔男　1996「鉄道構造物におけるフランス積み煉瓦の地域性とその特徴」Bulletin of the National Science Museum Ser. E Physical Sciences & Engineering (19), 1－15, 1996　国立科学博物館
九州日日新聞　1922「熊本高工本館焼失」　10月12日掲載
熊本大学工学部研究資料館図録編集委員会編　2017『熊本高等工業学校－熊本大学工学部研究資料館図録』熊本大学工学部・熊本大学工業会
熊本大学五高記念館図録編集委員会　2007『第五高等学校－熊本大学五高記念館図録』　熊本大学五高記念館
五高創立七十周年記念会編　1957「高中時代：明治二十年から明治廿七年まで」『龍南への郷愁』　pp.14－40　五高創立七十周年記念会
清水肇・村上有慶　2007「戦争遺跡詳細調査と近代化遺産総合調査にみる沖縄県の戦争遺跡の把握状況」『日本建築学会技術報告集』第13巻第25号　pp.309－312　日本建築学会
新熊本市史編纂委員会編　1997『新熊本市史　史料編』
野口孝俊・浦本康二・鈴木武　2015「明治期に建設された東京湾砲台群における煉瓦の調達に関する一考察－第二海堡跡煉瓦構造物調査－」『土木学会論文集Ｄ２(土木史)』Vol.71　№1　pp.1－10　土木学会
濵田耕作　1922「第二章　考古学の範囲及び目的」『通論考古学』　pp.13－21　雄山閣
文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編　2010「付編　埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取り扱いについて（報告）」『発掘調査のてびき－整理・報告書編－』pp.248－258　文化庁文化財部記念物課
松田光太郎編　2017「３．（黒髪北）総合研究棟（黒髪北Ｎ９）改修工事に伴う立会調査（1528調査地点）」『熊本大学構内遺跡発掘調査報告』Ⅻ　pp.45－56　熊本大学埋蔵文化財調査センター
水野信太郎　1999「第６章　煉瓦の組積方法」『日本煉瓦史の研究』　pp.243－256　法政大学出版局
山野ケン陽次郎2018a「熊本大学構内遺跡における煉瓦建築の考古学的調査」『平成30年度九州考古学会総会研究発表資料集』　pp.21－30　九州考古学会
山野ケン陽次郎　2018b「第Ⅲ章　平成28年度熊本地震に係る煉瓦等落下物に関する調査報告」『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報』23　2016年度　熊本大学埋蔵文化財調査センター
山野ケン陽次郎・柴田亮編　2018『熊本大学構内遺跡発掘調査報告』Ⅻ　熊本大学埋蔵文化財調査センター

第Ⅳ章　文化財活用活動の記録

埋蔵文化財調査センターは，1994年より実施している熊本大学構内遺跡の調査成果やその重要性について，生涯教育での活用を目的とし，展示などの活動を通じて大学内外に発信している．

本センターでは，2013年よりセンター１階の展示室での企画展示を実施している．７回目となる2019年度の企画展示では黒髪キャンパスにおける既往の調査成果をまとめた特別展示を開催した．このほか，列記する以下のイベントなどを通して，文化財の活用事業を実施した．

１．特別展示『黒髪のむかし展』

＜開催期間＞

2019年11月１日（金）～2020月４月24日（金）

＜開催場所＞

埋蔵文化財調査センター展示室

＜概要＞

黒髪キャンパスでは発掘調査によって縄文時代，古代（奈良・平安時代），近代の注目すべき調査成果が見つかりました．縄文時代の遺跡からは縄文人骨の伴う配石墓や，土器・石器などの廃棄場が発見され，河岸段丘上に縄文時代の集落が存在したことをうかがい知ることができます．展示では土器や石器などの実物に加え，これらをイラストや模式図を使って解説しました．

来場者からは，「熊大の下にこんなにいろんなものが埋まっていることにびっくりしました」や「熊大・黒髪の地は多くの人々の一生懸命に生きてきた大切な場所だということに気づかされました」などのご意見を頂きました．2019年11月８日には展示説明会を実施し，20名の来場者がありました．展示開催期間中に学内外から約160名の来場者がありました．

写真138　特別展示の解説の様子

２．熊本市歴史ウォークへの協力

＜開催期間＞

2019年４月21日（日）

＜開催場所＞

埋蔵文化財調査センター，黒髪南キャンパス

＜概要＞

熊本市教育委員会文化振興課が主催したイベント「熊本市歴史ウォーク」に協力しました．

黒髪周辺を巡るコースの中に黒髪南キャンパスとセンター展示室の見学を組み込み，縄文時代遺跡と近代の煉瓦建築を中心として解説をおこないました．イベントには約40名が参加されました．

写真139　熊本市歴史ウォークの展示説明の様子

写真140　熊本市歴史ウォークの縄文遺跡説明の様子

３．日韓新石器時代研究会での資料見学会

＜開催期間＞

2019年７月14日（日）

＜開催場所＞

熊本大学文学部棟

＜概要＞

「日韓新石器時代研究会」において熊本大学構内遺跡黒髪南地区1310調査地点で出土した縄文時代後期の土器資料の見学会を開催しました．

写真141　日韓新石器時代研究会資料見学会の様子

4．熊本大学オープンキャンパス2019

＜開催期間＞

2019年８月３日（土）

＜開催場所＞

埋蔵文化財調査センター展示室

＜概要＞

熊本大学を紹介するオープンキャンパスでは，高校生や保護者に対して，埋蔵文化財調査センター展示室を開放し，構内遺跡と調査成果・文化財保活動の様子を紹介しました．42名の来場者がありました．

写真142　オープンキャンパスの様子

5．ホームカミングデー2019

＜開催期間＞

2019年10月27日（日）

＜開催場所＞

黒髪キャンパス，埋蔵文化財調査センター展示室

＜概要＞

熊本大学の卒業生を母校に迎えるホームカミングデーでは，黒髪キャンパスの正門など重要文化財２カ所と，４つの発掘調査地点を巡り，埋蔵文化財調査センターで展示をご覧いただいた．10名の参加者がありました．

写真143　ホームカミングデーの様子

6．授業協力

＜日時＞

2019年４月23日（火）

＜内容＞

木下尚子先生（文学部）　史学概論

＜概要＞

熊本大学文学部で開かれた共通教育の授業で４班に分かれて黒髪南地区の過去の発掘調査地点と埋蔵文化財調査センター展示室を巡りました．受講者は学生60名でした．

Summary

The number of investigations in the fiscal year 2019 is the following: 3 excavation, 19 presence investigation, and 1 independent investigation. The main results are the following.

At 1823, 1903 excavation spots in the Kurokamimachi sites (south area), we excavated the site before the performing the Reinforcement of foundation structure of Engineering School Museum. This museum is the Kumamoto Technical High School's Machine Laboratory that completed in 1908. We discovered pits for erecting posts, the flue of old boiler, the basis of footing floor posts, from under the floor. It is possible to restore the building architecture and the emplacement of machine, the state of renovation from the detection status of the remains. It is important that we discovered a variety of a fire brick from the boiler because of it is rare in Kumamoto.

At 1904 excavation spot in the Honjo site (north area), we excavated the site before performing environmental improvement. We had to excavate because there were many works with a deep construction depth, such as the installation of a porous measure. We discovered road in Edo period and Modern period, ditch and pit buildings in Heian period on this survey. This survey continues until next year, and it will complement the previous surveys and provide new data.

At 1911 excavation spot in the Honjo site (central area), we excavated the site before performing the lifeline renovation. The survey mainly focused on the south road part of the Area. We discovered pits, pit buildings, ditch, road from Kofun period to Heian period, and fundamental of building of Modern period on this survey. Although the survey of lifeline has a narrow survey range, it is possible to understand the soil accumulation status in a wide range. This survey continues until next year, in the future, we will be able to obtain useful data for advancing surveys in the surrounding area.

By the end of this fiscal year, almost all the surveys for the buildings that were damaged by the Kumamoto earthquake have been completed. We would like to organize the results of these surveys and run into future surveys.

2019년도에 실시한 조사 건수는 발굴조사 3건, 입회조사 19, 자주적 입회조사가 1건이다. 주된 조사 성과는 다음과 같다.

쿠로카미 남지구 1823・1903조사지점에서는 공학부 연구자료관 기초구조 보강공사에 따른 발굴조사를 실시했다. 공학부 연구자료관은 1908년에 준공된 쿠마모토고등공업학교 시대의 기계 실험장이다. 바닥 밑에서 기둥 구멍, 구 보일러 연도, 주춧돌 등이 노출되었다. 유구의 검출 상황으로부터 건물 건축, 기계반입, 바닥면 교체에 따른 개수 상황의 복원이 가능하다. 또한 연도에서는 다양한 내화벽돌이 출토되었는데, 쿠마모토현에서는 출토예가 적은 자료로서 귀중하다.

혼죠 북지구 1904조사지점에서는 환경정비에 관련된 공사에 따른 발굴조사를 실시했다. 집수정되의 설치 등 시공 심도가 깊은 공사가 많아 유구를 굴착할 필요가 있었다. 본 조사에서는 근세・근대의 도로 유구와 고대의 도랑이나 수혈주거가 노출되었다. 조사는 다음 년도까지 이어져 지금까지 실시한 조사 내용를 보완하고 동시에 새로운 데이터를 제공해 줄 것이다.

혼죠 중지구 1911조사지점에서는 라이프라인 재생공사에 따른 조사를 실시했다. 주로 이 지구의 남쪽 도로부분을 조사했다. 본 조사에서는 고분시대부터 고대의 주혈, 수혈주거, 도랑, 도로 등의 유구와 근대의 건물 기초가 노출되었다. 본 조사는 조사구가 트렌치상으로 좁지만 광범위에 이르기 때문에 넓은 범위의 토양퇴적상황을 파악할 수 있다. 조사는 다음 연도까지 계속되며 앞으로 주변 지역에서 조사를 진행하는 데에 유용한 데이터를 얻을 수 있을 것이다.

이번 연도로 쿠마모토지진에 의해 큰 피해를 입은 건물과 관련된 조사는 거의 완료된다. 이번 조사 결과를 정리해 향후의 조사에 임하고자 한다.

付篇１　2019年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

１．熊本大学埋蔵文化財調査センター規則（R2.2.28～）

（趣旨）

第１条　この規則は，熊本大学学則（平成16年４月１日制定）第９条第２項の規定に基づき，熊本大学埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という．）に関し必要な事項を定める．

［熊本大学学則（平成16年４月１日制定）第９条第２項］

（設置目的）

第２条　センターは，熊本大学（以下「本学」という．）に所在する遺跡を発掘調査するとともに，出土した埋蔵文化財を記録，研究，保存及び活用し，もって本学の教育研究に寄与することを目的とする．

（業務）

第３条　センターは，次に掲げる業務を行う．

(1)　埋蔵文化財調査の実施計画の立案及び実施に関すること．

(2)　出土した埋蔵文化財の整理・研究，保管及び保存に関すること．

(3)　文化庁等に提出する報告書の作成に関すること．

(4)　埋蔵文化財に係る考古学的知見等に基づく教育に関すること．

(5)　その他センターの目的を達成するために必要な事項

（職員）

第４条　センターに，次に掲げる職員を置く．

(1)　センター長

(2)　専任教員

(3)　その他必要な職員

（センター長）

第５条　センター長の選考は，本学の専任の教授のうちから，第７条に規定する委員会の推薦を受けて，学長が行う．

２　センター長は，センターの業務を掌理する．

３　センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない．

４　センター長に欠員が生じた場合の補欠のセンター長の任期は，前項の規定にかかわらず，前任者の残任期間とする．

（専任教員）

第６条　専任教員の選考は，熊本大学学内共同教育研究施設等の人事等に関する委員会の意見を聴いて，学長が行う．

２　専任教員の選考に関し必要な事項は，別に定める．

（委員会の設置）

第７条　センターの管理運営に関する事項を審議するため，熊本大学埋蔵文化財調査センター運営委員会（以下「委員会」という．）を置く．

（委員会の組織）

第８条　委員会は，次に掲げる委員をもって組織する．

(1)　センター長

(2)　センターの専任教員

(3)　大学院教育学研究科から選出された教授又は准教授　１人

(4)　大学院人文社会科学研究部から選出された教授又は准教授　２人

(5)　大学院先端科学研究部から選出された教授又は准教授　２人

(6)　大学院生命科学研究部の医学系又は病院から選出された教授又は准教授　１人

(7)　大学院生命科学研究部の保健学系及び薬学系から選出された教授又は准教授　各１人

(8)　発生医学研究所，生命資源研究・支援センター又はヒトレトロウイルス学共同研究センターから選出された教授又は准教授　１人

(9)　施設部施設管理課長

(10)　その他センター長が必要と認めた者　若干人

2　前項第３号から第８号まで及び第10号の委員は，学長が委嘱する．
3　第１項第３号から第８号までの委員の任期は，２年とし，再任を妨げない．
4　第１項第３号から第８号までの委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は，前項の規定にかかわらず，前任者の残任期間とする．
5　第１項第10号の委員の任期は，学長が委嘱の都度定めるものとし，再任を妨げない．
（委員会の審議事項）
第９条　委員会は，センターに関する次に掲げる事項（熊本大学学内共同教育研究施設等の人事等に関する委員会規則（平成16年４月１日制定）第３条に定める事項を除く．）を審議する．
［熊本大学学内共同教育研究施設等の人事等に関する委員会規則（平成16年４月１日制定）第３条］
(1)　センターの業務に関すること．
(2)　センター長候補者の推薦に関すること．
(3)　施設及び予算に関すること．
(4)　その他センターの管理運営に関すること．
（委員長）
第10条　委員会に，委員長を置き，センター長をもって充てる．
2　委員長は，委員会を招集し，その議長となる．
3　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する．
（議事）
第11条　委員会は，委員の過半数が出席しなければ，議事を開き，議決をすることができない．
2　委員会の議事は，出席した委員の過半数をもって決し，可否同数のときは，議長の決するところによる．
（意見の聴取）
第12条　委員長は，必要があるときは，委員以外の者を委員会に出席させ，意見を聴くことができる．
（事務）
第13条　センター及び委員会の事務は，施設部施設企画課において処理する．
（雑則）
第14条　この規則に定めるもののほか，センターの運営に関し必要な事項は，センター長が別に定める．

附　則
1　この規則は，平成23年10月１日から施行する．
2　国立大学法人熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則（平成16年４月１日制定）及び熊本大学埋蔵文化財調査室要項（平成16年４月１日制定）は，廃止する．
3　この規則施行後，最初に任命されるセンター長は，第５条第１項の規定にかかわらず，この規則により選考されたものとみなす．
4　この規則施行後，最初に任命されるセンター長の任期は，第５条第３項の規定にかかわらず，平成25年３月31日までとする．
5　この規則施行後，最初に委嘱される第８条第１項第３号及び第４号の委員の任期は，同条第３項の規定にかかわらず，平成25年３月31日までとする．

附　則（平成24年12月27日規則第142号）
この規則は，平成25年４月１日から施行する．
附　則（平成27年３月13日規則第94号）
この規則は，平成27年４月１日から施行する．
附　則（平成28年２月５日規則第９号）
この規則は，平成28年４月１日から施行する．
附　則（平成28年３月１日規則第30号）
この規則は，平成28年４月１日から施行する．
附　則（平成28年９月23日規則第404号）
この規則は，平成28年９月23日から施行する．
附　則（平成29年３月31日規則第153号）

この規則は，平成29年４月１日から施行する．
　附　則（平成30年３月22日規則第177号）
この規則は，平成30年４月１日から施行する．
　附　則（平成31年３月28日規則第264号）
この規則は，平成31年４月１日から施行する．
　附　則（令和２年２月28日規則第14号）
この規則は，令和２年２月28日から施行する．

２．2019年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

１　埋蔵文化財調査センター組織

＜センター長＞（併・大学院人文科学研究部教授）		伊藤　正彦（2017.4.1～）
＜専任教員＞		大坪　志子
		新里　亮人
		山野　ケン陽次郎
＜技術補佐員＞	（2017年４月～）	士野　雄貴
＜事務補佐員＞	（2019年７月～10月）	山田　由紀
	（2019年12月～2020年３月）	福田　由美香
＜室内作業員＞	（2019年４月～2020年３月）	井上　裕美
		小山　正子
		首藤　優子
		末吉　美紀
		園田　智子
		増井　弘子
		江口　路
		鬼塚　美枝
	（2019年５月～６月）	植田　裕子

２　埋蔵文化財調査センター運営委員会

委員長	伊藤　正彦	（埋蔵文化財調査センター長）	任期（2019.4.1～2021.3.31）
委員	小畑　弘己	（大学院人文社会科学研究部教授）	（2019.4.1～2021.3.31）
	神野　雄二	（大学院人文社会科学研究部教授）	（2019.4.1～2021.3.31）
	平田　元	（大学院法曹養成研究科教授）	（2019.4.1～2021.3.31）
	望月　伸竜	（大学院先端科学研究部准教授）	（2019.4.1～2021.3.31）
	伊東　龍一	（大学院先端科学研究部教授）	（2019.4.1～2021.3.31）
	福田　孝一	（大学院生命科学研究部医学系教授）	（2019.4.1～2021.3.31）
	米田　哲也	（大学院生命科学研究部保健学系准教授）	（2019.4.1～2021.3.31）
	渡邊　高志	（大学院生命科学研究部薬学系教授）	（2019.4.1～2021.3.31）
	古嶋　昭博	（生命資源研究・支援センター）	（2019.4.1～2021.3.31）
	田鍋　和仁	（施設部施設管理課長）	（2019.4.1～）
	伊藤　正彦	（埋蔵文化財調査センター長）	（2019.4.1～2021.3.31）
	大坪　志子	（埋蔵文化財調査センター専任教員）	
	新里　亮人	（埋蔵文化財調査センター選任教員）	
	山野ケン陽次郎	（埋蔵文化財調査センター専任教員）	

審議事項
2019年５月28日　　議題
　　１）埋蔵文化財調査センター規則の改正について

2）令和元年度埋蔵文化財包蔵地における土木工事予定一覧について
3）令和元年度埋蔵文化財調査センター予算配分（案）について
4）その他
報告
1）平成30年度埋蔵文化財発掘調査結果一覧について
2）平成30年度埋蔵文化財調査センター予算の支出実績について
3）埋蔵文化財発掘調査中に発生した安全問題・毀損事故について

付篇２　埋蔵文化財調査センター2019年度調査・研究活動記録

大坪志子

＜論文等＞

・「九州における縄文時代早期の石製装身具小論」『先史学・考古学論究』Ⅷ，龍田考古会，pp.45－54.
・「吉武高木遺跡出土勾玉の再検討」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－を語る』発表要旨集，「新・日韓交渉の考古学－弥生時代」研究会，pp.78－83.
・「九州における弥生勾玉の系譜」『考古学研究』66－1，考古学研究会，pp.24－40.
・『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報』25，熊本大学埋蔵文化財調査センター（編集：大坪志子）.

＜科学研究費＞

・『九州縄文時代後晩期における玉と縄文文化の実証的研究』平成29～令和２年度科学研究費補助金　基盤研究（B）（研究代表者）.
2019年７月５日～７月31日　三万田東原遺跡発掘調査.
2019年12月２日～2020年１月10日　三万田東原遺跡発掘調査.

＜研究発表等＞

・「吉武高木遺跡出土勾玉の再検討」新・日韓交渉の考古学－弥生時代－　第３回共同研究会（2019.8.24－25. 大崎歴史博物館）.

＜その他＞

・鹿児島県木佐木原遺跡出土品に関する指導助言（2019.11.5，鹿児島県立埋蔵文化財センター）.
・八代市文化財保護員会（2019年10月16日，八代市鏡コミュニティセンター）.
・長崎県原の辻遺跡調査指導委員会（2019年12月５日，長崎県埋蔵文化財センター）.
・熊本県益城町大辻遺跡出土の石製装身具の石材分析・指導助言（2020年１月27日，埋蔵文化財調査センター）.
・「泗水町の三万田で遺跡調査」『いぶき』JA 菊池広報誌 vol.369，p10.

新里亮人

＜論文等＞

・「徳之島の窯業生産からみた琉球列島と韓半島の交流」大伽耶海洋交流史再照明事業　国際学術大会『古代船路を通した琉球と韓半島の文化交流とその現代的意義』，p54.
・「南方：琉球列島と東アジアの交流史」『季刊考古学』150号　雄山閣　pp.125－128.
・「南島谷水田考」『先史学・考古学論究』Ⅷ，龍田考古会　pp.157－170.

＜研究紹介・会議報告・新聞掲載記事＞

・「水中遺跡の保護に関する調査と研究」『大学と埋蔵文化財～キャンパスの遺跡・発見された文化財の魅力～』　広島大学総合博物館　p30.
・「平成28年熊本地震復興に係る文化財・埋蔵文化財の成果報告会に参加して」『考古学研究』66－4，考古学研究会　pp.11－15.

・「魅惑の島々、奄美群島～研究成果を地元に④」『南海日日新聞』１月17日　南海日日新聞社　p4.
・「魅惑の島々、奄美群島～研究成果を地元に⑤」『南海日日新聞』１月23日　南海日日新聞社　p4.

＜研究発表＞
・「徳之島の窯業生産からみた琉球列島と韓半島の交流」大伽耶海洋交流史再照明事業　国際学術大会『古代船路を通した琉球と韓半島の文化交流とその現代的意義』　於：琉球大学.
・「琉球列島の農耕関連遺構」『第11回奄美考古学会・第13回九州古代種子研究会合同学会』　於：喜界町役場.

＜その他＞
・新学術領域研究ヤポネシアゲノム全体会議　於：東京都国立科学博物館（2019年５月11日～12日）.
・第３回水中遺跡調査検討委員会（第２期）および第５回協力者会議　於：東京都文化庁（2019年６月12日～13日）.
・徳之島町誌編纂「先史・古代・中世部会」　於：鹿児島県徳之島町生涯学習センター（2019年７月５日～７日）.
・第６回水中遺跡調査検討委員会協力者会議　於：愛媛県今治市（2019年８月29日～31日）.
・第７回水中遺跡調査検討委員会協力者会議　於：奈良県奈良文化財研究所（2019年11月21日～22日）.
・平良原遺跡、大見武古島遺跡の出土遺物および報告書作成に係る指導・助言　於：沖縄県与那原町コミュニュティーセンター（2019年11月25日～27日）.
・伊仙町トマチン遺跡の調査指導　於：鹿児島県伊仙町（2019年12月11日～13日）.
・第８回水中遺跡調査検討委員会協力者会議　於：滋賀県大津市勤労福祉センター（2020年２月12日～13日）.
・大セノ嶺遺跡の植物遺体分析調査の補助および報告書作成に伴う遺物と遺構の指導　於：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室、鹿児島県伊仙町（2020年２月20～25日）.

山野ケン陽次郎
＜論文等＞
・「先史琉球列島における獣形貝製品の研究」『先史学・考古学論究』Ⅷ，龍田考古会　pp.1－16.
・「１．広田下層式貝符の彫刻技術に関する研究」『広田遺跡の研究　人の形質・技術・移動』，熊本大学人文社会科学研究部　pp.241－262.
・「第３章　広田遺跡出土貝製品等の新資料－九州大学総合博物館所蔵資料の報告－」『広田遺跡の研究人の形質・技術・移動』，熊本大学人文社会科学研究部　pp.49－63.
・『熊本大学構内遺跡発掘調査報告』15，熊本大学埋蔵文化財調査センター（編集：吉留広・山野ケン陽次郎）.
・『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報』25，熊本大学埋蔵文化財調査センター（編集・共著：大坪志子・山野ケン陽次郎・吉留広・士野雄貴）.

＜研究発表＞
・「広田遺跡と貝のひみつ」南種子町教育委員会委一般講座　於：広田遺跡ミュージアム　2019年12月８日.
・「広田遺跡の謎を紐解く」たねがしま古代塾　於：広田遺跡ミュージアム　2019年12月８日.

＜科学研究費＞
・『先史時代におけるマリアナ諸島の貝類利用の考古学的研究』平成29～令和元年度科学研究費補助金　若手研究（B）（研究代表者）.
・『３～７世紀の琉球列島における人と文化の交流史研究』平成29～令和元年度科学研究費助成事業　（代表者：木下尚子）.

＜その他＞
・天城町下原洞穴遺跡出土貝製品に関する指導　於：天城町歴史文化産業科学資料センター「ユイの館」（2020年２月27日～29日）.

報告書抄録

ふりがな	くまもとだいがくまいぞうぶんかざいちょうさせんたーねんぽう26
書名	熊本大学埋蔵文化財調査センター年報26
副書名	
巻次	
シリーズ名	熊本大学埋蔵文化財調査センター年報
シリーズ号	26
編著者名	伊藤正彦・山野ケン陽次郎・大坪志子・新里亮人・土野雄貴
編集機関	熊本大学埋蔵文化財調査センター
所在地	〒860-8555　熊本県熊本市中央区黒髪2-39-1　TEL：096-342-3832　FAX：096-342-3832
発行年月日	2021年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
黒髪町遺跡群 (1903地点)	熊本県 熊本市 黒髪	43 201	278	32° 48′ 47″	130° 43′ 46″	20190527 ～ 20190731	147.61㎡	学校敷地内の復興事業に伴う
本庄遺跡 (1904地点)	熊本県 熊本市 本荘	43 201	285	32° 47′ 46″	130° 42′ 46″	20190708 ～ 継続中	6231.10㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
本庄遺跡 (1907地点)	熊本県 熊本市 本荘	43 201	285	32° 47′ 44″	130° 42′ 42″	20191028 ～ 20191206	2954.20㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
本庄遺跡 (1911地点)	熊本県 熊本市 本荘	43 201	285	32° 47′ 39″	130° 42′ 46″	20191209 ～ 継続中	1254.90㎡	学校敷地内の開発事業に伴う

※北緯・東経の数値は世界測地系に基づく値

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒髪町遺跡群 (1903地点)	集落址 近代構造物	古代・近世・近代	竪穴建物・溝・道路・耕作跡・東石基礎・機械基礎・階段基礎・煉瓦廃棄土坑・足場痕跡・旧ボイラー煙道	土師器・須恵器・陶磁器・煉瓦・瓦・ガラス製品	工学部研究資料館
本庄遺跡 (1904地点)	集落址	古代・近世・近代	溝・竪穴建物・道路	土師器・須恵器・陶磁器	
本庄遺跡 (1907地点)	集落址	－	－	－	遺構の掘削はなかった
本庄遺跡 (1911地点)	集落址	古墳・古代 近世・近代	竪穴建物・溝・道路・近代建物基礎	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・ガラス製品	

要約

2019年度に実施された調査件数は、発掘調査３件、工事立会19件、自主的立会１件である。主な調査の結果は次のとおりである。

黒髪南地区1823・1903調査地点では、工学部研究資料館の基礎構造の補強に係る工事に伴う発掘調査を実施した。工学部研究資料館は、1908年に竣工した熊本高等工業学校時代の機械実験工場である。床下からは、柱掘方、旧ボイラー煙道、東石基礎などが検出された。遺構の検出状況から、建物の建築、機械搬入、床面張替えに伴う改修の様子を復元することが可能である。また、煙道からは多様な耐火煉瓦が出土しており、熊本県下でも出土例の少ない資料として貴重である。

本荘北地区1904調査地点では、環境整備に係る工事に伴う工事立会を実施した。桝の設置など、施工深度の深い工事内容が多く、遺構の掘削が必要であった。本調査では近世・近代の道路遺構や、古代の溝や竪穴建物が検出された。調査は次年度まで継続しており、これまでの調査内容を補完するとともに、新たなデータを提供してくれるだろう。

本荘中地区1911調査地点では、ライフライン再生工事に伴う発掘調査を実施した。主として本地区の南側道路部分の調査をした。本調査では、古墳時代から古代のピット、竪穴建物、溝、道路などの遺構や近代の建物基礎が発見されている。ライフラインに伴う調査は広い範囲の土の堆積状況を把握することができる。調査は次年度まで継続しており、今後、周辺地域の調査を進める上で有用なデータを得ることができるだろう。

熊本大学埋蔵文化財調査センター年報26
—2019年度—

令和３年３月29日　印刷
令和３年３月31日　発行

編集兼発行者　熊本大学埋蔵文化財調査センター
熊本市中央区黒髪２－39－１
電話（096）342－3832
印刷所　シモダ印刷株式会社

Published by
Research Center for Buried Cultural Properties,
Kumamoto University
Kumamoto, 2021